

# 篠原遺跡

1987

石川県立埋蔵文化財センター



# 篠原遺跡

石川県立埋蔵文化財センター



## 例　　言

- 1 本書は石川県加賀市篠原町所在の篠原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は主要地方道金沢・小松・加賀線道路改良工事に係る緊急調査で、県土木部の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが昭和55年度に実施した。現地調査は戸淵幹夫（現在、石川県立歴史博物館学芸員）が担当した。現地調査及び資料整理では杉野洋一郎（当時、埋蔵文化財センター調査員）の協力を得た。
- 3 遺物整理は、石川県埋蔵文化財協会（担当一浅野豊子、松田智恵子、馬場正子、北田等美、小間博文、川端敦子、黒田和子、吉村純子、北洋子）に委託して実施した。
- 4 本書の編集は執筆者各員で協議して行った。
- 5 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章、第2章	戸淵 幹夫
第3章第2節	木立 雅朗
第4章第1節・第3節	田嶋 明人
第4章第2節	北野 博司
第3章第1節	田嶋・北野・木立
土器觀察表	田嶋・北野
写真図版	木立
- 6 その他、報告書作成にあたっては山岸康子、広田都、岡本恭一、伊藤雅文の各氏に協力を得た。
- 7 挿図中の方位は磁北、水平基準の数値は海拔高である。
- 8 本調査の遺構・遺物の実測図・写真、出土品等の資料は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

## 本文目次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査の契機と経過 .....	7
第3章 遺構と遺物 .....	8
第1節 遺構と遺物 .....	8
第2節 瓦 .....	43
第4章 篠原遺跡の土器組成とその特徴 .....	69
第1節 器種分類 .....	69
第2節 出土土器の観察 .....	78
第3節 古代土器の綱年軸設定 .....	82
土器観察表 .....	94

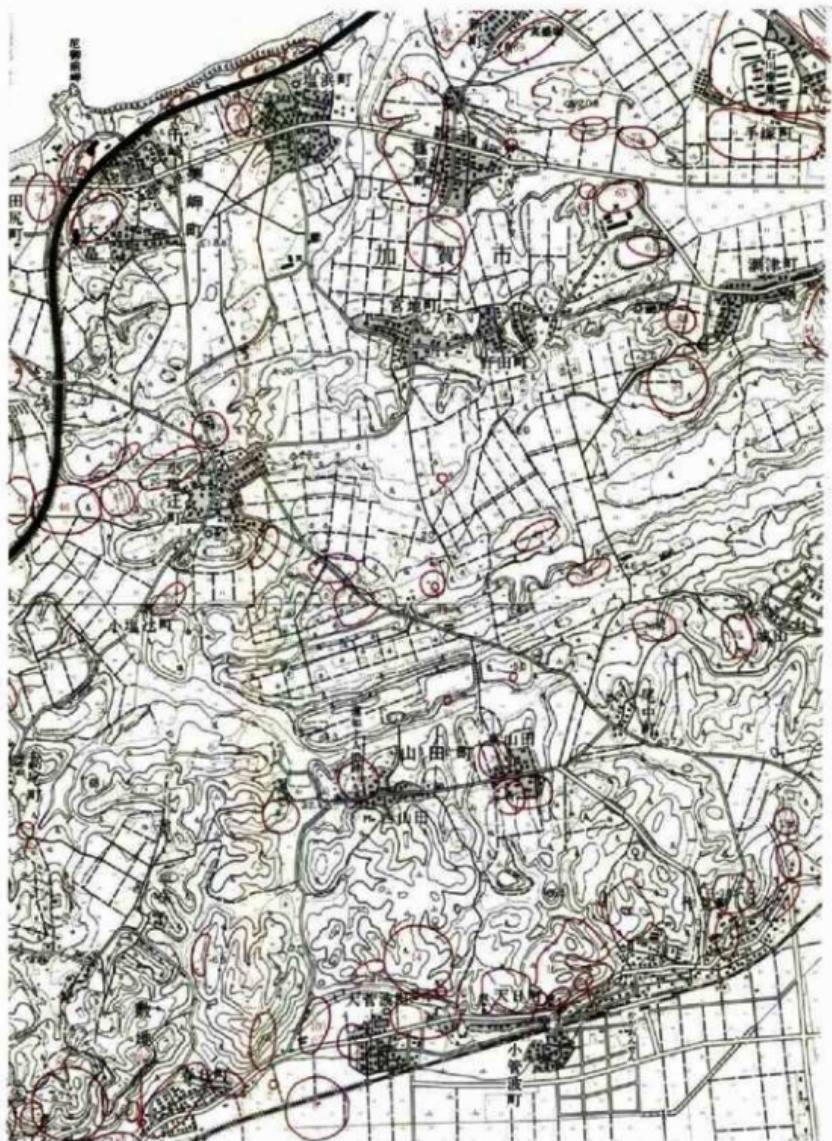
# 第1章 位置と環境

篠原遺跡は、加賀市篠原町に所在する。篠原町は、加賀市の北端に近く、市街地の大聖寺から北へ約6kmを測る。東には柴山潟があり、その湖畔には片山津温泉がある。北陸自動車道の片山津インターへも北へ約1kmと近い。遺跡の立地する地形は、巨視的には橋立洪積台地の北端に立地するが、本遺跡の周辺は柴山潟から続く谷状の入り込みが多く、台地の周辺には低地があり、いわば独立丘陵上に占地しているといえる。標高は15m前後を測る。西約1kmには日本海があり、海岸線は隣り町の塩浜から小松市安宅まで単調な砂丘地帯となっている。

つぎに、周辺の考古学的環境について概観してみよう。西方約3.5kmにある橋立町の大野山遺跡では、縄文早期の精円押型文1片が採集されており、周辺で知られる最古の遺跡である。縄文前期の海進期に海の入り江となっていたとみられる柴山潟周辺には、その頃から弥生時代にかけての貴重な遺跡が散在している。東約3.5kmにある柴山水底貝塚は、昭和39年に柴山潟干拓工事中に湖底約6mより発見されたもので、幅約4mにもおよぶ層から汽水性のヤマトシジミを中心にして縄文早期末から前期にかけての土器が発見されている。また、その背後の台地には、縄文中期の柴山貝塚があり、八棟の住居跡が確認されている。東方約0.7kmの片山津中学校の校地内には、縄文晩期を中心とする潮津上出遺跡があり、約3,000点にもおよぶ多数の石器とカメ棺葬ともみられる埋葬施設が発見されている。

稻作農耕が伝播する弥生時代の遺跡では、東北東約5kmにある柴山出村遺跡が特筆される。柴山出村遺跡は、北陸を代表する初期農耕集落で、大洞A'式の遺風を強く残した出土土器は柴山出村式と呼ばれ、中期初頭の標式となっている。隣接する柴山水底弥生遺跡も柴山出村式期に比定され、本来は同一の遺跡とも考えられている。この他、潮津遺跡や新堀川遺跡からも同期の土器が確認されている。東南東約3.5kmにある猫橋遺跡は、凹線文で飾る弥生後期後半の標式遺跡として知られ、多数の木製品が出土している。なお、先述の大野山遺跡では、福島県の後期弥生式土器の天王山式土器に類似する土器が出土しており、柴山潟から橋立台地にかけて交錯する東と西の土器文化をみることができる。

古墳時代では、東南東約2.5kmの通称ウワノと呼ばれる台地に著名な片山津玉造遺跡がある。昭和34~36年にかけての発掘調査では、古墳時代前期の玉作工房をかねた住居跡約30棟が検出されており、畿内王權へ供給する銅形石などの碧玉製宝器類や玉類を製造していたものとみられている。周辺の古墳群は、富塚・片山津地域に偏在し、現在28基の古墳が確認されている。その中で前・中期に遡るとみられるのは、片山津玉造遺跡の台地斜面に存在した片山津天神古墳であり、その他は後期古墳とみられている。南東約3.5kmにある富塚丸山古墳は、径約50m、高さ8.5mの円墳とも帆立貝式前方後円墳ともいわれるもので、六世紀前半頃の江沼地域の首長墓とみられる盟主墳である。その北約400mには9基の小規模円墳からなる富塚古墳群があり、この他富塚地内には、富塚ジゴ塚や富塚墓地前1~2号墳が知られている。片山津地域では、宅地造成で消滅した片山津古墳群や鉢伏山古墳の他、径20m、高さ6mを測る揚柳山古墳がある。本遺跡の南約2kmにある小塩辻町地内では円筒埴輪片が採集され、付近に古墳の存在した可能性も考えられている。



第1図 周辺の道路分布図

- |                        |                      |
|------------------------|----------------------|
| 1 坊山遺跡（縄文）             | 41 富地ガンド山遺跡（縄文後期・古墳） |
| 2 坊山長者屋敷遺跡（不詳）         | 42 宮地ガンド山製鉄跡（不詳）     |
| 3 金吾ヶ城跡                | 43 宮地向山遺跡（縄文中期）      |
| 4 敷地B 1号墳・B 2号墳（古墳）    | 44 富塚千本松遺跡（縄文中期）     |
| 5 敷地团地遺跡（縄文・古墳）        | 45 田尻シンペイダン遺跡（平安）    |
| 6 敷地春日町マルヤマ1～8号墳（古墳）   | 46 小塙辻タングリ遺跡（古墳）     |
| 7 敷地經塚 不詳              | 47 小塙辻コウジン遺跡（古墳）     |
| 8 大菅波D遺跡（古墳・奈良～平安）     | 48 小塙辻製鉄跡（不詳）        |
| 9 平野山1～9号墳（古墳）         | 49 小塙辻C遺跡（奈良・平安）     |
| 10 大菅波A遺跡（奈良・平安）       | 50 小塙辻B遺跡（奈良・平安）     |
| 11 大菅波B遺跡（古墳）          | 51 宮地火葬墓遺跡（奈良）       |
| 12 大菅波C遺跡（奈良・平安）       | 52 潤津デムラ遺跡（縄文・不詳）    |
| 13 敷地平野山古墳群（古墳）        | 53 潤津ドウゲン遺跡（縄文～平安）   |
| 14 西の御城（不詳）            | 54 潤津出村遺跡（古墳～平安）     |
| 15 小菅波D古墳群（古墳）         | 55 田尻山遺跡（不詳）         |
| 16 小菅波遺跡（古墳）           | 56 田尻川遺跡（奈良・平安）      |
| 17 小菅波神社裏C古墳群1号墳（古墳）   | 57 美岬千崎遺跡（古墳～平安）     |
| 18 小菅波神社裏A古墳群1～4号墳（古墳） | 58 美岬千崎櫛穴（古墳）        |
| 19 小菅波神社裏B古墳群1～3号墳     | 59 美岬大畠遺跡（中世）        |
| 20 作見陣跡（室町）            | 60 宮地庵寺（奈良）          |
| 21 作見B遺跡（古墳）           | 61 潤津土師遺跡（古墳）        |
| 22 作見岩跡（室町）            | 62 片山津中学校裏遺跡         |
| 23 作見A遺跡（古墳）           | 63 潤津上出遺跡（縄文・奈良・平安）  |
| 24 作見C遺跡（古墳）           | 64 塩浜白山神社前遺跡（奈良・平安）  |
| 25 作見塚1・2号窯跡（中世～江戸初期）  | 65 美岬千崎海岸遺跡（縄文早・前期）  |
| 26 高尾製鉄跡（不詳）           | 66 塩浜海岸A遺跡（縄文・古墳）    |
| 27 西山田遺跡（古墳）           | 67 塩浜海岸B遺跡（鎌倉・室町）    |
| 28 光教寺跡（不詳）            | 68 蘿原新遺跡（奈良・平安）      |
| 29 東山田八幡神社遺跡（不詳）       | 69 蘿原新神社遺跡（奈良・平安）    |
| 30 東山支番屋敷跡（不詳）         | 70 蘿原1・2号經塚（江戸）      |
| 31 東山田鹿寺跡（不詳）          | 71 蘿原遺跡（奈良・平安）       |
| 32 山田町4号製鉄跡（不詳）        | 72 蘿原村沢遺跡（古墳）        |
| 33 山田町製鉄1・2号跡（不詳）      | 73 蘿原寺森遺跡（古墳）        |
| 34 中尾山遺跡（縄文）           | 74 手塚町遺跡（古墳～平安）      |
| 35 片山津城山遺跡（古墳）         | 75 蘿原城跡（平安～室町）       |
| 36 高尾遺跡（古墳）            | 76 新堀川遺跡（縄文・弥生）      |
| 37 小塙辻タカオダ遺跡（不詳）       | 77 蘿原遺跡（奈良・平安）       |
| 38 小塙辻A遺跡（縄文）          | 78 平床遺跡（奈良・平安）       |
| 39 小塙辻E遺跡（奈良・平安）       | 79 敷地C古墳（古墳）         |
| 40 小塙辻D遺跡（奈良・平安）       | 80 敷地町後方遺跡（奈良・平安）    |

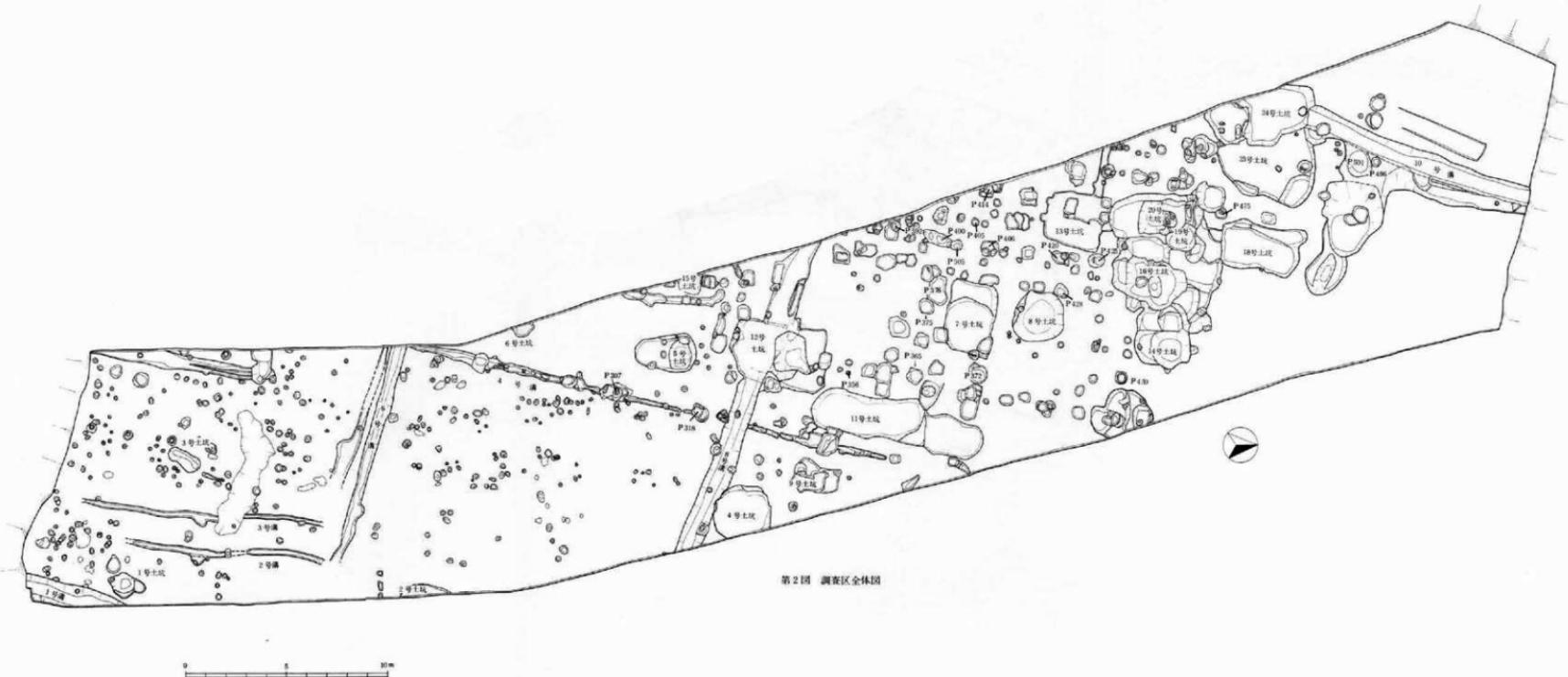
さて、本遺跡は奈良時代を中心とするものであり、周辺の律令期の遺跡環境について最も注視する必要がある。特に南に接する宮地廃寺跡と、北に接する篠原シンゴウ遺跡とは強い関連性があり、両遺跡の概要について述べておこう。宮地廃寺跡は、宮地町から篠原町にまたがる水田にあり、「じょうじやのかま」と呼ばれる火山岩質の塔心礎が残る。本遺跡南端部と塔心礎までは約150mを測る。心礎は約2.6×2.75m、高さ約1mの中央に深さ約20cmの納穴を穿つもので、北陸では最大級に属するものである。昭和50・51年にかけて範囲確認調査が実施されたが、遺構の残存度が低く伽藍配置については明確でない。白鳳時代の建立とみられているが、出土瓦の軒丸瓦はやや後出的な所産ともみられている。宮地廃寺の東方約0.7kmの潮津スワトン山遺跡からは白鳳期の重弧文軒平瓦が一点出土しており、宮地廃寺の瓦窯跡の可能性が考えられている。また、宮地廃寺の南1kmの宮地火葬墓遺跡からは和同開珎13枚を収納した藏骨器とみられる土師器が出土している。一方、篠原シンゴウ遺跡は、篠原集落の北にあり、昭和57年に本遺跡と同じ道路改良事業の一環として発掘調査が実施された。調査では、本遺跡と同じく奈良時代を盛期とし、倉庫1棟を含む15棟以上の掘立柱建物跡や土塁が検出されている。篠原シンゴウ遺跡の北約0.5kmには奈良から平安時代にかけての篠原新遺跡がある。昭和34年以降の3回にわたる発掘調査では、3基の平地式住居跡が確認され、和同開珎・富寿神宝をはじめ多量の土器や土鍬・鉄製鍛錘車・鎌・刀子・鉢津が出土しており、漁業や農業を営む村落の存在を窺わせる。

ところで、本遺跡の東方にある潮津町は、「延喜式」にみえる「潮津駅」の遺称地とみられており、古代の駅路は潮津駅から海浜づたいに北上して安宅駅に至るコースが想定されている。その場合、篠原は古代駅路と獨立方面からの海陸交通の十字路にあたる。また、篠原は、謡曲「夷盛」で名高い薦葉別当夷盛が上洛しようとする木曾義仲軍と戦い討死した篠原合戦の古戦場でもあり、京にのぼる幹道があったことも知られる。

(註)

- 1 上野与一「石川県江沼郡橋立町の押型繩文」(『石川考古学研究会誌』第5号) 1953年
- 2 中口裕他「柴山洞」 片山津公民館 1957年
- 3 片山津中学校社会科クラブ「繩文潮津出土遺跡の研究」 1968年
- 4 橋本満夫「弥生文化の發展と地域性—北陸」(『日本の考古学』III) 1966年
- 5 「加賀片山津玉造遺跡の研究」加賀市教育委員会 1971年
- 6 田嶋明人他「江沼古墳群分布調査報告」(『石川考古学研究会誌』第21号) 1978年
- 7 小森秀三他「篠原シンゴウ遺跡発掘調査報告」加賀市教育委員会 1983年
- 8 小森秀三「宮地廃寺跡範囲確認調査報告」加賀市教育委員会 1977年

上記の他、『加賀市史』通史上巻を全般にわたって参考にした。



第2图 调查区全休园

## 第2章 調査の契機と経過

篠原町の中央を南北に走る主要地方道金沢・小松・加賀線は、道路幅が狭く、普通車一台が通過するのがやっとで、対向車に出くわすとしばしば交通渋滞を招いていた。篠原集落では、その主要地方道と県道小塩・潮津線が交差するうえに、北陸自動車道や小松空港への連絡路、金沢・小松・大聖寺を結ぶ海岸線の幹道として、利用車が増加していた。そこで、集落内における階路打開を目的とする道路改良が計画され、集落の西にバイパスを建設することとなった。しかし、当地には篠原遺跡が周知されており、昭和54年県土木部より県立埋蔵文化財センターに対して分布調査の依頼があった。調査の結果、良好な包含層の存在を確認し次年度より発掘調査を実施することとなった。昭和55年度の調査対象は、集落南端の宮地町よりから県道小塩・潮津線までであるが、バイパスの一部は既存の農道を拡幅して建設するため、実際の調査はその拡幅部分と農道からずれる新路線部分の約900m<sup>2</sup>となった。

### (発掘日誌抄)

- 4月22日 作業機材を搬入。発掘区に三ヶ所の試振穴を設け、土層状況を観察する。
- 4月23日 杭打ち作業。
- 4月26日 農道拡幅部分のトレンチ調査開始
- 5月14日 トレンチ部分は後世の搅乱を受け包含層および遺構の存在はなかった。
- 5月16日 耕土除去作業を開始する。
- 5月17日～6月2日 包含層の掘り下げ作業と遺構検出作業を継続。
- 6月3日 調査区南端より遺構掘り下げ作業に入る。
- 6月16日～ 第4号土塁をはじめとして良好な一括遺物が検出される。
- 7月13日～ 土塁の掘り下げと共に遺物出土状況の実測作業を継続する。
- 7月16日～ 実測作業と共に遺物の取り上げ作業を行なう。
- 7月26日～ 遺構を清掃し写真撮影を行なう。
- 7月29日～ 20分の1遺構平面実測作業に入る。
- 8月9日 実測作業および遺物取り上げ作業を完了する。
- 8月12日 作業機材を撤収する。

# 第3章 遺構と遺物

## 第1節 遺構と遺物

### 1 遺跡の概要

猿原遺跡は、南面する比高約10m程度の台地緩斜面に立地する。調査区はその台地の等高線にはほぼ直行する方向で、道路幅に沿って設けられ、幅15m、延長60mの計900m<sup>2</sup>を調査した。調査区の南側が台地裾部、北側が台地の頂上部にあたる。

猿原遺跡は遺構密度が高く、遺物量が特段に多い遺跡である。時期は奈良時代前半に中心をもった、ほぼ单一時期の遺跡である。

遺構では掘立柱建物10棟以上と、土墻24基以上、溝状遺構10条以上の他、明瞭には確認できなかつたが、竪穴住居も存在していたと推定している。各遺構は、規則的に配置されている。溝、掘立柱建物、土墻はN-15°-E前後に方位を描えて分布しており、そこには緻密な企画の存在を窺わせている。大略の遺構の配置は、4号溝を境にその西側に掘立柱建物、土墻が集中し、東側には顕著な遺構が存在しない。4号溝は、建築部材は確認できなかつたが、規則的に配置された溝中の柱穴と、溝の形態から板塀の跡とも推定出来るものである。この仮定が許されるならば、板塀に囲まれた中に、4号～10号掘立柱建物が配置され、4号溝の東側が空閑地として、その景観を復元できよう。

遺物にも注目すべきものが多い。時期は先にも触れたとおりで、2様式II<sub>1</sub>期から3様式にかけてのものを含むが、主体は2様式II<sub>1</sub>期のものからなり、遺構の一括資料が、きわめて良好な状態で検出されている。当遺跡の遺物の特徴は、以下の第2節でも触れるが、特に土器の組成が豊富な点にあるといえる。そのことは規則的配置をもつた当該遺跡の性格と密接に関連する事であるが、一方では、2様式II<sub>2</sub>期が、土器組成の貧弱な遺跡と、豊富な遺跡の格差が顕在化する時期で、当該遺跡例は、その後者を代表する県内では唯一の具体例である。当該期の土器消費実態を検証する上で、きわめて重要な遺物群と考える。

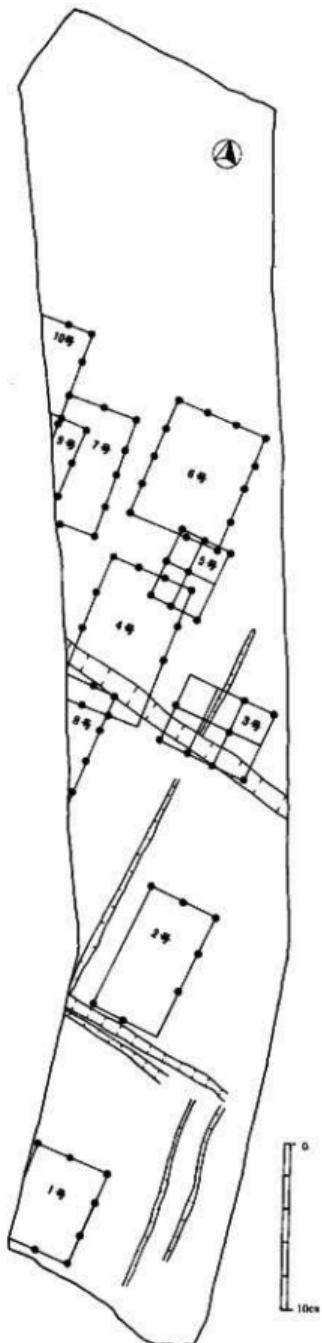
当遺跡の南300mには白鳳期～奈良時代にかけての宮地廃寺がある。当遺跡からも宮地廃寺で用いられた瓦が出土しており、遺跡の存続時期も少なくとも一点では併行すると推定される。また、判読に保留部分を残すが「厨」かと推定される墨書が2点、さらには、朱墨の痕跡をとどめる転用鏡が6点以上出土している。当遺跡の性格を、ここに明らかにすることはできないが、先にみた遺構のあり方と、土器組成の豊富さも加味しつつ、今後とも検討していく必要があろう。

第1表 指立柱建物一覧表

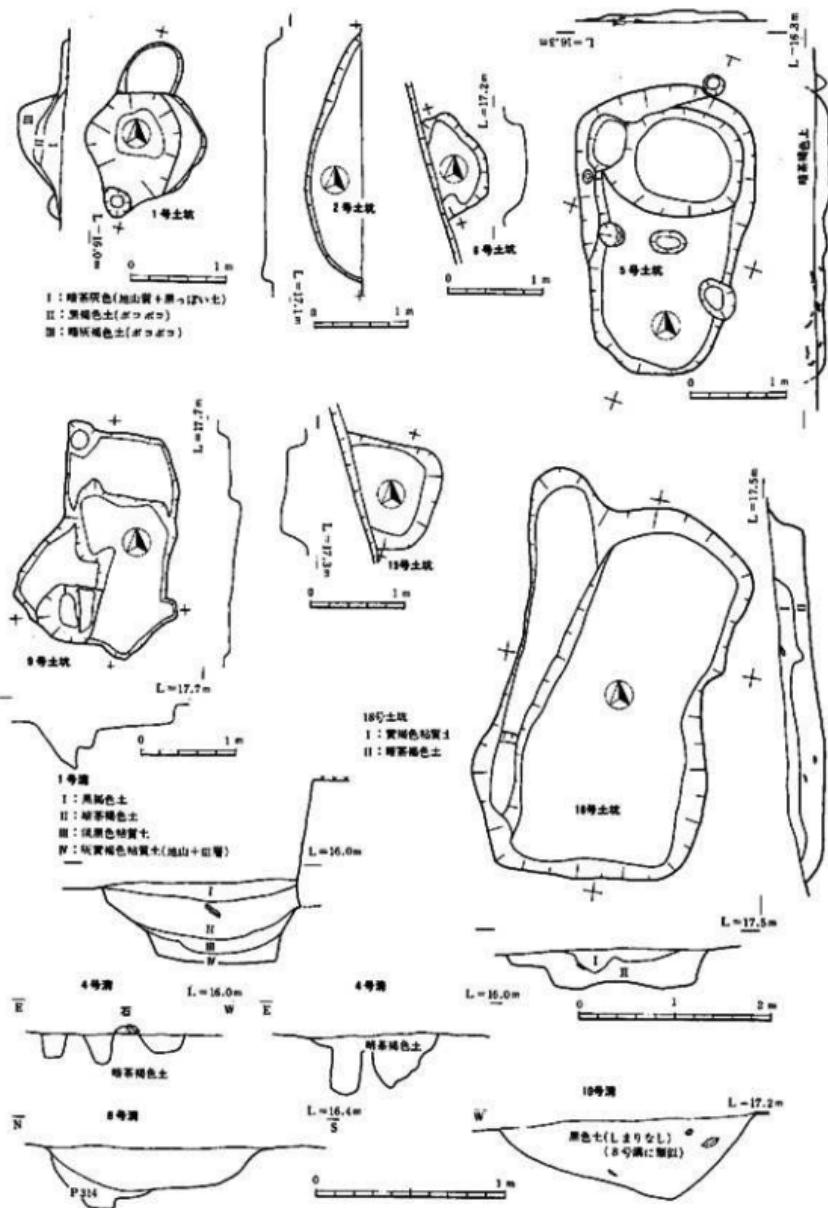
番号	方 位	規 模 (間数・寸法)
No.1	N-11°-E	3間(6.0m)×2間(4.6m)
No.2	N-15°-E	3間(8.0m)×2間(4.3m)
No.3	N-75°-W (N-15°-E)	8間(5.5m)×2間(4.4m)
No.4	N-12°-E	4間(8.8m)×3間(5.2m)
No.5	N-16°-E	2間(4.5m)×2間(3.3m)
No.6	N-12°-E	4間(7.3m)×3間(5.8m)
No.7	N-9°-E	4間(7.5m)×2間(4.4m)
No.8	N-12°-E	3間以上 × 1間以上
No.9	N-16°-E	2間以上 × 1間以上
No.10	N-9°-E	3間以上 × 1間以上

第2表 土坑一覧表

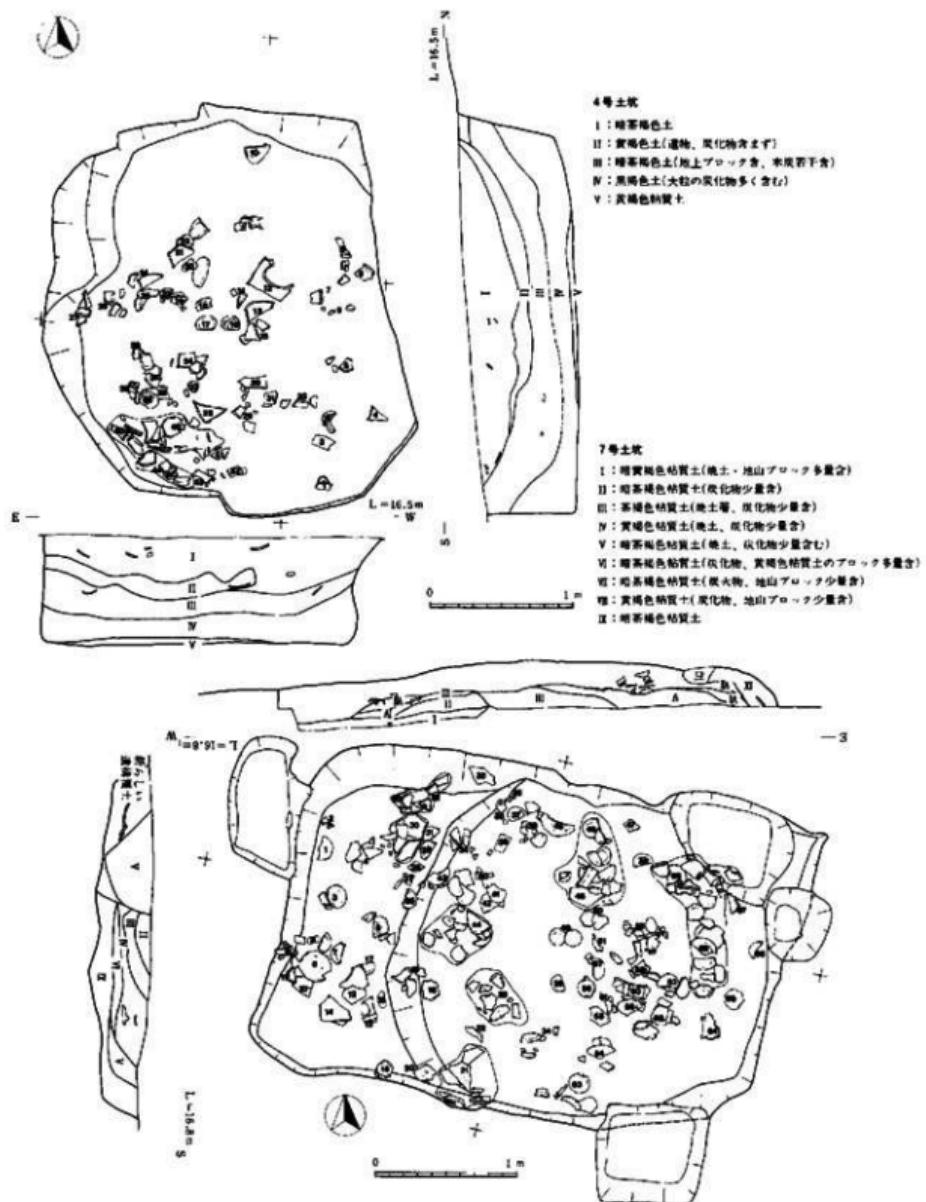
番号	形 性	方 位	法量 (長さ×幅×深さ、最大値)	備 考
1	略円形		1.6×1.2×0.5m	柱穴と重複。
2	?	?	2.6以上×0.6以上×0.2	ほとんどが調査区外にのびる。
3	略長方形	北東～南西	1.7×0.7×0.3	
4	隅丸方形か	南 北	2.8×2.4以上×0.8	一部調査区外にのびる。範囲多い。
5	略長方形	南 北	3.0×1.9×0.2以上	柱穴と重複。並津
6	略長方形か	?	1.0×0.5以上×0.2	調査区外にのびる。
7	長方形	東 西	3.5×2.4×0.4	埴土中に指立柱の柱底あり。
8	略方形	南 北	2.5×2.4×0.6	柱穴と重複。
9	略長方形	南 北	2.4×1.2×0.2	柱穴と重複。
10				
11	略長方形	南 北	8.3×1.9×0.55	長方形土坑が3つ程度重複。範囲多い。
12	略長方形	南 北	5.0×3.1×0.7	柱穴と重複。並津。
13	略長方形	南 北	3.0×2.7×0.2	並津。
14	略方形	南 北	2.0×1.9×1.0	
15	略長方形か	東西か?	1.0以上×1.2×0.3	調査区外にのびる。
16	だ円形	東 西	2.2×2.0×0.8	並津。
17				
18	略長方形	南 北	4.0×2.4×0.4	並津。
19	略円形	—	1.5×1.4×0.5	並津。
20	凸 形	南 北	1.9×1.6×0.8	
21	だ円形	北西～南東	(2.4)×1.6×0.4	並津
22	だ円形	東 西	3.7×3.0×0.5	
23	略長方形か	南 北	5.0×3.8×0.2	
24	略長方形か	南 北	3.2×3.0×0.6	10号溝に切られる。 (並津は4号溝、 8号溝、ピット 406, 414からも出 土している。)



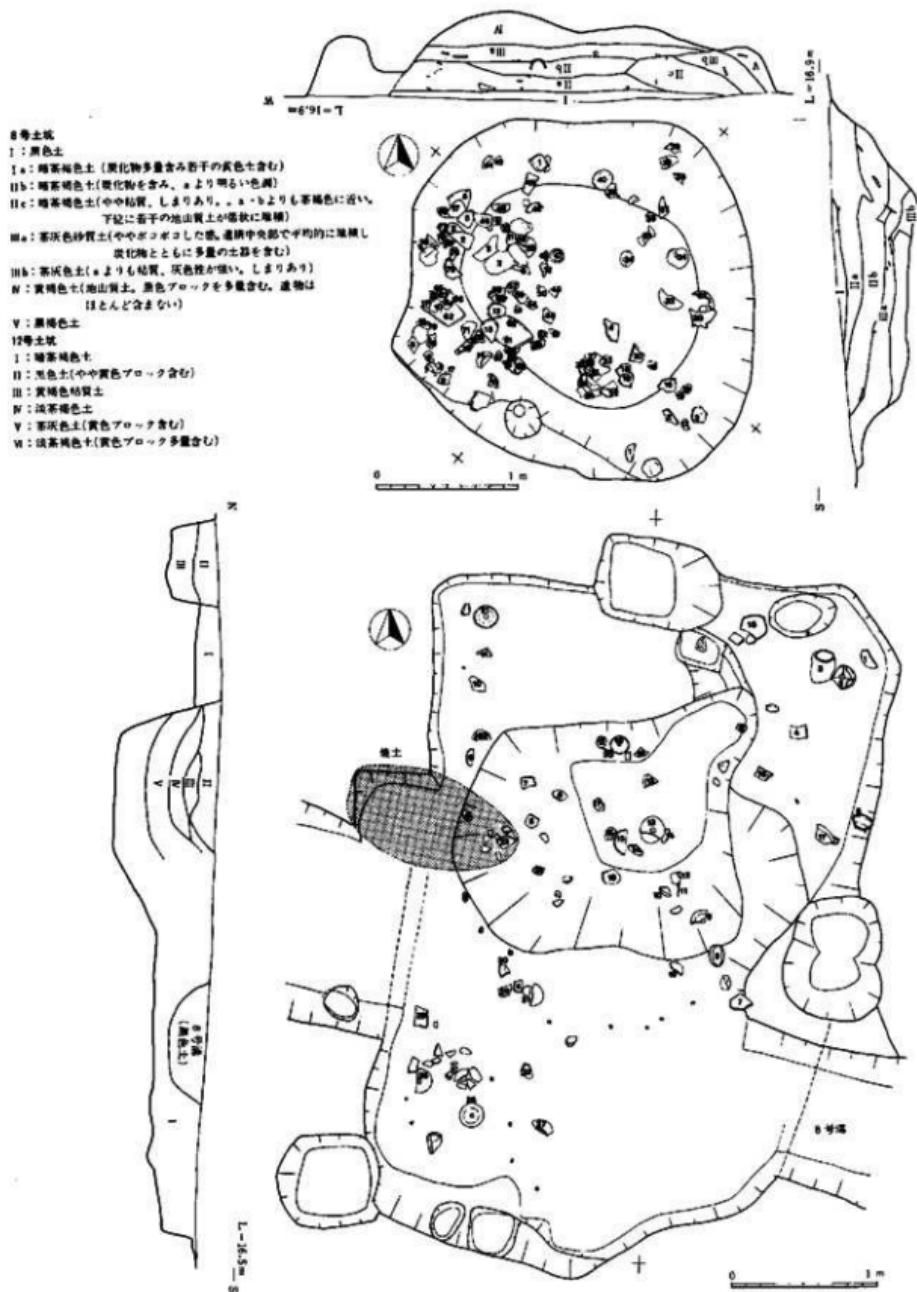
第3図 指立柱建物位置図



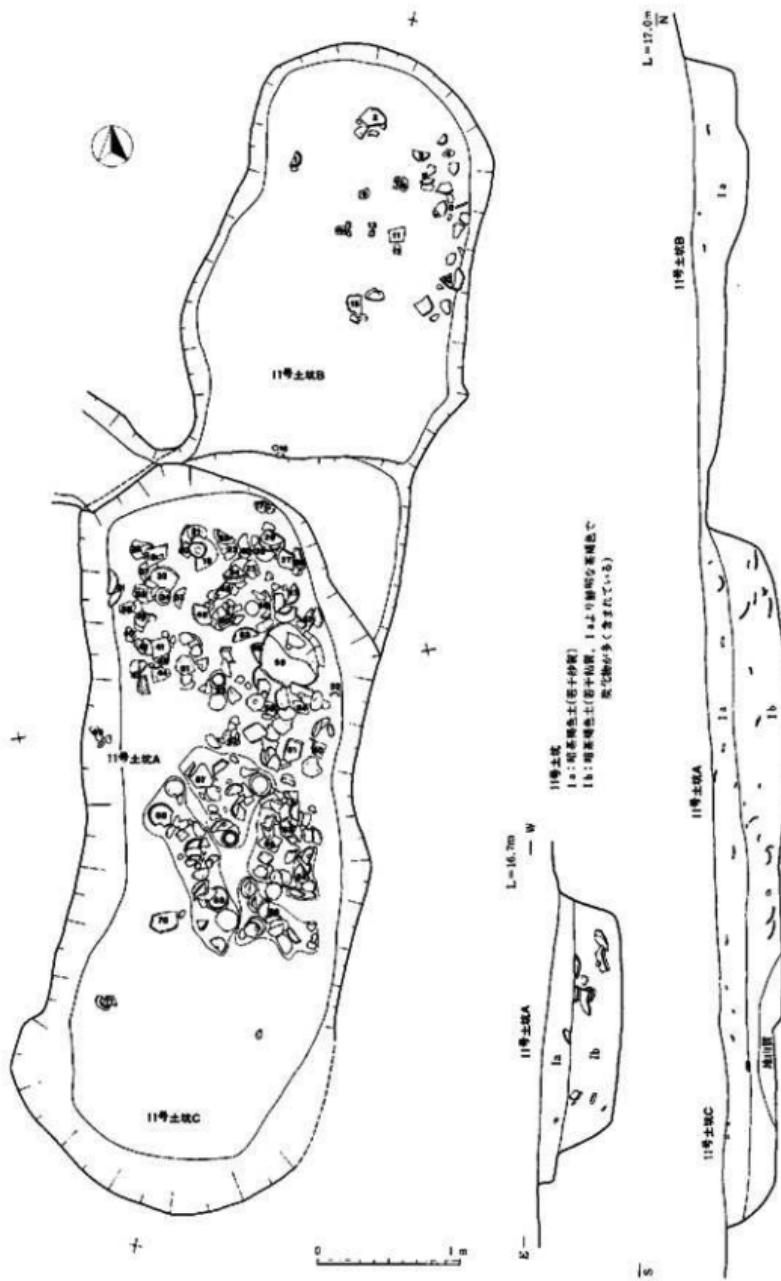
第4図 土坑・溝実測図(縮尺は土坑1/60、溝1/30)



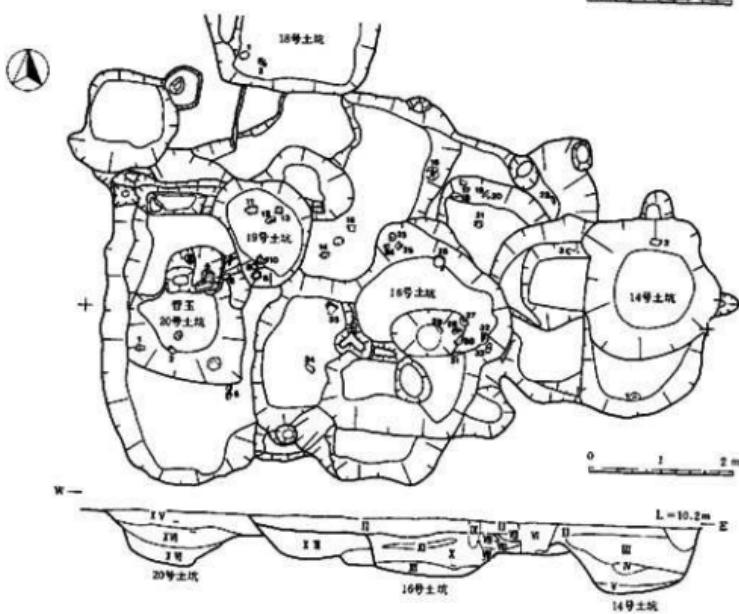
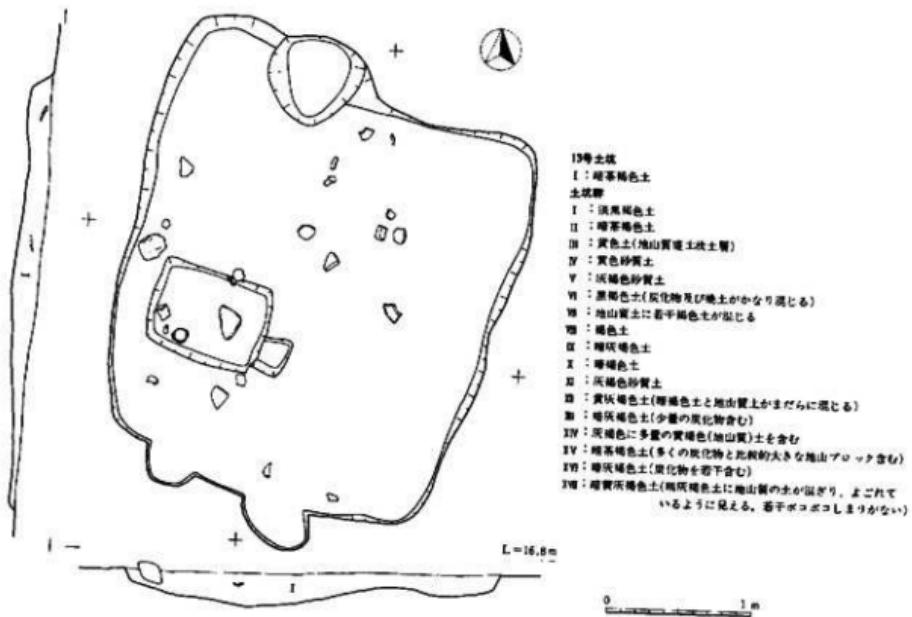
第5図 土坑実測図(上：4号土坑、下：7号土坑)



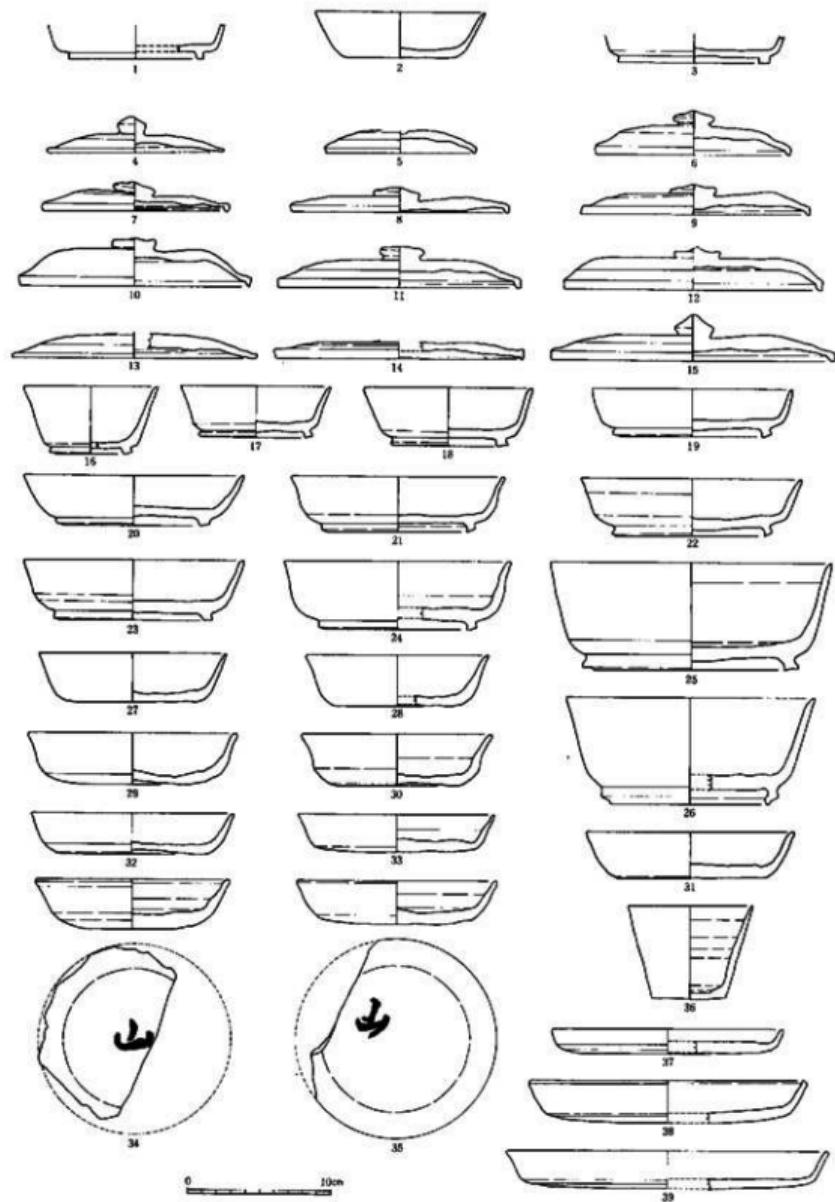
第6図 土坑実測図(上：8号土坑、下：12号土坑)



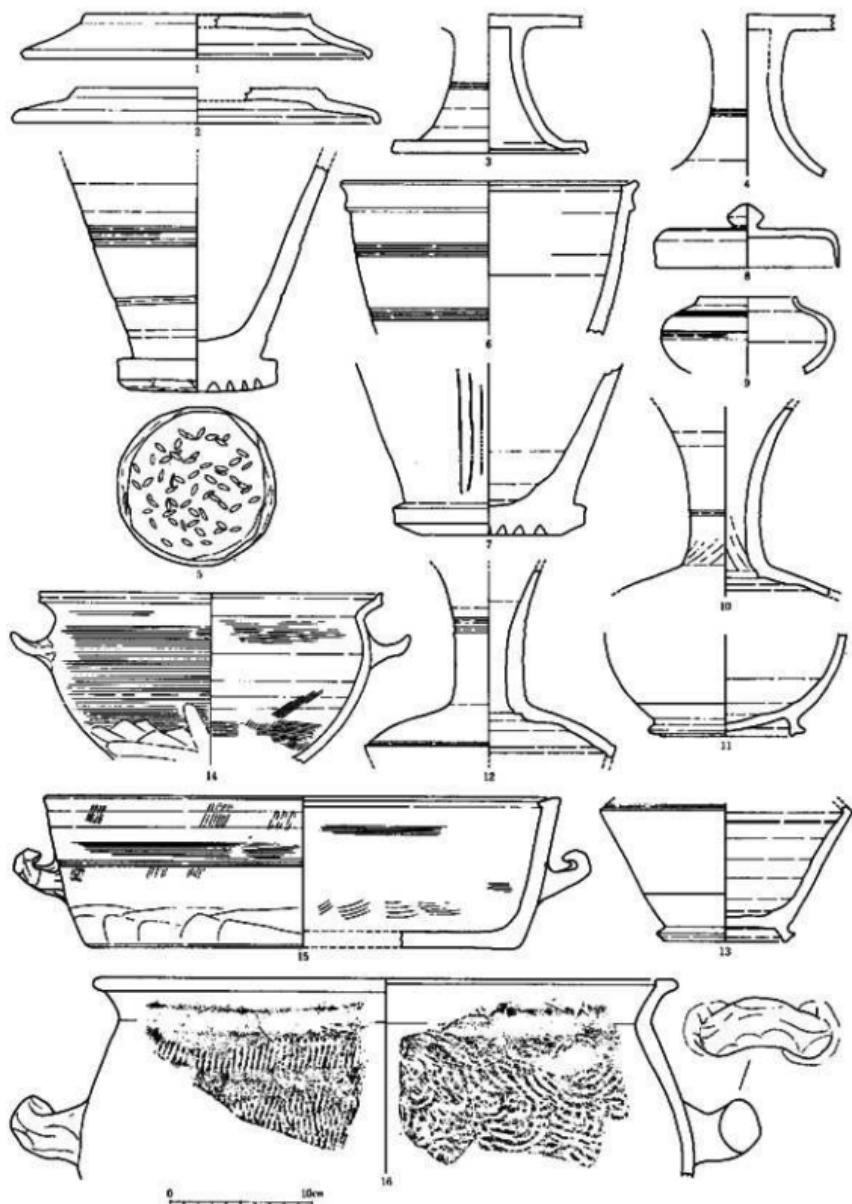
第7図 土坑実測図(11号土坑、遺物に付されている番号は取り上げ番号)



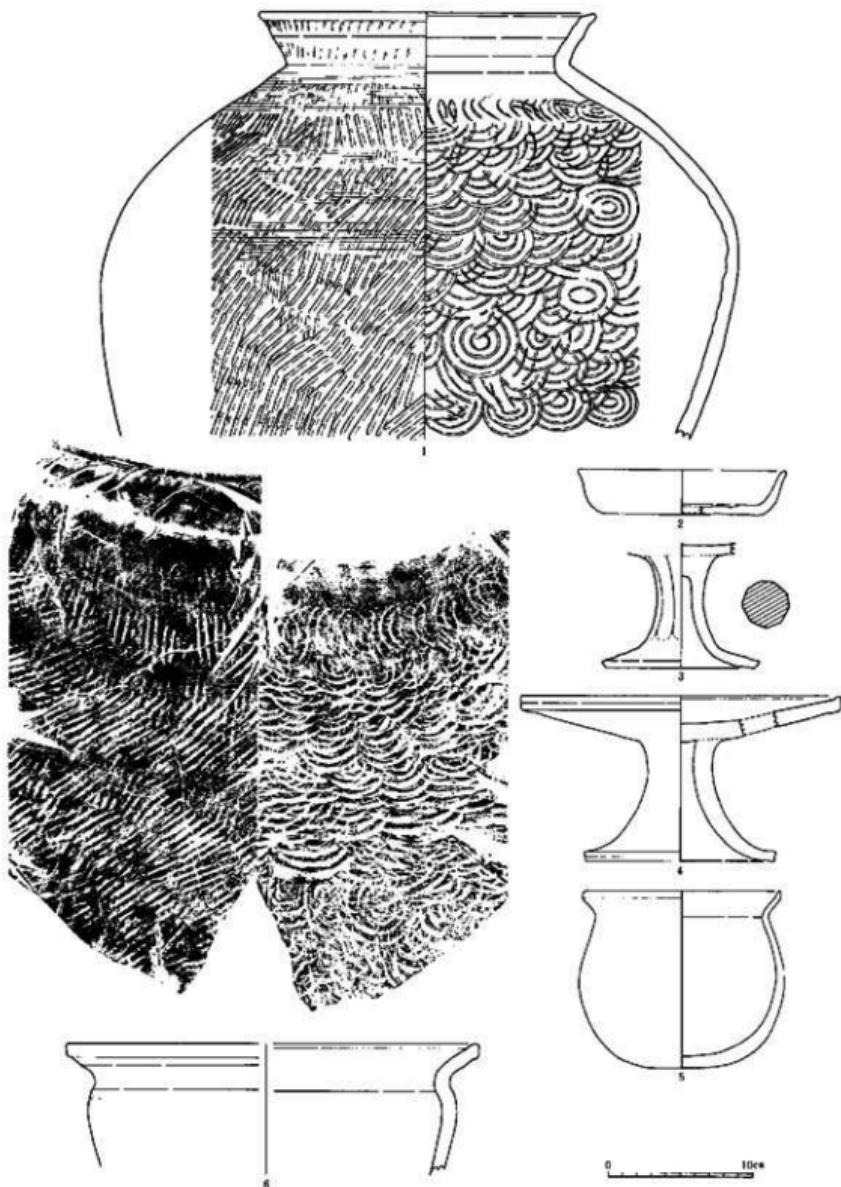
第8図 土坑実測図(上：13号土坑・S=1/40、下：土坑群・S=1/80)



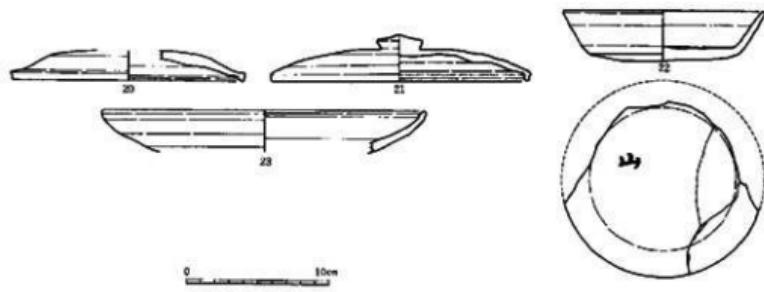
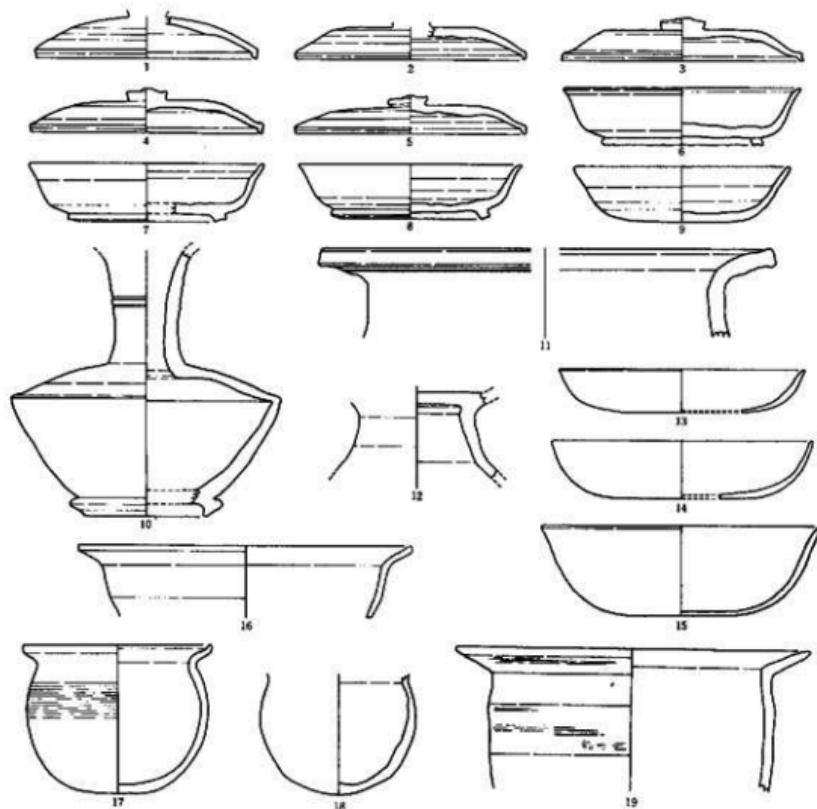
第9図 土坑出土遺物実測図(1号土坑: 1、2号土坑: 2・3、4号土坑: 4~39)



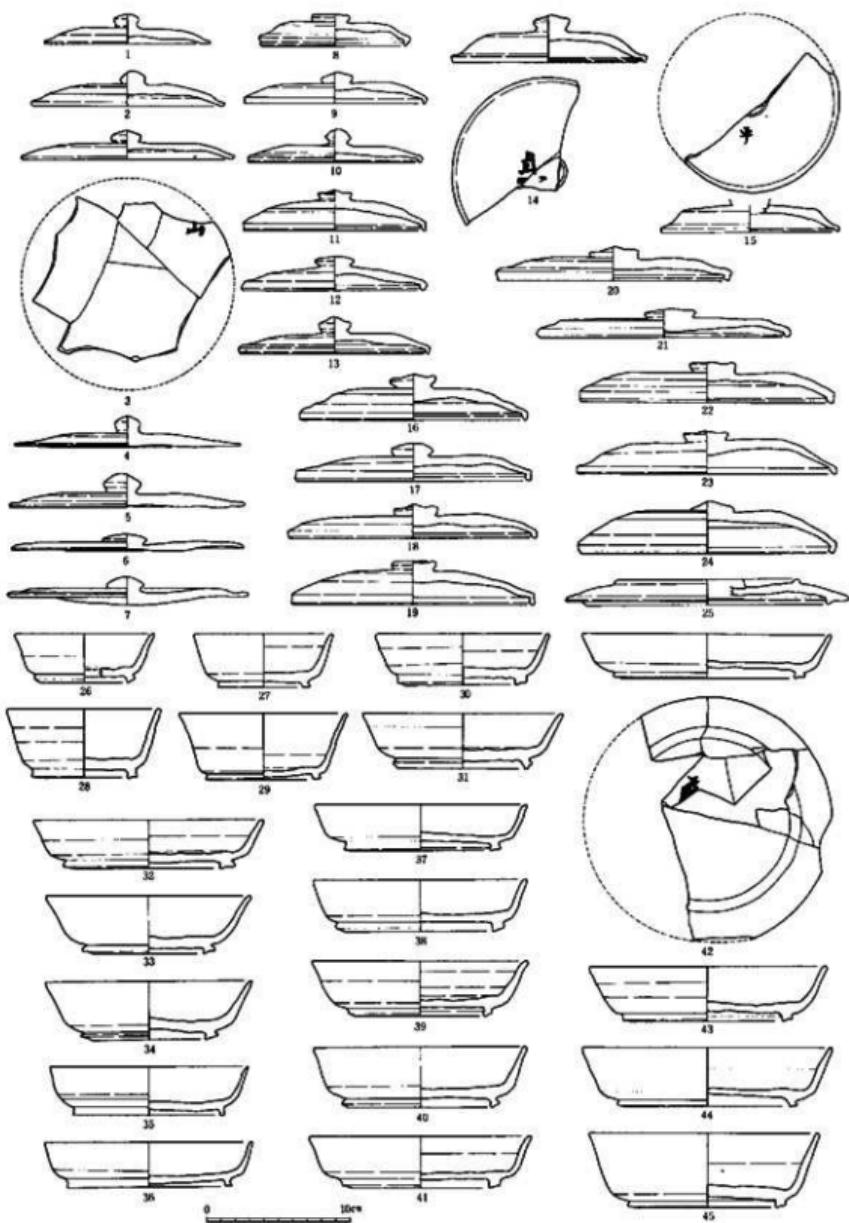
第10圖 土坑出土遺物實測圖(4號土坑)



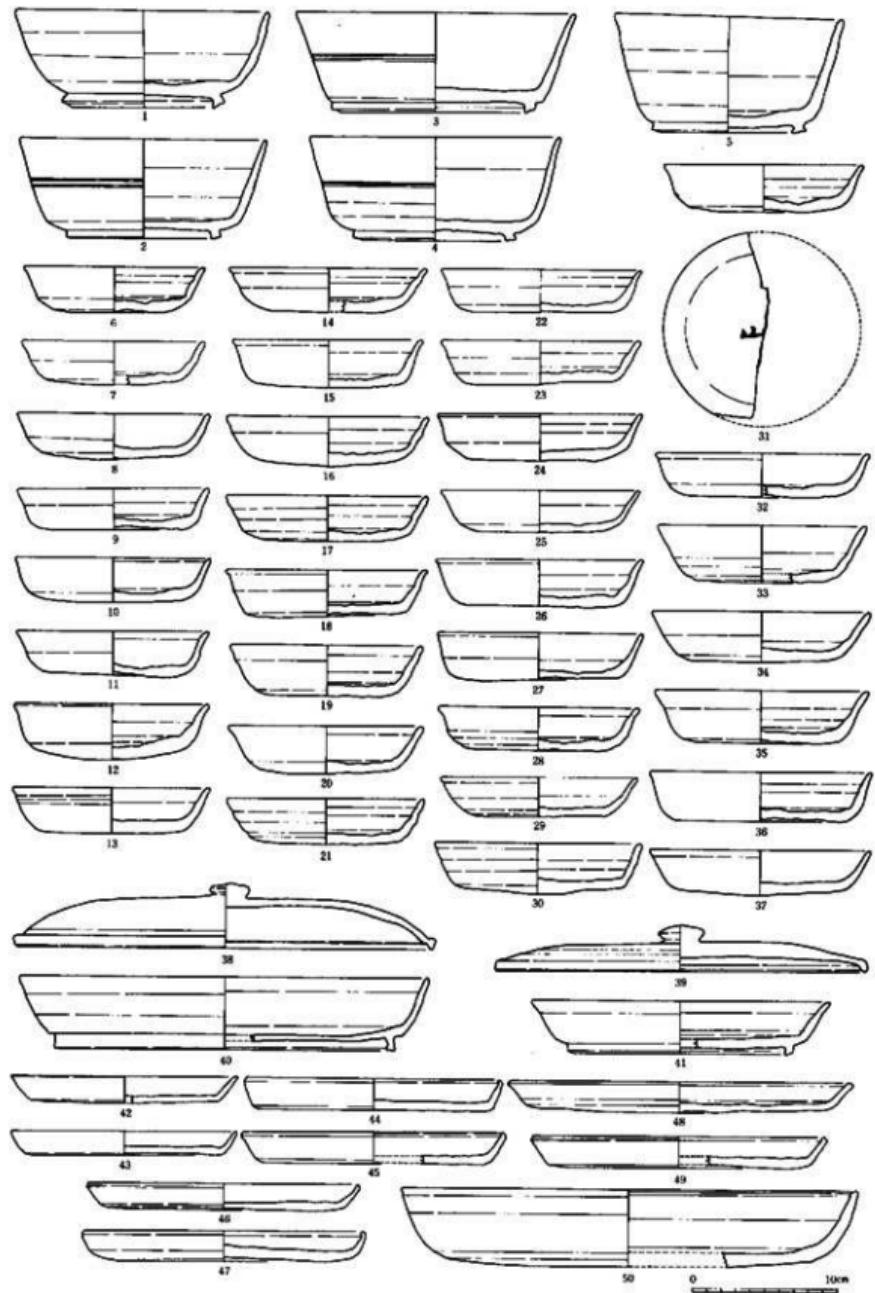
第11圖 上坑出土遺物實測圖(4號土坑)



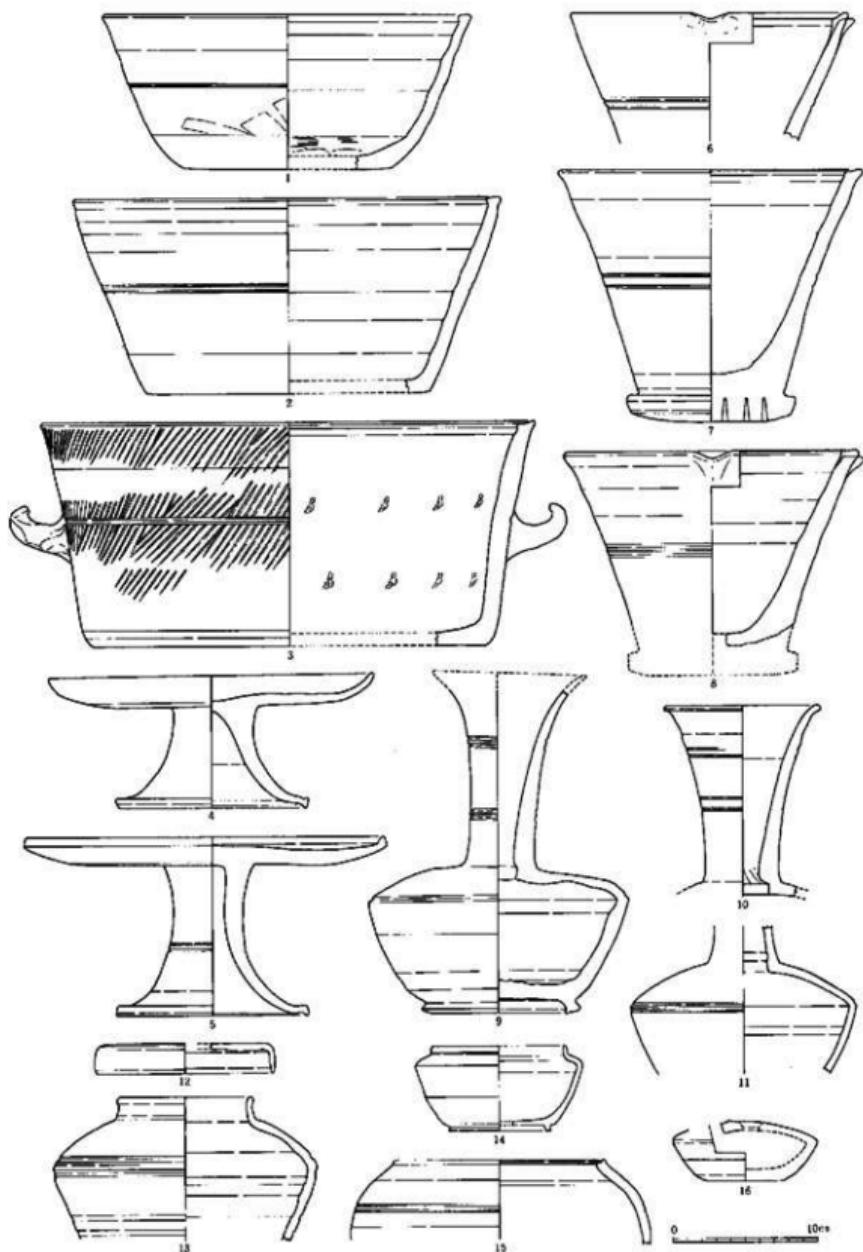
第12图 土坑出土遗物实测图(5号上坑: 1~19、6号土坑: 20~23)



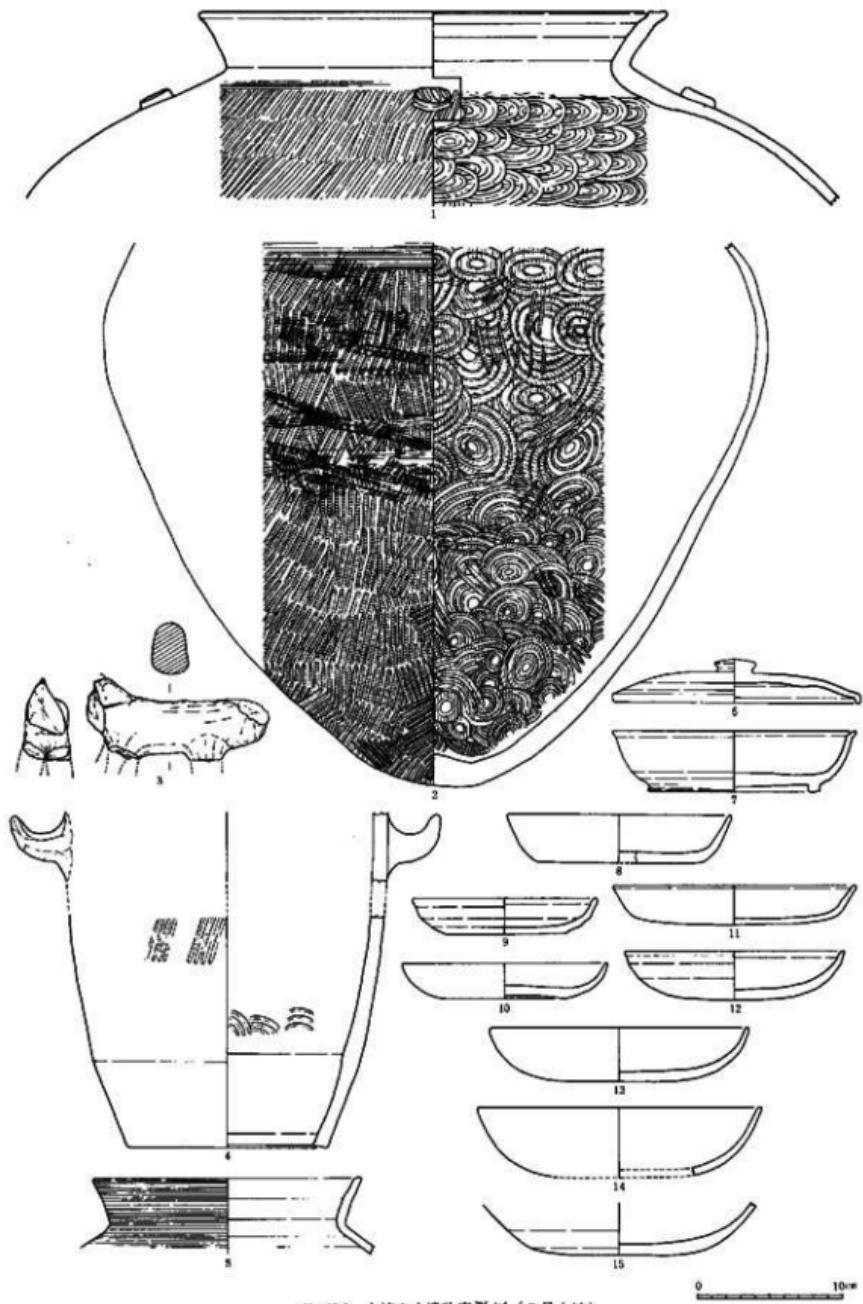
第13図 土坑出土遺物実測図（7号土坑）



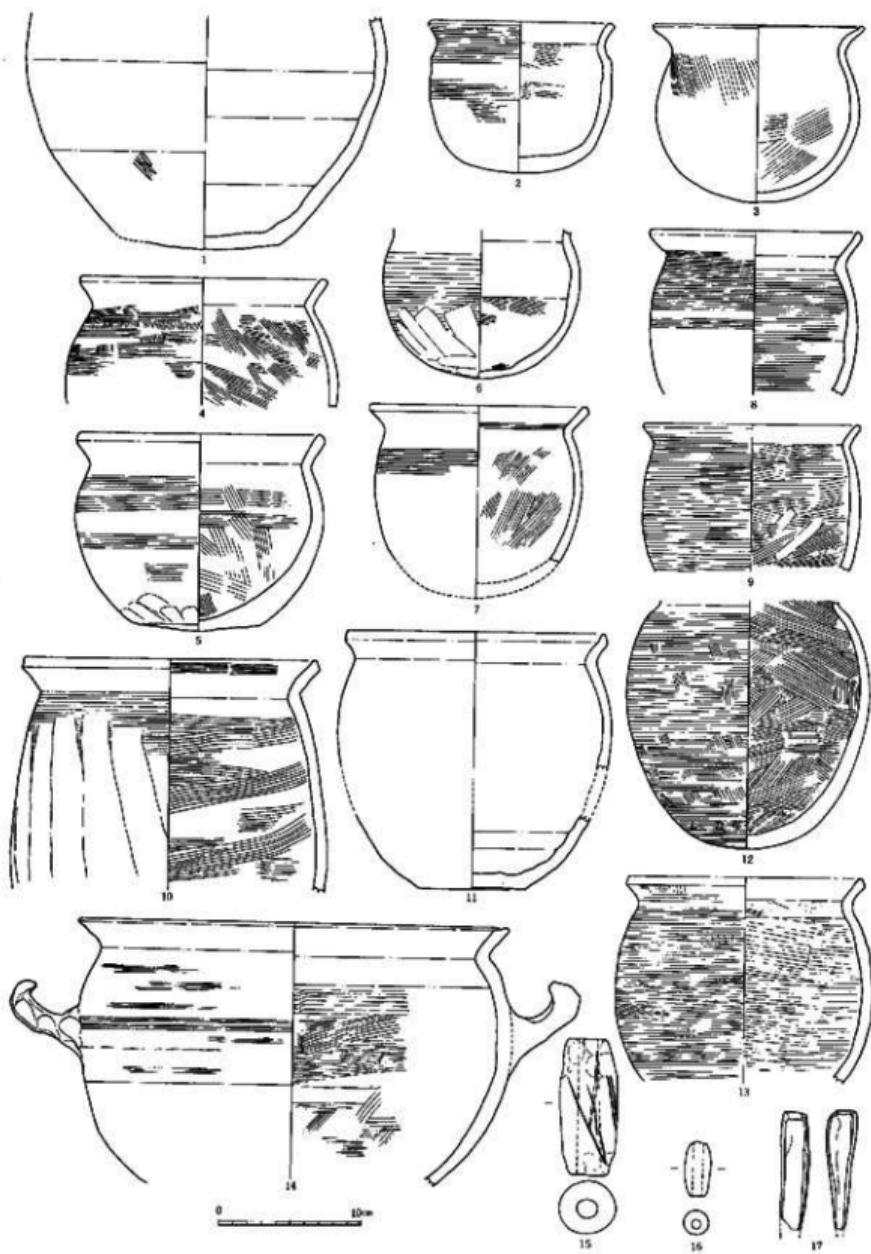
第14図 土坑出土遺物実測図（7号土坑）



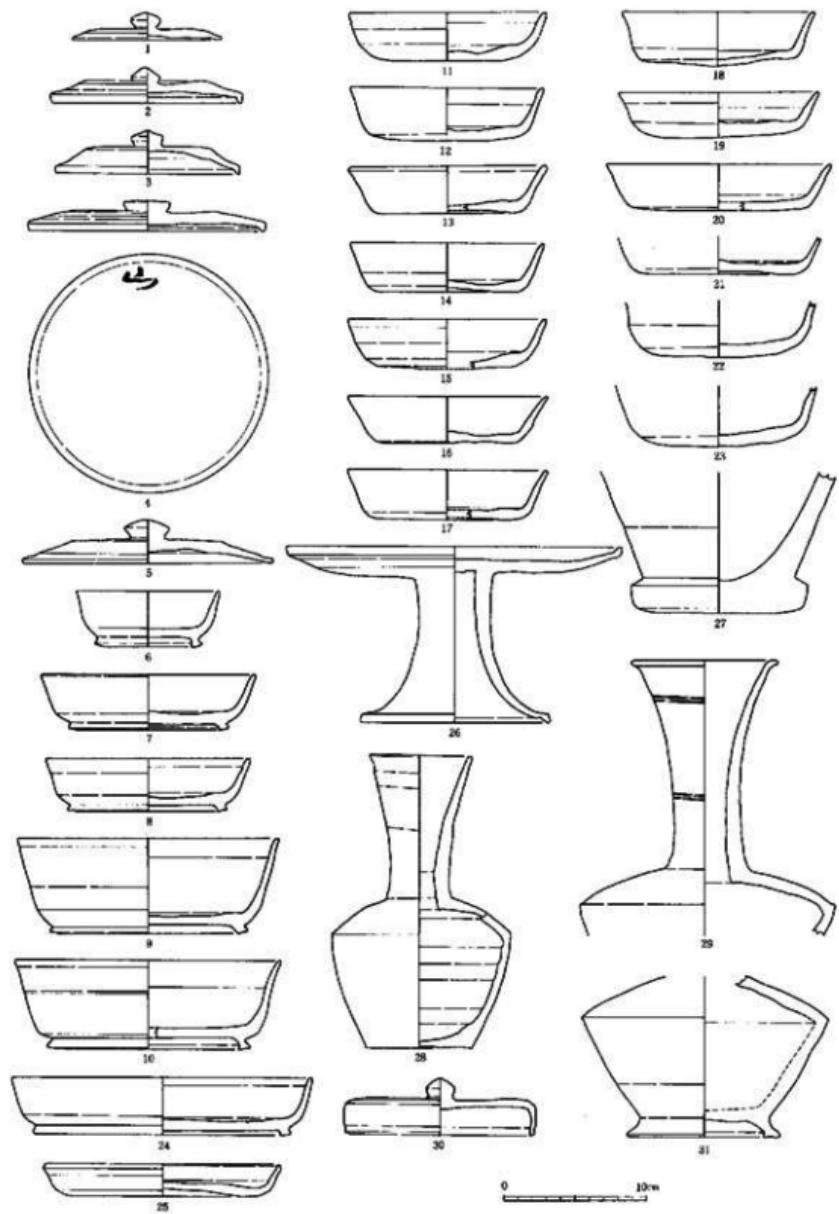
第15图 土坑出土遗物尖铜 (7号土坑)



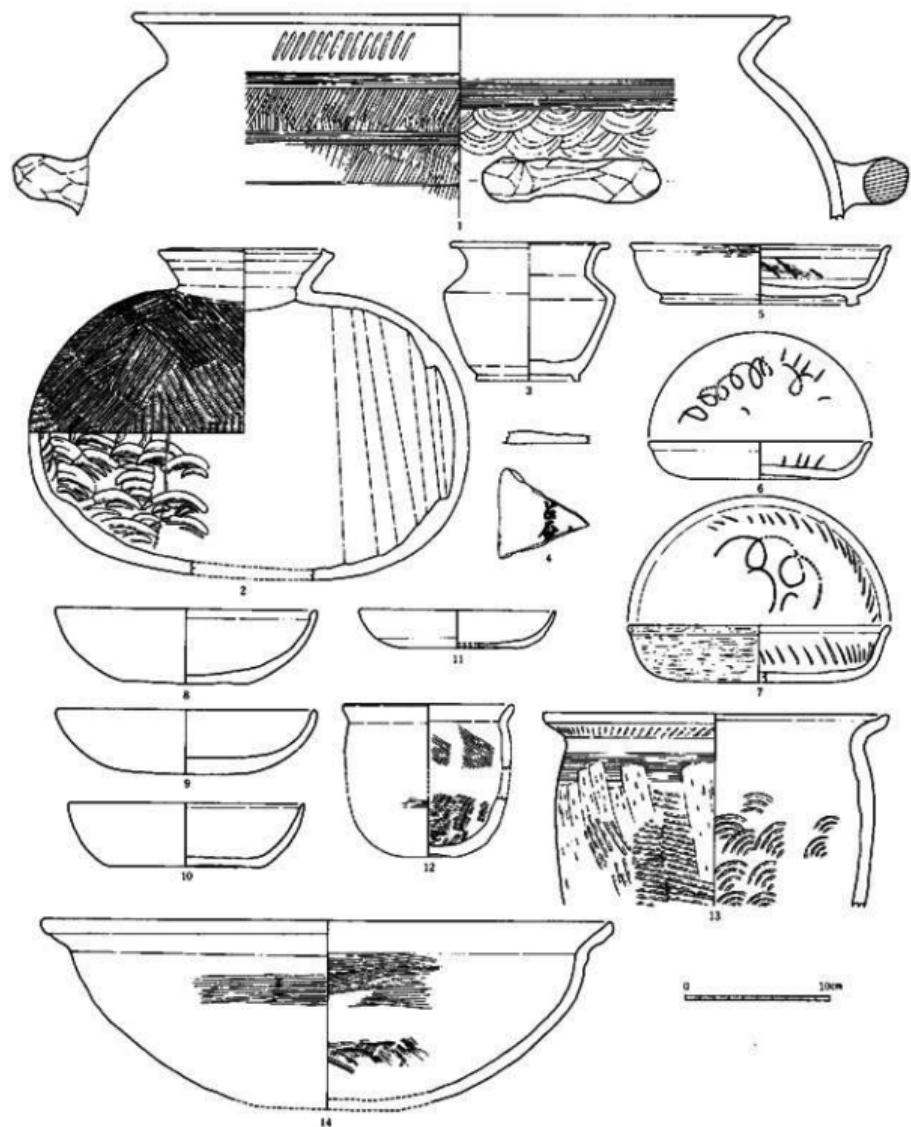
第16图 土坑出土遗物实测图 (7号土坑)



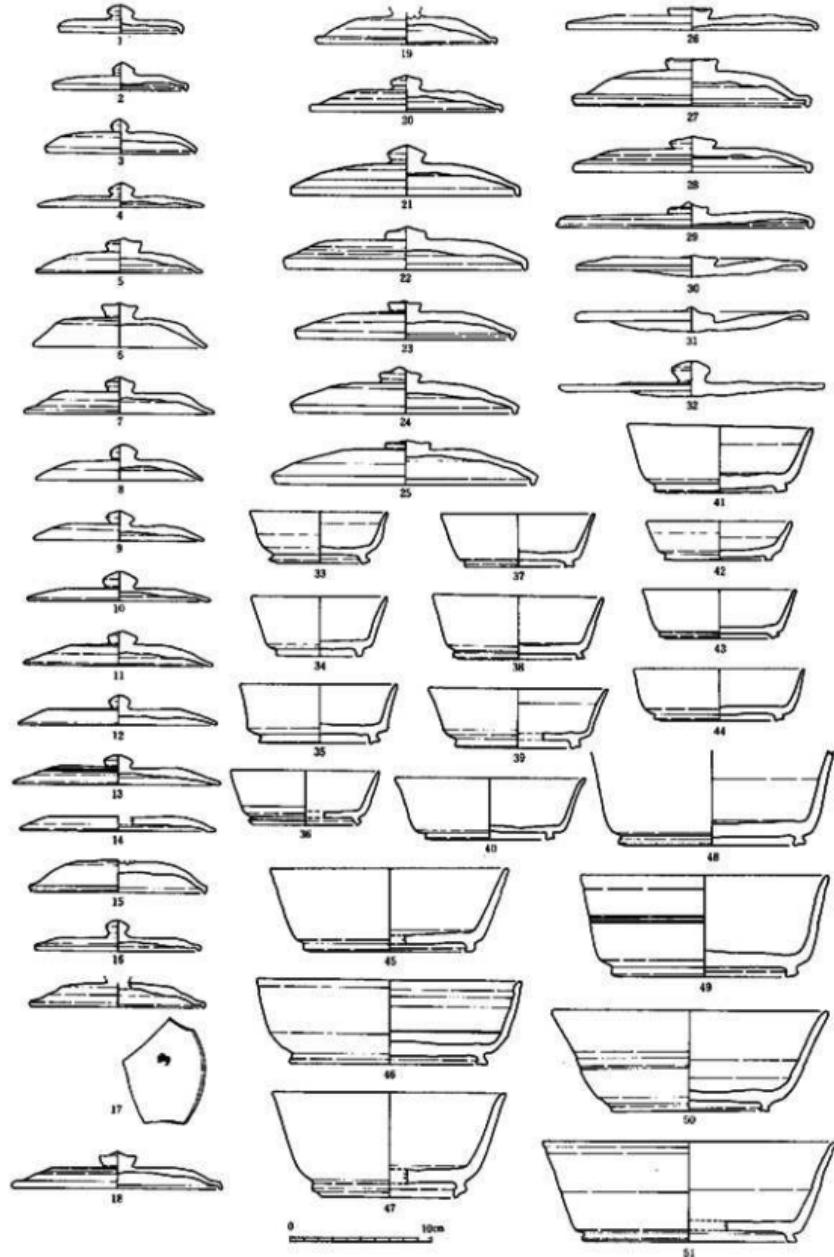
第17圖 土坑出土遺物實測圖 (7号土坑)



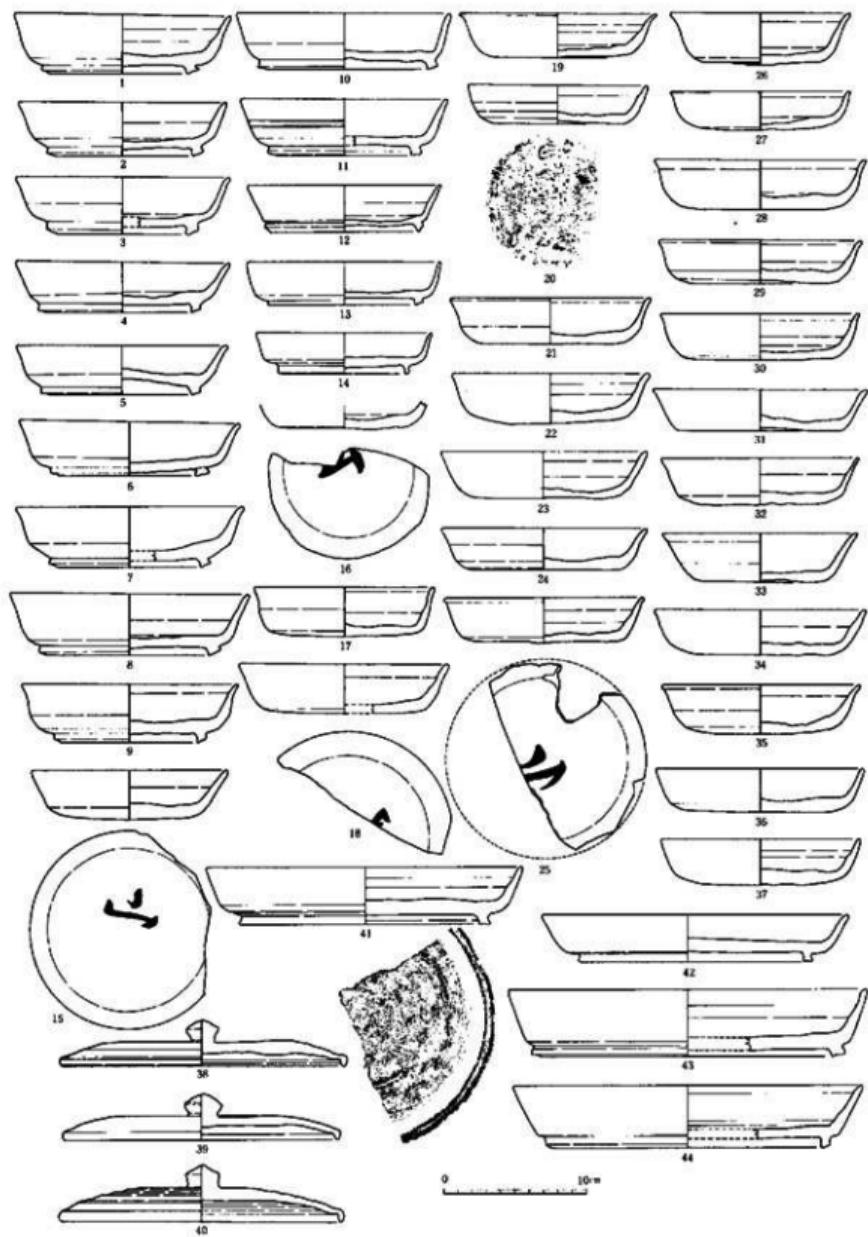
第18圖 土坑出土遺物實測圖（8號土坑：1~4、6~15,17~31、9號土坑5~16）



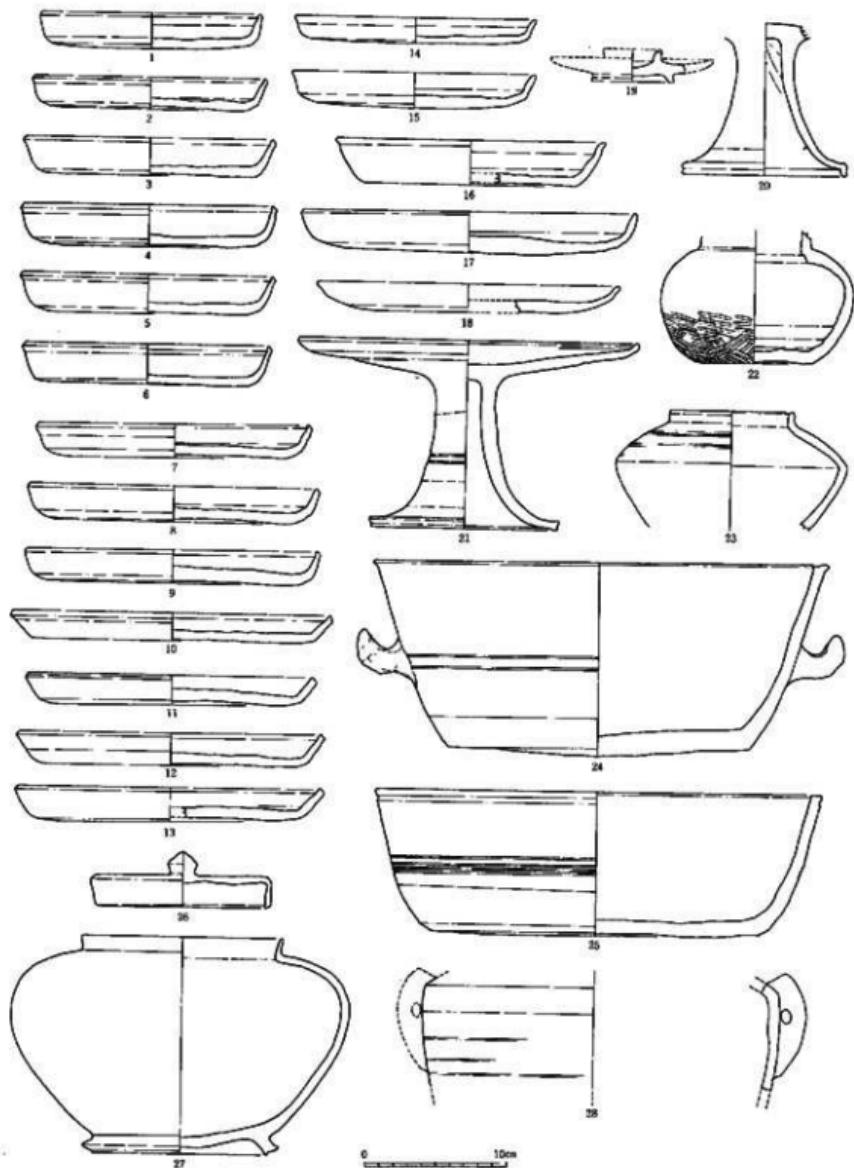
第19图 土坑出土遗物实测图（8号土坑）



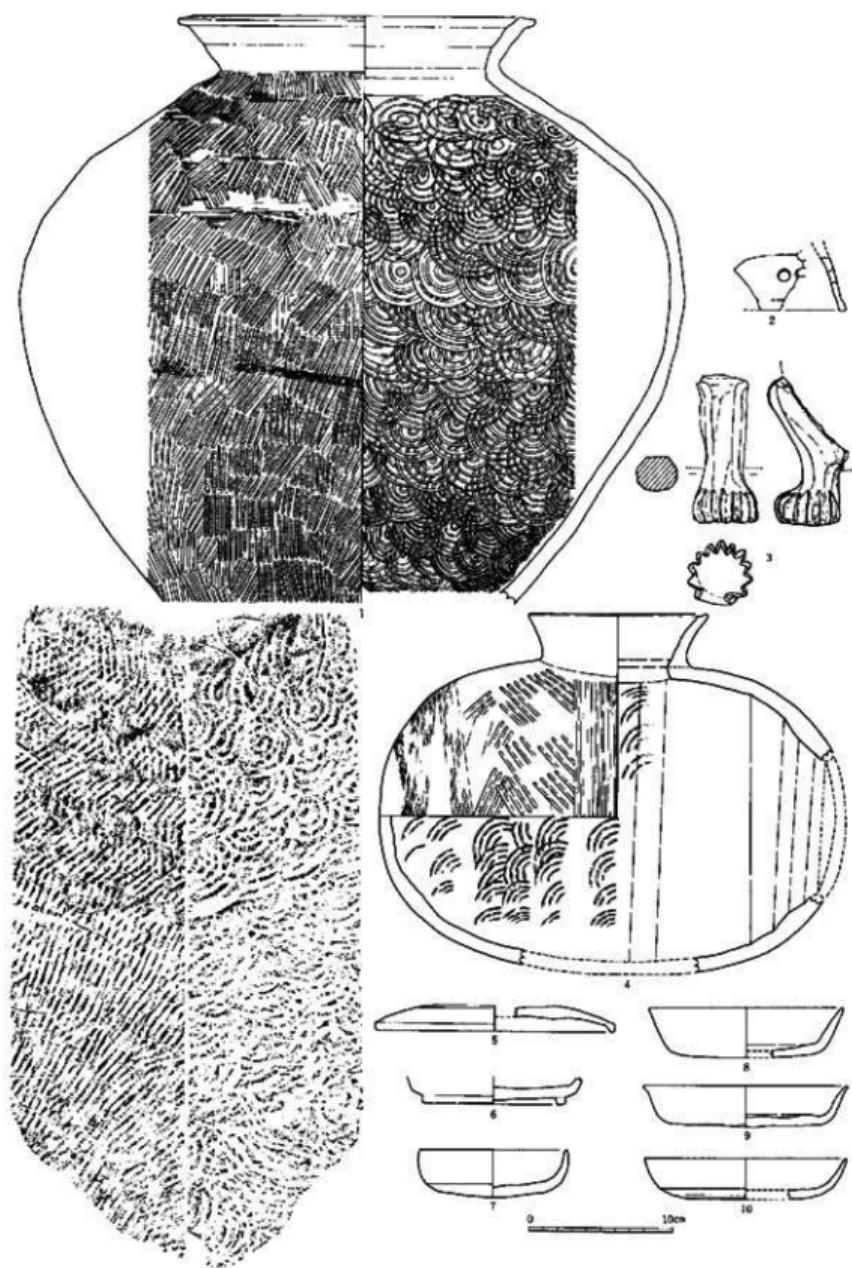
第20図 土坑出土土器実測図（11号土坑）



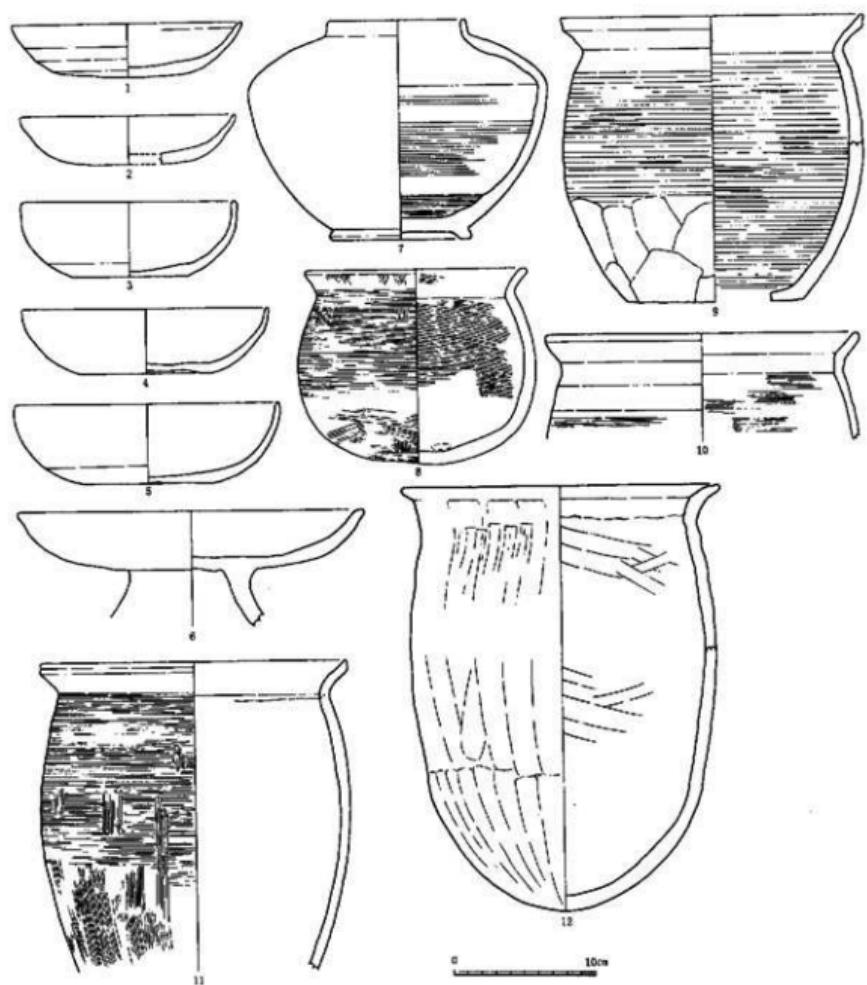
第21图 土坑出土遗物实测图（11号土坑）



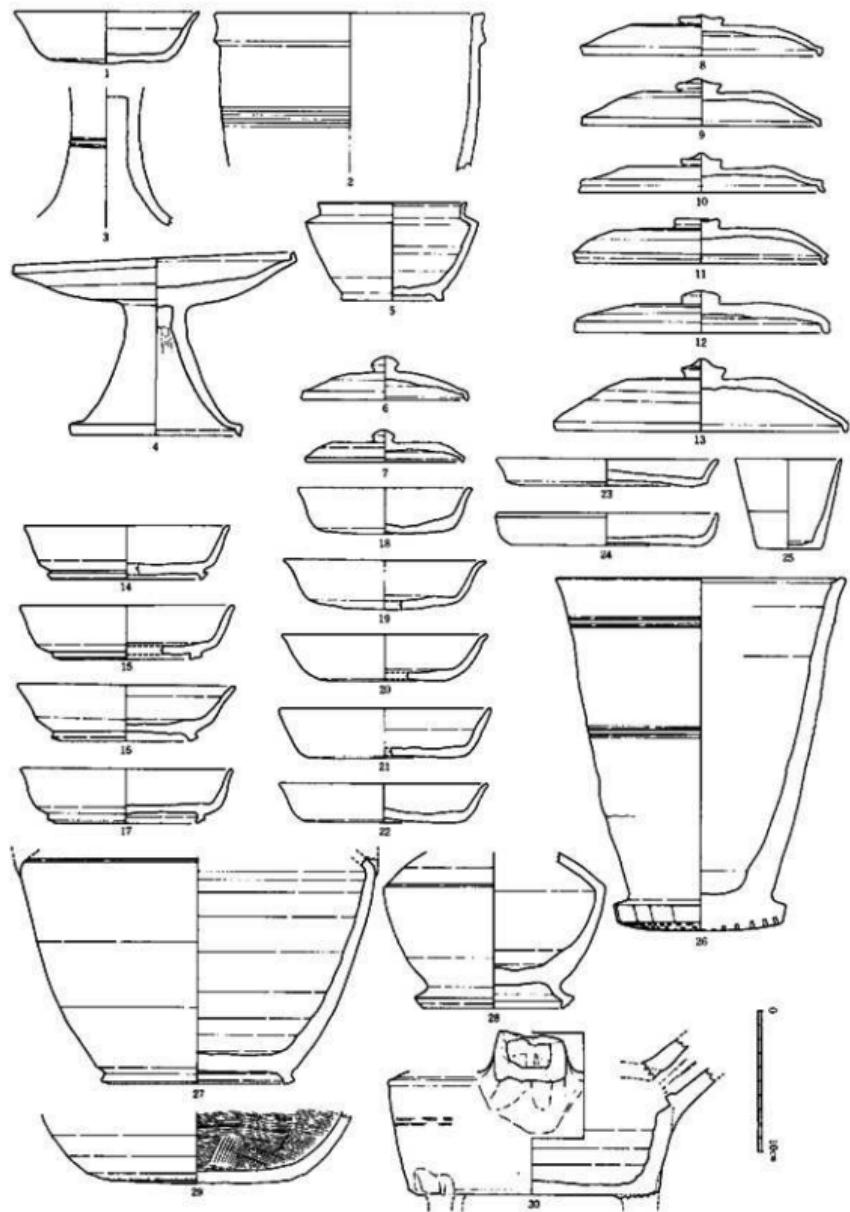
第22图 土坑出土遗物实测图（11号土坑）



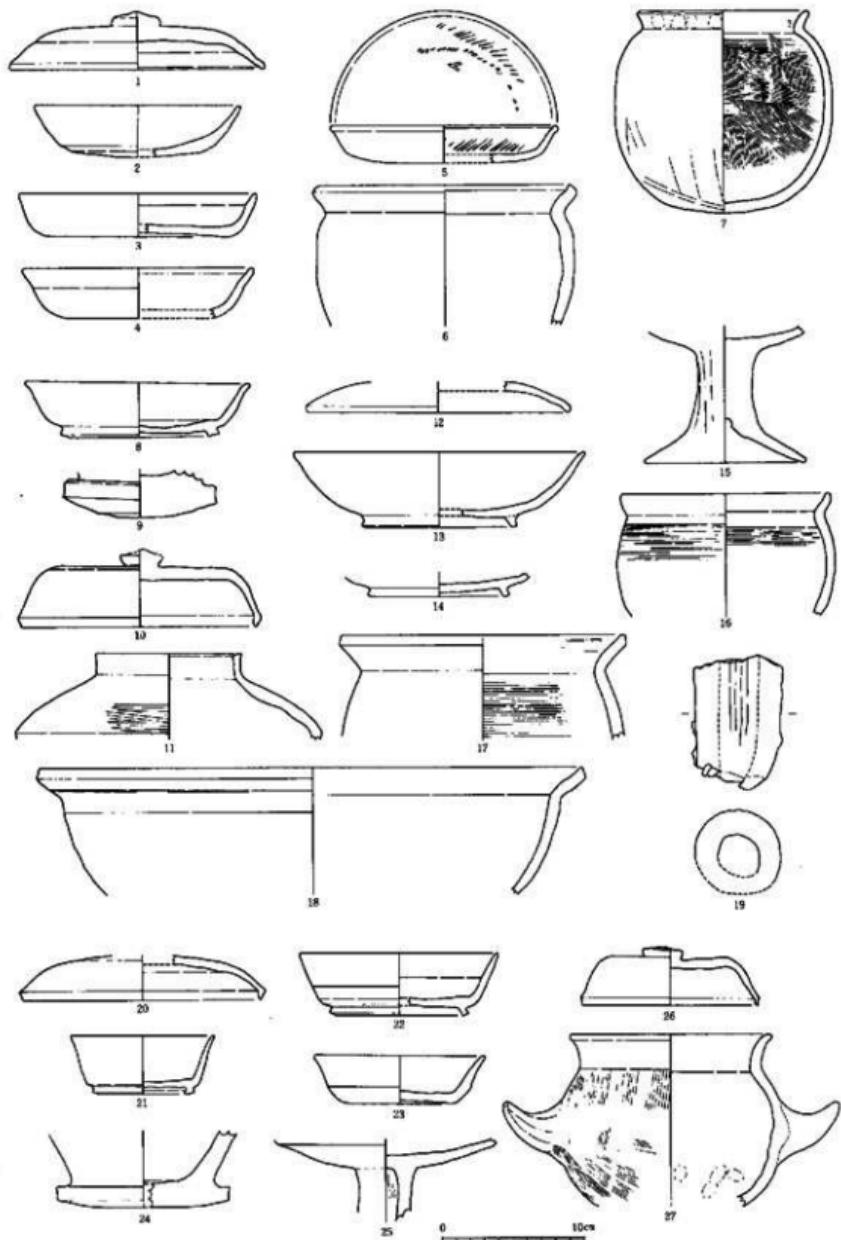
第23図 土坑出土遺物実測図（11号土坑）



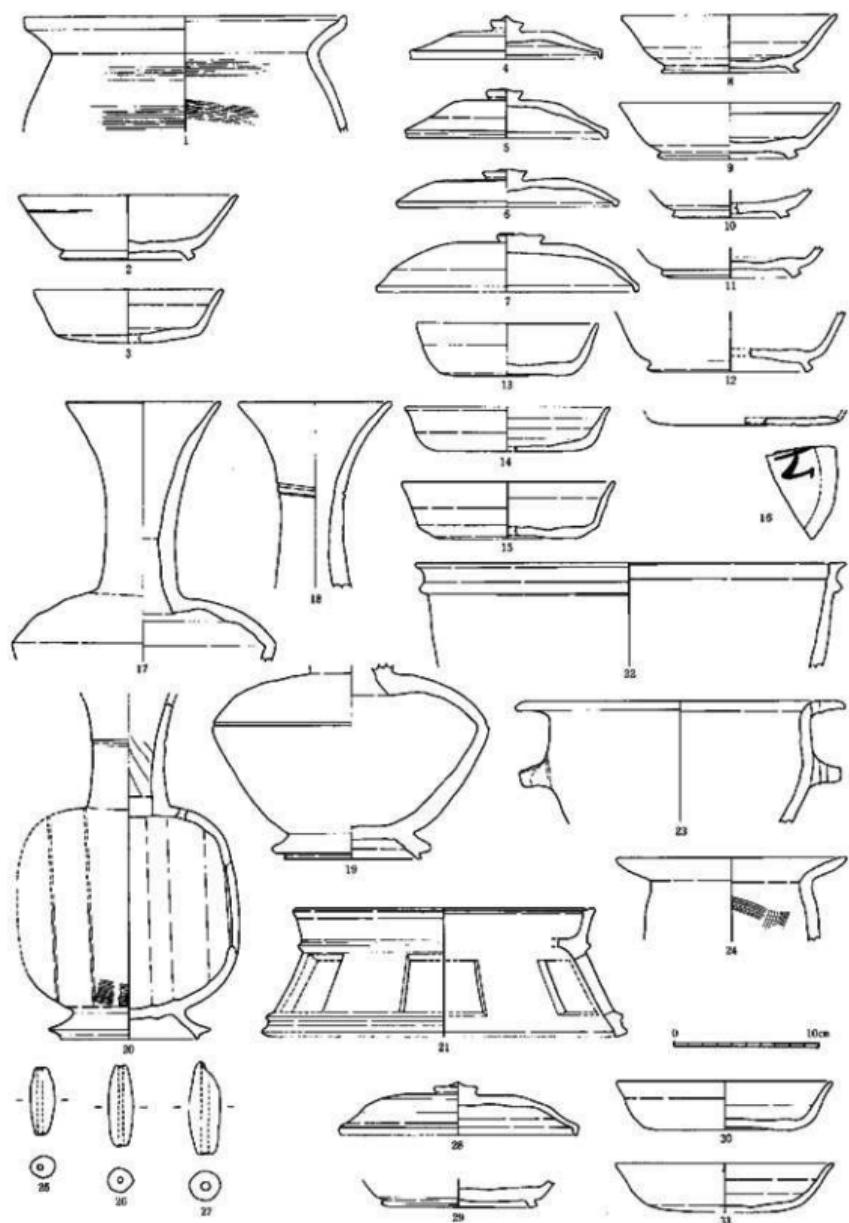
第24图 土坑出土遗物实测图 (11号土坑)



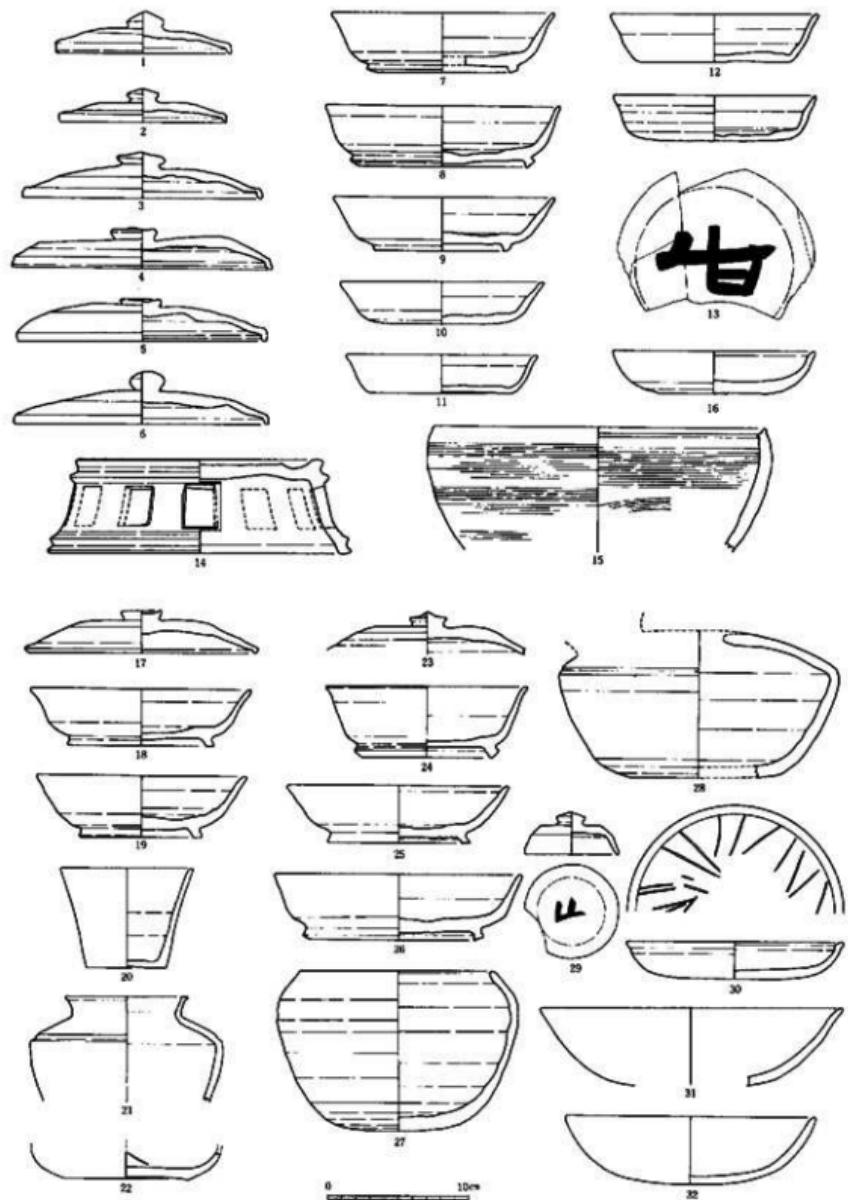
第25圖 土坑出土遺物實測圖 (9號土坑：1~5、12號土坑：6~30)



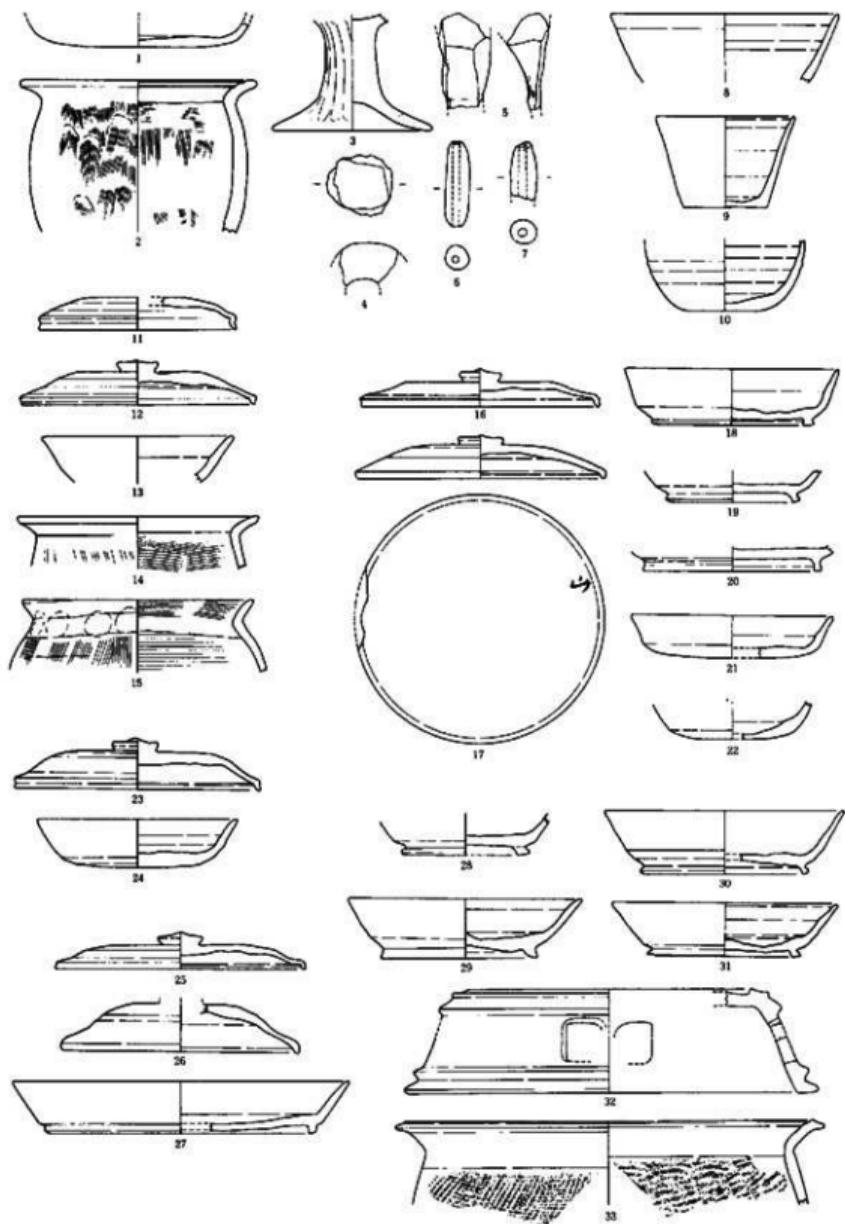
第26図 上坑出土遺物実測図(12号上坑：1～7、13号土坑：8～19、14号土坑：20～27)



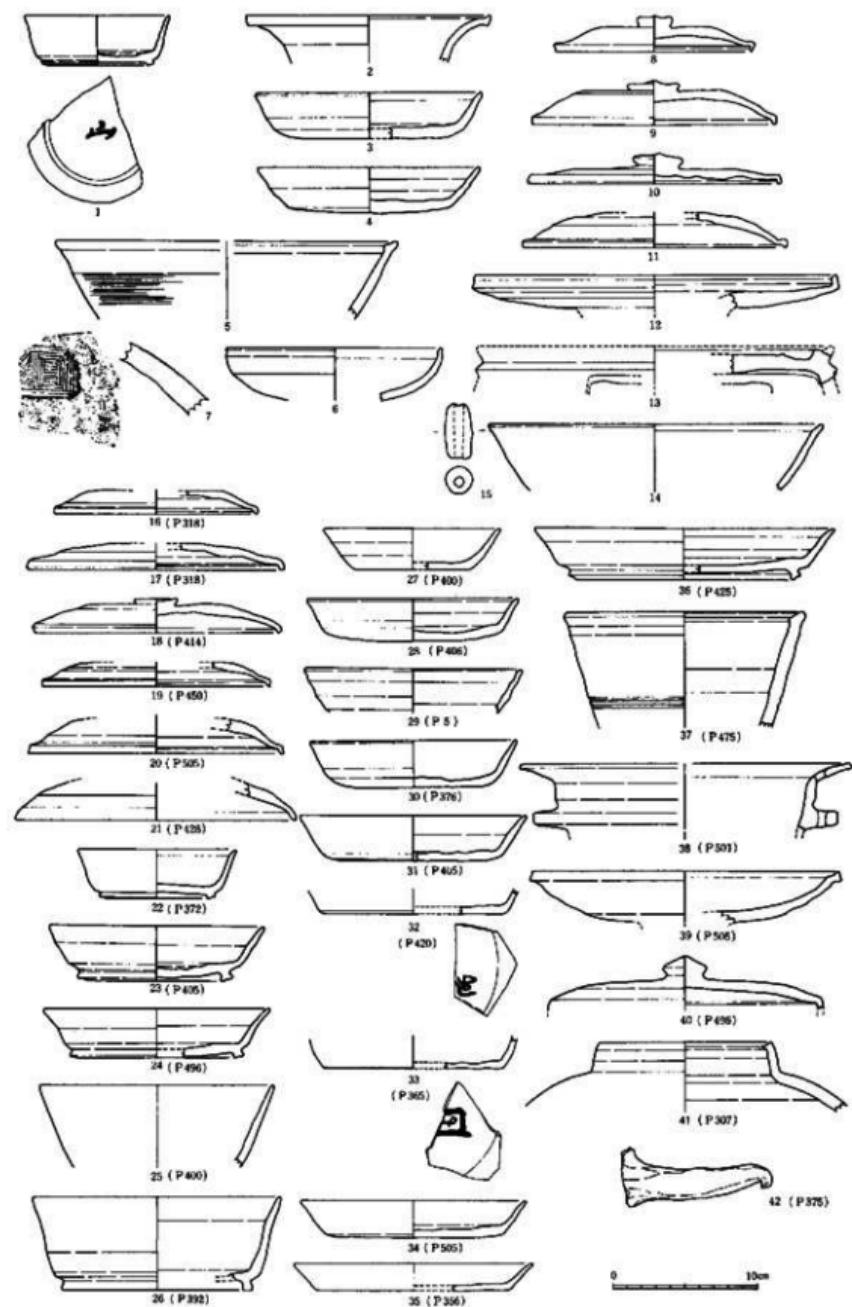
第27圖 土坑出土遺物測量圖 (14号土坑：1、15号土坑：2·3、16号土坑：4~27、17号土坑：28~31)



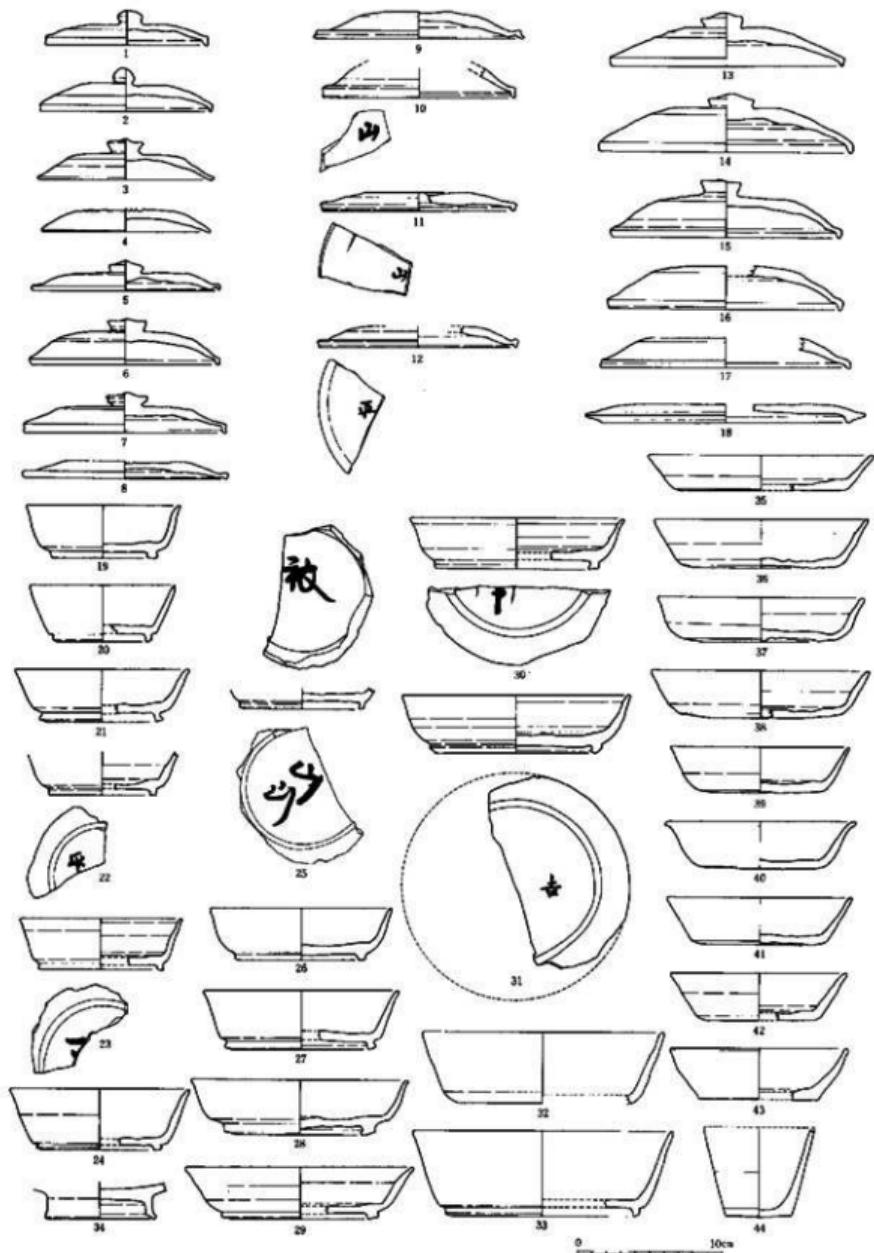
第28圖 土坑出土遺物實測圖 (18號土坑：1~16、19號上坑：17~22、20號土坑：23~32)



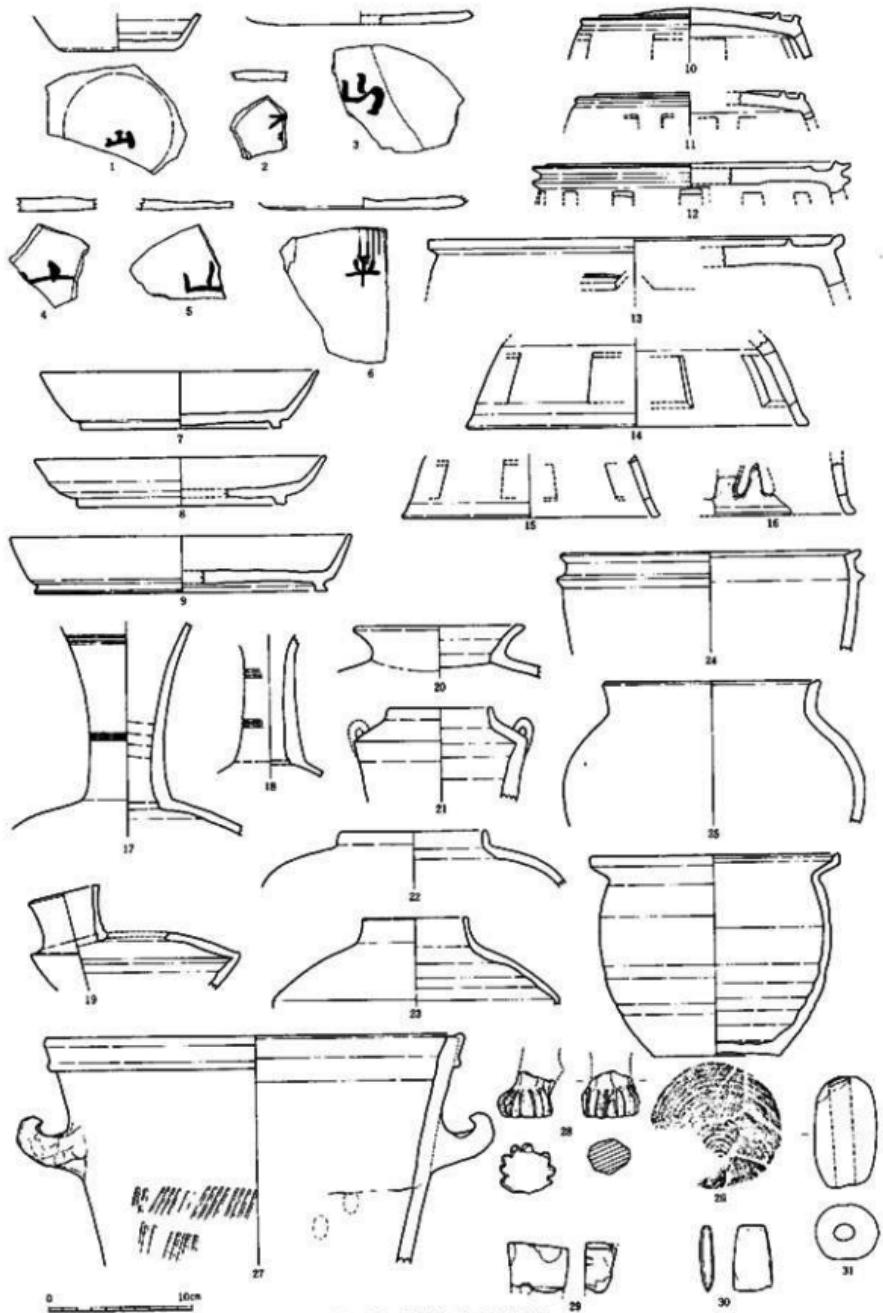
第29圖 土坑出土遺物實測圖(20号土坑：1~7、21号土坑：8~10、22号土坑：11~15、23号土坑：16~22、24号土坑：23~24、土坑群：25~33)



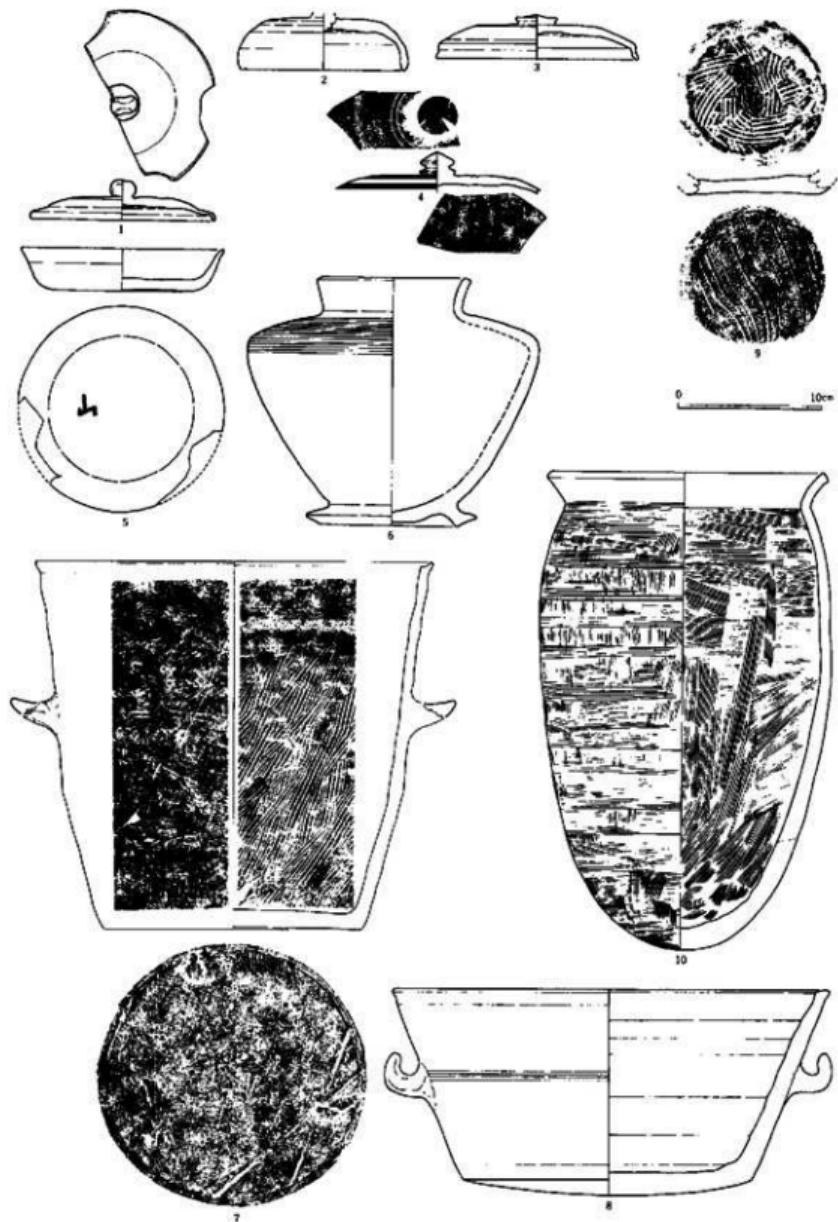
第30図 溝・ピット出土遺物実測図(6号溝: 1、8号溝: 2、9号溝: 3~7、10号溝: 8~15)  
(ピット: 16~42)



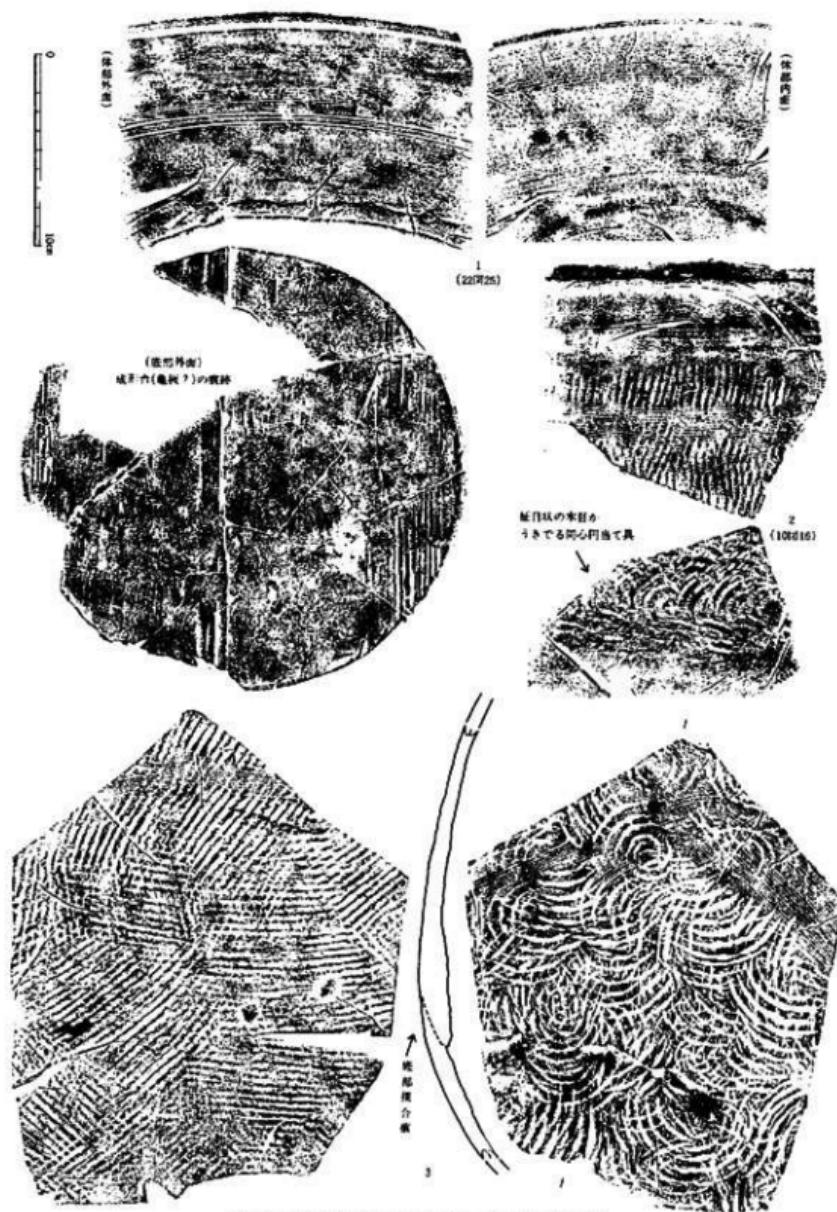
第31図 包含層出土遺物実測図



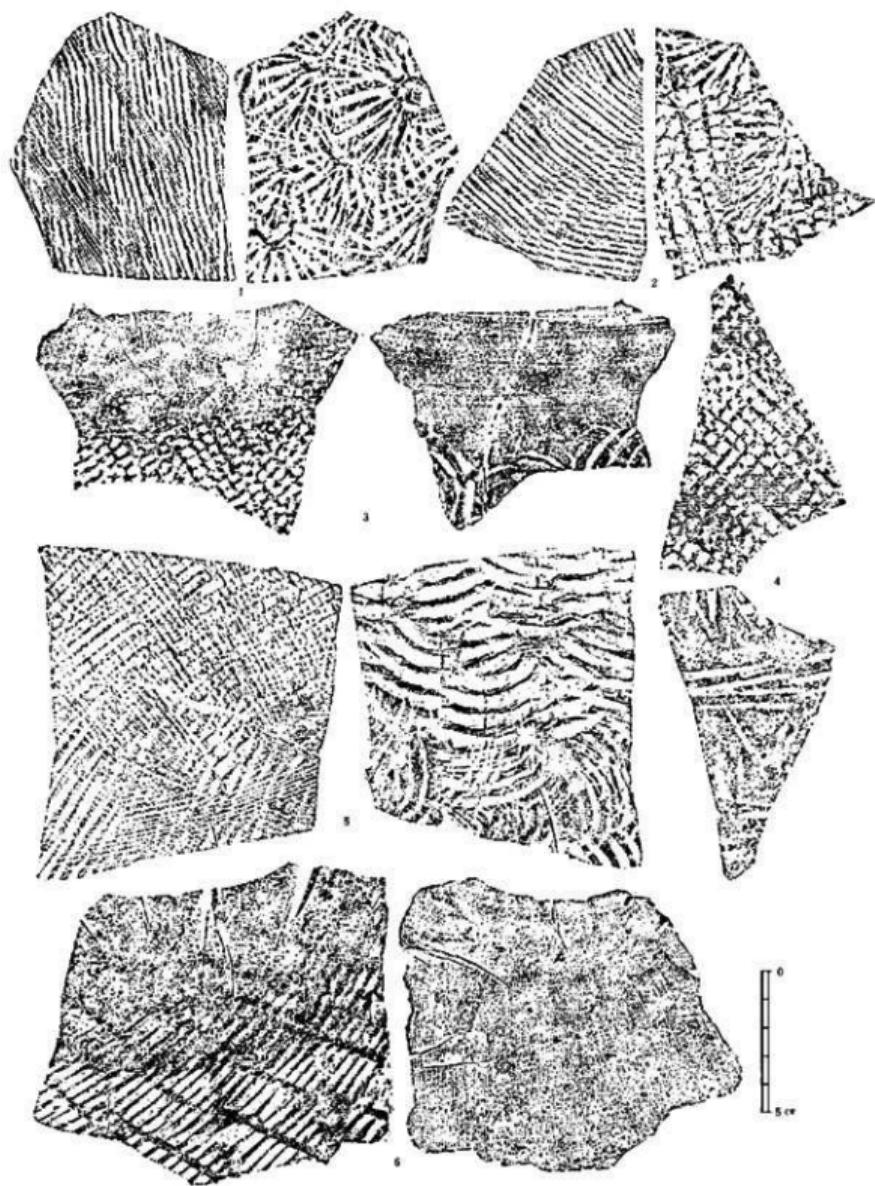
第322图 包含层出土物实测图



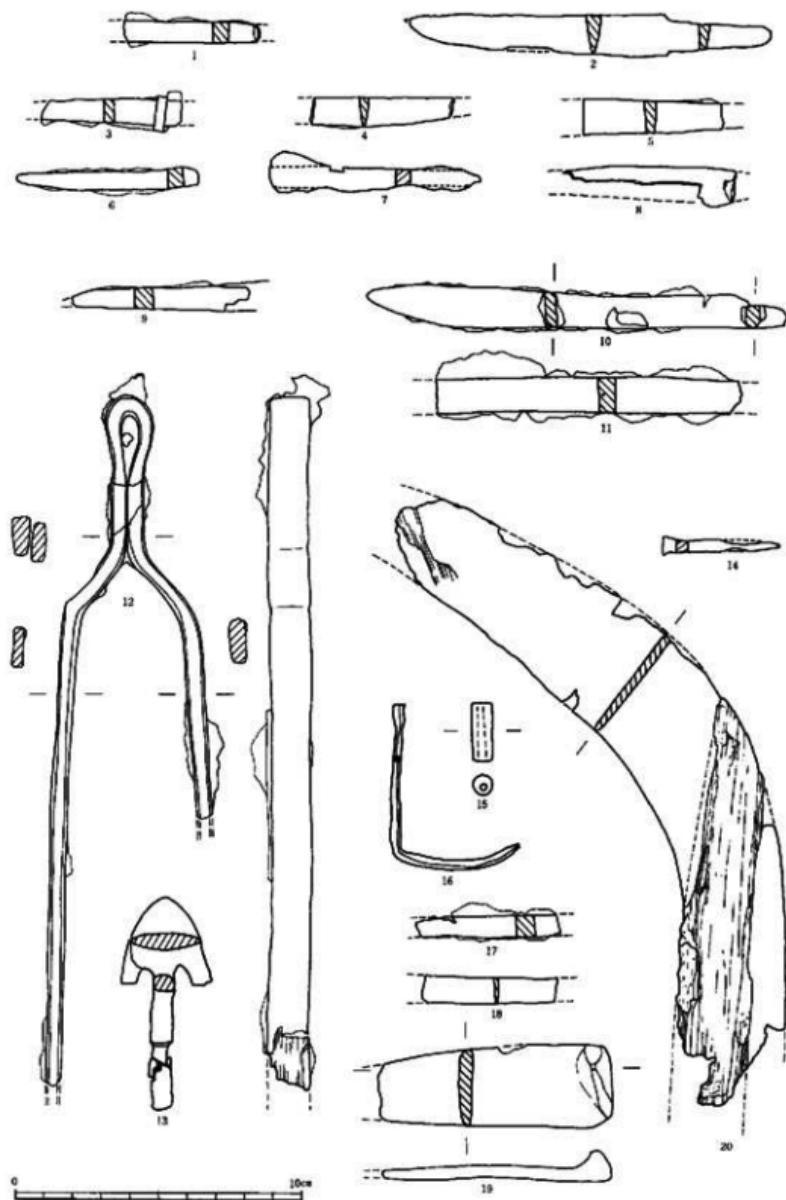
第33圖 出土土器実測図(1～4：包含層、5・8・10：8号土坑、6：13号土坑、7：7号土坑、9：11号土坑)



第34図 項芯器拓影 (1:11号土坑、2・3:4号土坑)



第35図 須恵器腰叩き板拓影(4号土坑: 6、11号土坑: 2・3、16号土坑: 5、F-12区包含層: 1、G-12区包含層: 4、5の内面は年輪状の木目とそれに直交する亀裂のうきでる同心円当て具)



第36图 铁器·玉器图(4号土坑：1、7号土坑：2、11号土坑：3~8、12号土坑：9、24号土坑：10~11，包含层：12~14·16~20，20号土坑：15)

## 第2節 瓦

### 1 出土瓦

篠原遺跡で出土した瓦は、60片あまり、パン・ケースに1箱程度であった。ほとんどが小さく割れており、全形を知り得るものは皆無である。

#### (1) 軒丸瓦 (第37図1)

図示した1点のみが16号土坑より出土した(取り上げ番号26)。複弁6葉蓮華文で周縁部が欠損している。蓮子は1+6。中房部には順次つめ込み法による粘土のつめ込み痕が認められる。<sup>出1)</sup>裏面には接続丸瓦の剥落痕(布目压痕の反転痕)が認められる。<sup>出2)</sup>丸瓦の接続方法は印ろう繼ぎ法であったと思われる。花弁の外側には沈線がめぐっているが、おそらく、周縁内面を笠削りする際に笠の先端があたってついたと考えられる。

この軒丸瓦の花弁は、花弁内の2つの子葉の間を画する中央の界線(以下、「弁央界線」と呼ぶ)が花弁の外までのび、さらに先端が三角形状をなし、あたかも間弁状の形態をもっている。それに対し間弁の端部は花弁に巻きついており、…見、どれが間弁なのか迷ってしまうし、すべてが間弁に見え、あたかも細弁蓮華文のような印象を与える。白鳳時代末期に複弁蓮華文などが細弁化する現象はよく認められるが、篠原遺跡のような文様は全国的にもまれである。

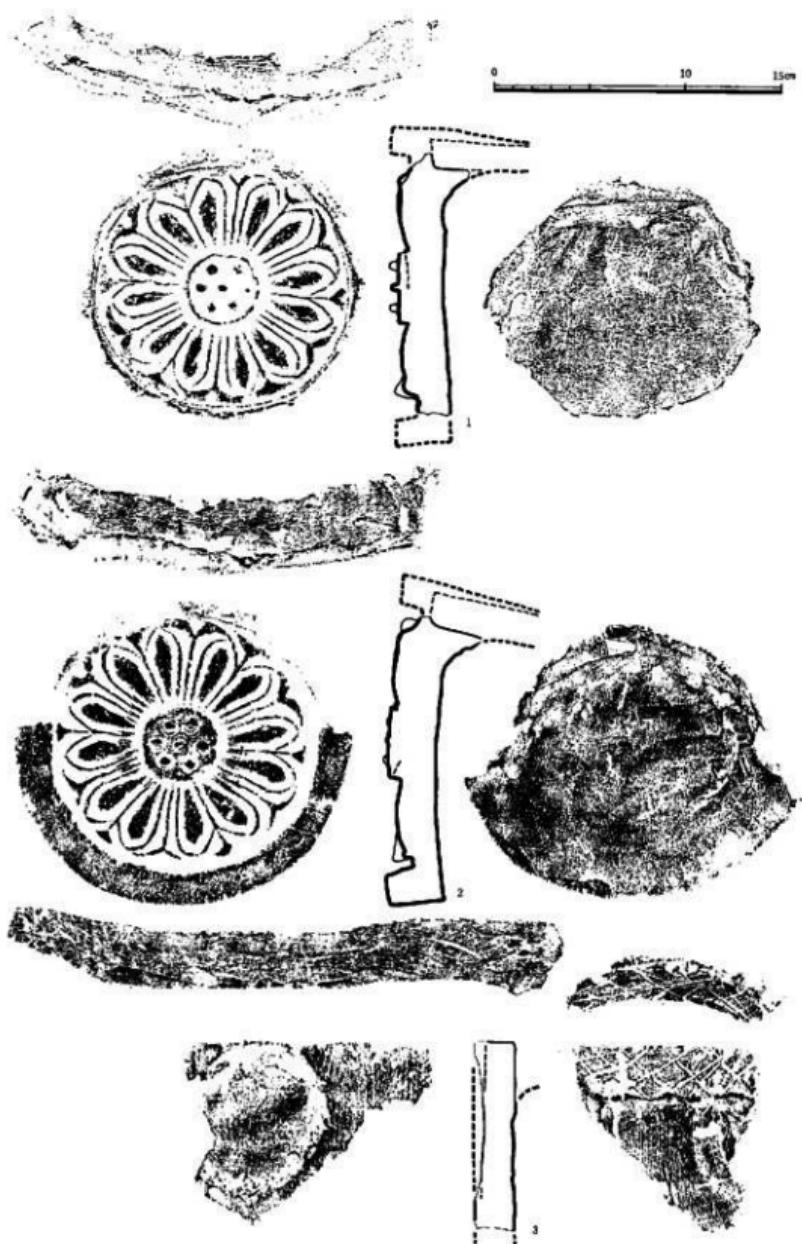
この軒丸瓦と同文のものが隣接する宮地廃寺でも出土している(第37図2・3)。ただし、図示した2は蓮子が低平で周縁をもつこと、中房周縁に圓線がないことは篠原遺跡の例と異なる。また、篠原遺跡のものには、一ヶ所だけ弁央界線端部がとくに発達した部分がある(写真図版の矢印部分)が、宮地廃寺のものには認められない。そのため、少なくとも図示した1と2が同范である可能性は低い。<sup>出3)</sup>しかし、異范であったとしても、中房部の粘土つめ込み痕が顕著であること、周縁内面を笠削りし、花弁の周囲に笠先のあたった痕跡(沈線)がめぐること、丸瓦との接続が印ろう繼ぎ法であることは一致している。

なお、宮地廃寺からは、瓦当部から剥落した接続丸瓦も出土している(第37図3)。この丸瓦の広端面と門面広端部側には「×」印の刻み目が連続的に施されている。宮地廃寺・篠原遺跡では軒丸瓦が一種類しか確認されていないため、この丸瓦は上記の軒丸瓦に接続する可能性が高い。しかし、今のところ両遺跡とも接続丸瓦の剥落痕に刻み目の反転痕は確認されていない。

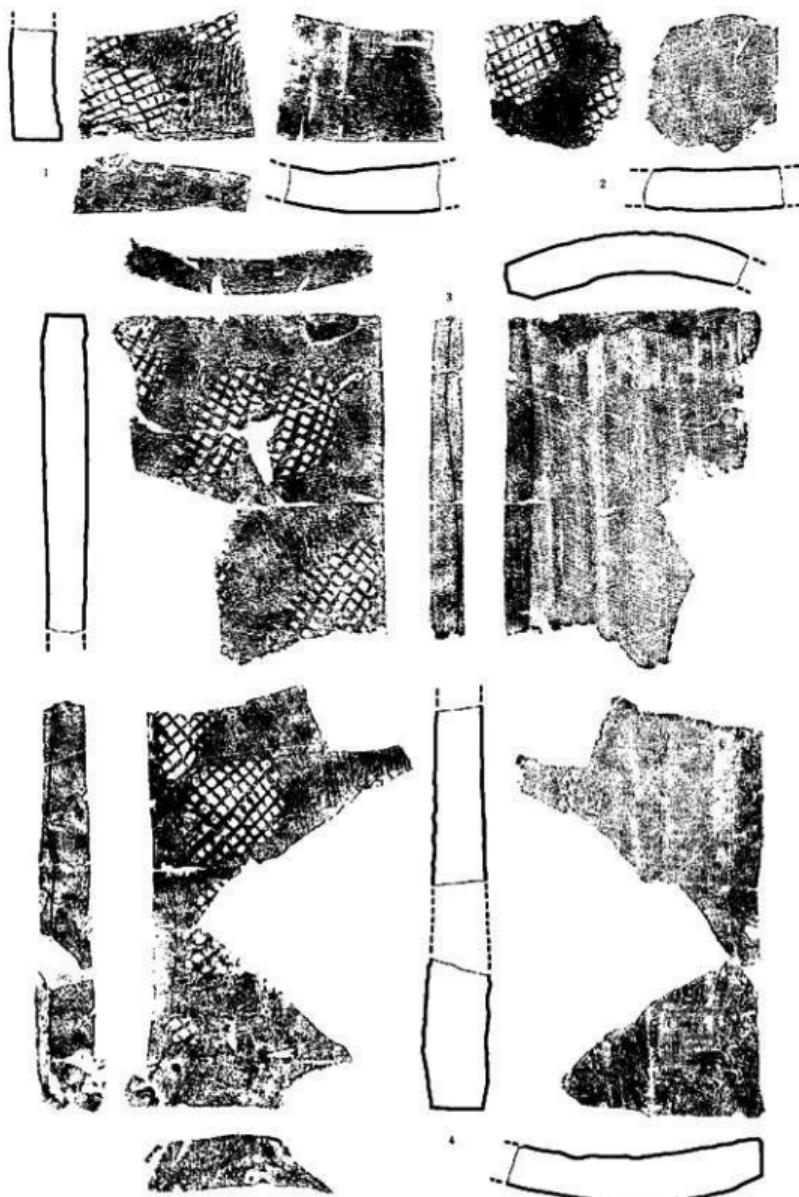
#### (2) 平瓦 (第38図1～第42図2)

出土した平瓦は、格子叩きの有無により、大きく2つに分類できる。

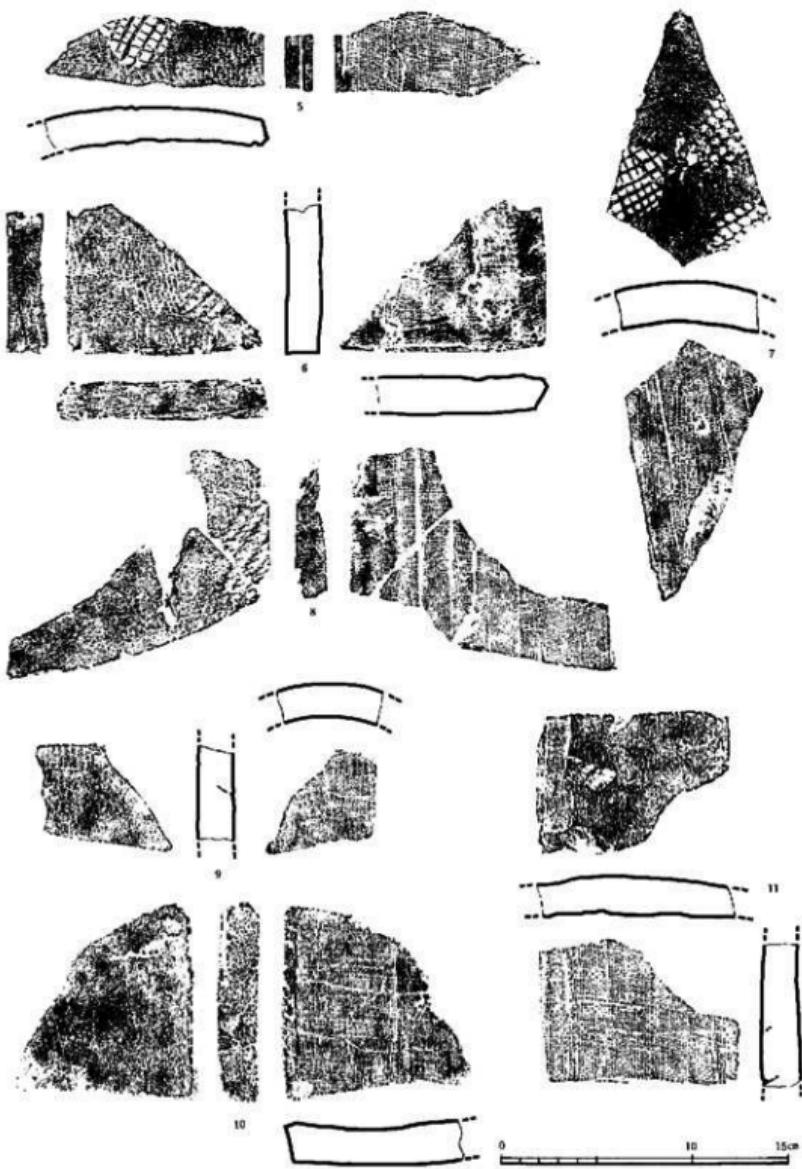
I類(1～8) 凸面に繩叩きを施したのち、その痕跡をなで消し、さらに格子叩きをまばらに施すもの。格子の叩き板は1つであった可能性が高く、その端部には格子文がみだれて放射状になっている部分がある(5・7)。2次叩きの格子叩きはまばらに施されることから、本来の意味での「叩き締め」の効果は弱かったと考えられ、1次叩きの繩叩きだけで叩き締めの効果は充分であったと想定できる。そのため、2次叩きの意義は、屋根に葺いたときのすべり止めや、生産者側にとっての装飾的効果、もしくは痕跡的技法などと推定されるが、十分な説明を与えるこ



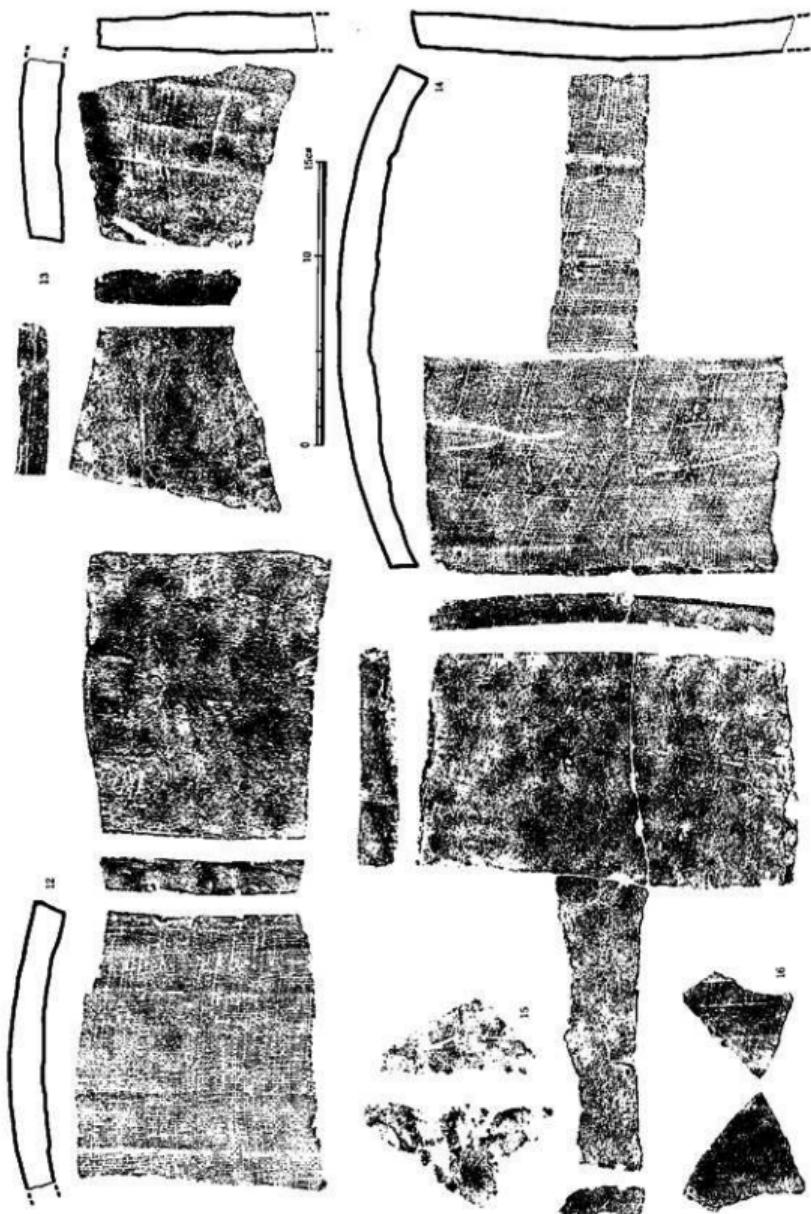
第37図 藤原達跡(1)・官地庵寺(2・3)出土軒丸瓦( $S = 1/3$ )



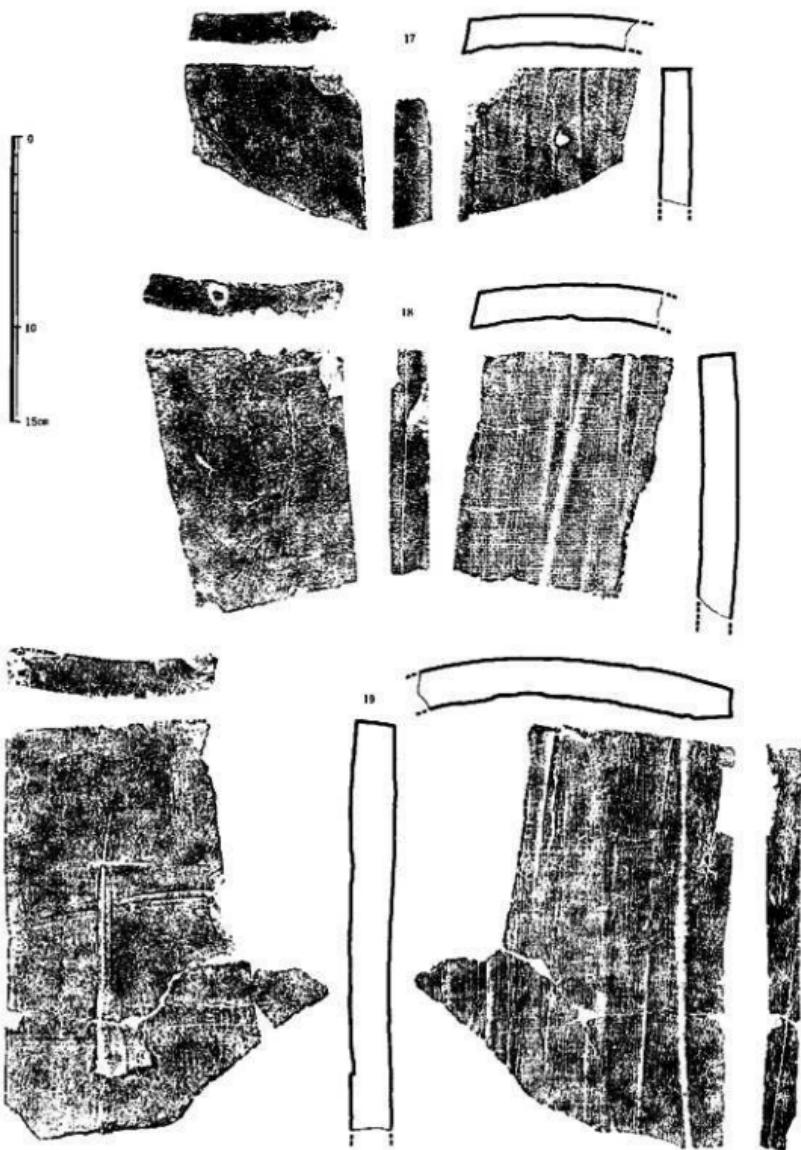
第38圖 藤原遺跡出土平瓦(1)平瓦 I 類 (S - 1/3)



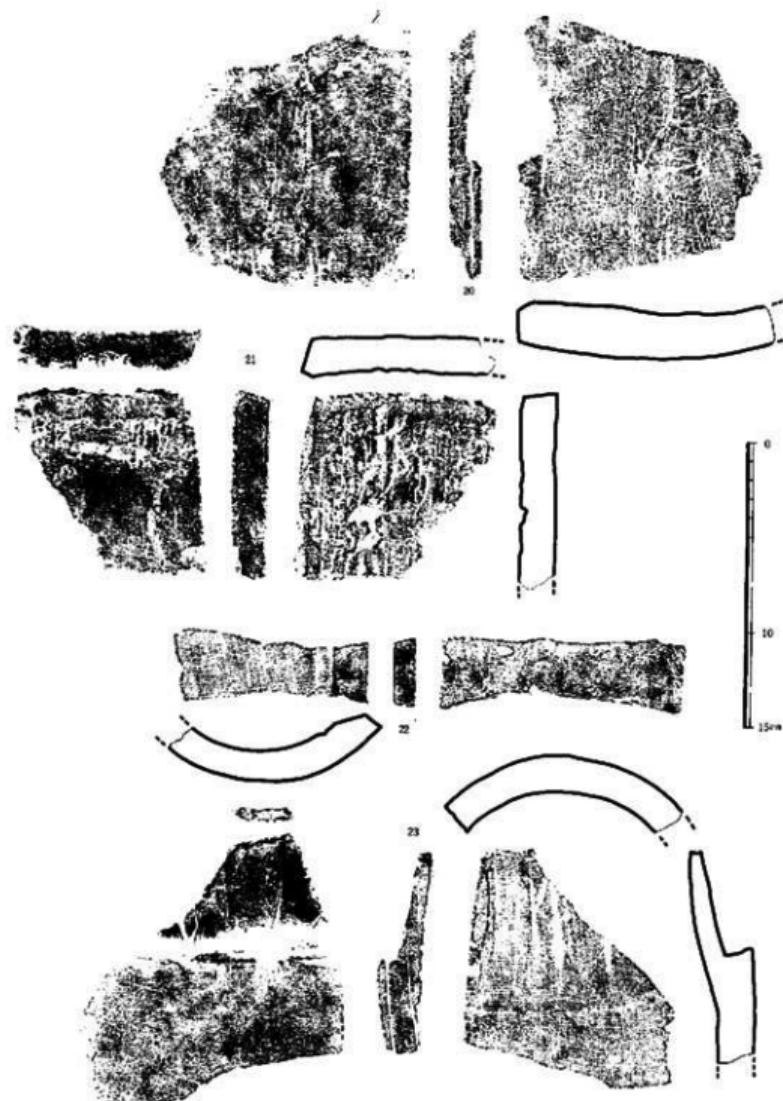
第39図 藤原遺跡出土平瓦(2)平瓦Ⅰ類(5~8)・平瓦Ⅱ類(9~11)、粘土ひも巻上痕(S=1/3)



第40圖 藁原遺跡出土平瓦(5)平瓦II類 (S=1/3)



第41図 球原遺跡出土平瓦(4)平瓦II類(S=1/3)



第42圖 樸原遺跡出土平瓦(5)- 九瓦、平瓦口類(20 - 21)、九瓦(22 - 23)(S = 1/3)

第3表 糸原遺跡出土平・丸瓦観察表

型式	色調	地成	布目(3×3cm)	厚さ(最大厚)	内面	外面	出土位置・(整理番号)
1 平瓦I	青灰 色	堅 織	24×35本	2.5cm	繩叩→格子叩		9号土坑 (1)
2 "	青灰~淡褐	"	24×32	2.4	格子叩		D-13区 06
3 "	灰~褐灰	"	22×24	2.3	"		4号、16-17号土坑、E-14区 (8)
4 "	青灰 色	"	27×32	3.3	"		12号、16-19号土坑 (9)
5 "	"	"	21×26	1.9	繩叩→格子叩	粘土ひも巻上痕?	14号土坑 (6)
6 "	"	"	20×29	2.1	"	布ぬじ合わせ	G-13-14区地山直上 (9)
7 "	"	"	24×21	2.1	格子叩	板状具压痕	20号土坑 (6)
8 "	"	"	23×26	2.1	繩叩→格子叩	"	不明 (6)
9 平瓦II?	灰 色	"	29×28	1.9	繩叩なで消し	粘土ひも巻上痕	17号土坑 (9)
10 平瓦II	"	良 好	27×28	2.0	無文	"	13号土坑 (4)
11 "	青灰 色	堅 織	21×22	2.0	"	"	" (5)
12 "	"	"	20×21	1.8	"	"	不明 (5)
13 "	"	"	28×32	2.5	"	板状具压痕	11号土坑 (2)
14 "	"	"	23×22	1.9	"	"	16、17号土坑 (2)
15 "	? 淡 黑 色	良好(瓦質)	22×27	2.1	"	"	E-9区 (2)
16 "	? 青灰 色	堅 織	27×32	2.2	繩叩なで消し	板状具压痕	E-10区 (10)
17 "	"	"	26×30	1.7	繩割?	"	16号土坑 (3)
18 "	"	"	23×24	2.0	無文	"	不明 (8)
19 "	"	"	27×32	2.2	"	板状具压痕 よりひも分離痕	14号土坑 (7)
20 "	黄灰 色	甘	(22×24)	2.4	"	"	4号土坑 (3)
21 "	灰 色	良 好	-	2.0	繩叩なで消し	布ぬじ合わせ?	耕土中 (8)
22 丸瓦	青灰 色	堅 織	31×27	2.0	無文	"	17号土坑 (6)
23 "	"	"	32×26	1.8	"	"	11号土坑 (3)
24 平瓦II?	黄灰 色	甘	(20×25)	2.0	"	"	不明、以下(同様) (以下番号と同じ)
25 "	? "	"	-	2.0	"	"	8号土坑
26 "	"	"	25×32	1.7	"	"	15号土坑
27 "	"	"	(22×24)	1.9	"	"	E-10区
28 "	? "	"	24×29	2.3	"	"	10号溝か
29 "	"	"	-	2.1	繩叩なで消し	"	E-10区
30 "	? "	"	27×30	2.0	無文	"	E-11号土坑上面
31 "	? "	"	29×30	1.9	"	"	10号溝
32 "	"	"	21×25	2.0	"	"	E-12区、16号土坑
33 "	"	"	20×21	2.3	"	"	不明
34 丸瓦	"	"	28×29	1.4	"	"	C-8区暗茶褐色土 器群
35 平瓦I	"	"	-	2.1	格子叩か	"	16号土坑
36 平瓦II?	"	"	-	2.1	無文	粘土ひも巻上痕	不明(写真回転)
37 "	"	"	-	1.8	"	" ? "	"
38 "	"	"	-	2.0	"	"	17号土坑
39 "	"	"	-	2.2	繩叩なで消し	"	9号土坑
40 "	"	"	-	1.9	無文	"	4号土坑
41 "	"	"	-	1.9	"	"	不明
42 "	灰 色	"	-	2.0	"	"	8号溝
43 "	黄灰 色	"	-	1.6	"	"	不明
44 "	"	"	-	1.5	"	"	16号土坑
45 "	"	"	-	1.8	"	"	不明
46 "	紺 色	"	-	2.0	"	"	"
47 "	赤 茄 色	"	-	2.0	"	"	不明

(これ以外に4号土坑2片、7号土坑2片、16号土坑5片、19号土坑1片、20号土坑1片、24号土坑1片、包含層2片、不明2片の瓦が出土しており、軒丸瓦を含め、計64片の瓦が出土している)

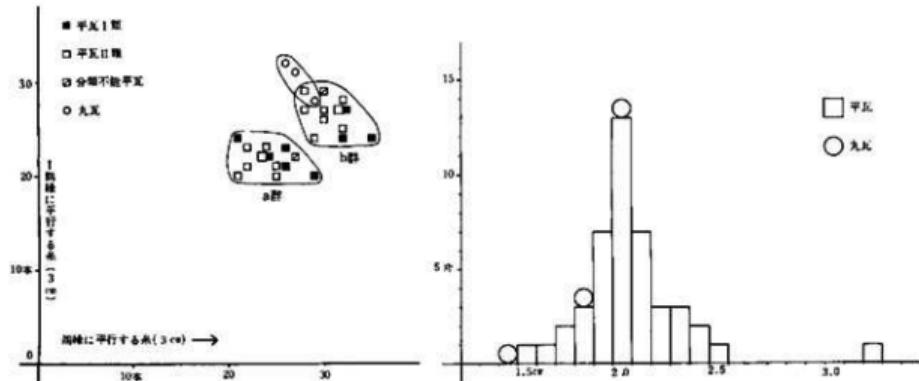
とができる。凹面には糸切り痕が確認されない。布の縫じ合わせ痕をもつものがあるため(4・6)、桶巻作りと考えられるが、横骨痕は明瞭ではない。格子叩きは側面で切られるものがあるため(3・4)、粘土円筒を分割前に施されていることがわかる。

**II類(9~21)** 凸面に縄叩きを施したのち、その痕跡をなで消すもの。細片資料が多いため、I類と混同している例も含まれている可能性がある。また、叩きしめの痕跡が全く残らず、縄叩きか否かすら確認できない資料も多いため、不確定要素の多い分類と言わざるを得ない。ここでは、I類の工程のうち、2次叩きを省略したものとして理解しておく。後述する様に、叩き繰め以外の要素でもそうした推定は裏付けられる。

**平瓦の布目密度と厚さの分布(第43図)** 平瓦の布目密度はI類・II類の別を問わず、大きく2つの群にまとまっている。ややあらいa群とやや細かいb群に分類できるが、これは異なる2つの布の存在を示している可能性が高い。厚さは2.0cmを中心にした正規分布を示しており、4だけが例外的に厚い。I類・II類とも同様の厚さ分布を示し、布目と同様に区別できない。

**粘土ひも巻上痕(5、9~11)** 凹面に粘土ひも巻上げ痕を明瞭に残すものが何点か認められ、かすかな痕跡のものを含めればかなりの量を占める。また、平瓦の中に糸切り痕が一切認められないことから、I類・II類を問わず、粘土ひも巻上げによって成形されたと思われる。なお、I類・II類とも布の縫じ合わせ痕を残すものがあることから(4・6・20)、双方とも桶巻作りと考えられる。

**凹面板状具圧痕(7・8・13・16~18など)** I類・II類とも凹面布目がつぶれぎみのものが多く、中には板状具(横骨か)の圧痕が明瞭に残るものがある。その圧痕に木目などは認められず、縦方向の弱いなでつけ調整とも考えられるが、なで目や砂粒の移動などは確認できない。おそらく、粘土円筒を分割後、横骨を組んで作った凸型状の台の上で何らかの2次的調整を加えた



第43図 萩原道路出土平・丸瓦の布目密度(左)と厚さ(右)の分布

のだろう。しかし、その調整が何であるかは不明である。凸型状の台に布などの離れ材を用いていないのは、分割後の乾燥の進んだ段階であるため必要でなかったのであろう。

燃ひも分割突帯（19） 分割突帯の痕跡を残すものが1点だけ確認できた。分割突帯の観察は極めて遅れているが、北陸では燃ひも分割突帯がいくつか確認されている。<sup>注4)</sup>

以上のように、平瓦は2つに分類できたが、その違いは2次叩きを施すか否かという点だけであり、それ以外の差は認めにくい。I類に側面を取りするものが多少多い傾向もあり、II類では2次叩きとともに工程の省略化が進んでいると想定できる。しかし、双方とも同一瓦屋内で製作された可能性が高く、I類・II類の差は時間差か、同一瓦屋内の製作者の差、もしくはその両方の可能性がある。しかし、出土量が少なく生産地も未発見であるため、今後の検討課題である。

### （3）丸瓦（第42図22・23）

丸瓦は平瓦に対して著しく少ない。玉縁式。厚さは平瓦とほぼ同じ。布目は平瓦より群の密度に近いが、それよりもやや細かい別の布である可能性が高い。量が少ないため、平瓦のような粘土ひも巻上げを行なっているか否か確認できない。

## 2 篠原遺跡出土瓦の系譜

篠原遺跡から出土した瓦は、隣接する宮地廃寺と同じものである。検出された遺構や瓦の出土量から、篠原遺跡に瓦葺建物が存在したとは考えにくい。そのため、瓦は宮地廃寺、もしくはその瓦屋から何らかの理由で持ち込まれたか、混入したものと想定される。

よって、篠原遺跡出土瓦の系譜は、そのまま宮地廃寺の瓦の系譜に等しい。

### (1) 軒丸瓦の系譜

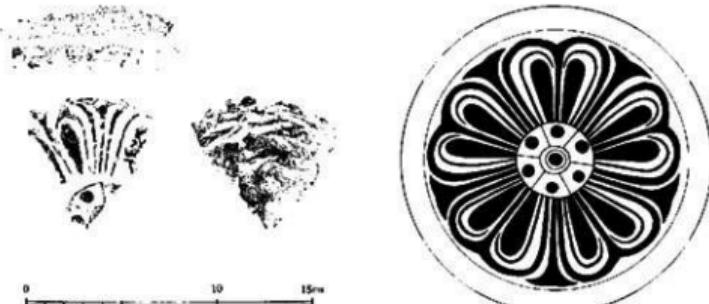
津波倉廃寺式軒丸瓦の系譜 前述したように、宮地廃寺・篠原遺跡の軒丸瓦は、全国的に類例の少ないものであるが、管見による限り、同一文様系譜の軒丸瓦が3例確認できる。

まず、宮地廃寺の約5.5km南西の津波倉廃寺から、祖型になると思われる軒丸瓦が採集されている(第44図<sup>(注5)</sup>)。この軒丸瓦は立体感に富み、文様に丸味がある。文様が硬直化・形式化している宮地廃寺・篠原遺跡のものより明らかに古い様相を示している。中房内に蓮子を圓する周縁と界線があり、花卉が5葉、蓮子が1+6と復原される。宮地廃寺の軒丸瓦の蓮子にはすべてに周縁が認められるが(第37図2)、津波倉廃寺では中央の蓮子だけにやや大きめの周縁が認められるにすぎない。津波倉廃寺からは細片の軒丸瓦しか採集されていないため、十分な復原ができないが、第44図右のような文様であったと推定される。今後、資料の増加があれば変更しなければならない可能性がある。

津波倉廃寺の軒丸瓦と同文の例が、滋賀県・満願寺跡で出土している。写真観察による限り、文様構成は同じだが、やや退化しているように思われる。満願寺跡周辺では同一文様系譜の軒丸瓦<sup>(注6)</sup>が確認されているため、滋賀県北部でも江沼地域同様、この文様系譜の「系列」が認められるだろう。

また、福井県・興道寺廃寺では、宮地廃寺・篠原遺跡よりもさらに退化した軒丸瓦が採集されている。第47図右のように細弁8葉蓮華文、蓮子1+4と復原できる。弁央界線が完全に間弁化したため、複弁が細弁化している。

管見による限り、上記以外の類例を確認していない。これらのうち、津波倉廃寺のものがもっと古い様相を示すことから、この文様系譜の軒丸瓦を「津波倉廃寺式」軒丸瓦と呼ぶことにす



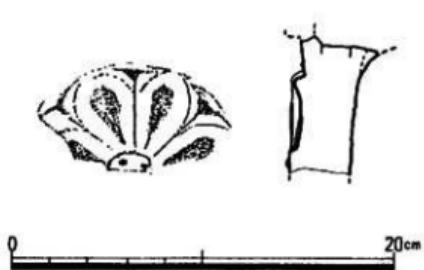
第44図 津波倉廃寺採集軒丸瓦とその復原模式図(S=1/3)



第45図 津波倉廃寺式軒丸瓦の文様変化



第46図 滋賀県・満願寺出土軒丸瓦文様概念図



第47図 福井県・興道寺廃寺出土軒丸瓦とその復原図(註出文献より作成、S=1/3)

る。津波倉廃寺式軒丸瓦は、今のところ津波倉廃寺→満願寺跡→宮地廃寺・保原遺跡→興道寺廃寺と言う順に変遷したと考えられる。津波倉廃寺と満願寺跡とは文様構成に差がないが、満願寺跡は立体感や鮮明さに欠ける。文様の変化を概念化すると第45図のようになる。

津波倉廃寺式軒丸瓦が、以上のように江沼、若狭、近江北部と飛び石的に分布することは、当時の北陸と近江との関係を知る上で極めて興味深い。しかも、今のところ、津波倉廃寺を源流として、東から西へと伝搬した可能性があり、「國家権力」による技術・文化伝搬とは別の時限での動態を暗示させる。なお、この文様の粗型と伝搬の在り方については、今後、近江北部における状況を検討した上で、あらためて論議されなければならないだろう。

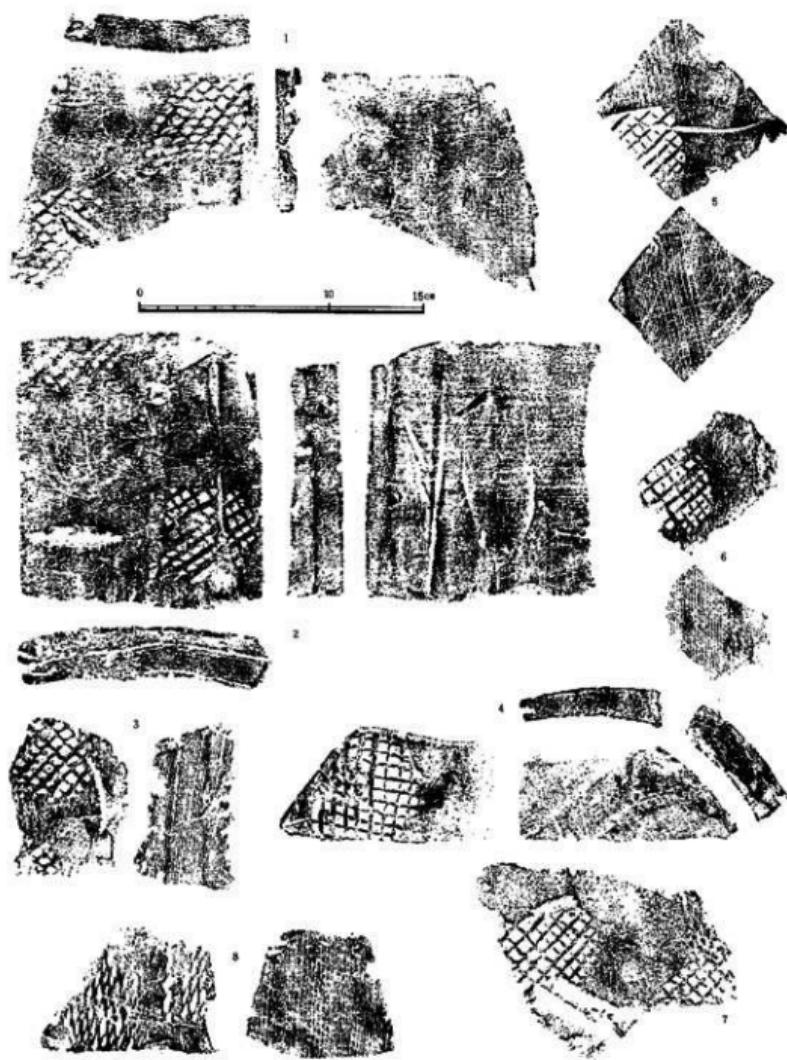
**紀寺式軒丸瓦の系譜** 江沼地域に確認される5つの白黒寺院と窯のうち、上記のように2つの廃寺から津波倉廃寺式軒丸瓦が出土している。それに対し、黒瀬1号窯、保賀廃寺、弓波廃寺では紀寺式軒丸瓦が出土しており、江沼地城を2分している。3つの遺跡には同窯関係が認められず、立体感の喪失や圓錐が太くなる様子から、黒瀬1号窯→保賀廃寺→弓波廃寺という前後関

様が想定される。3遺跡とも忠実な紀寺式であり、文様構成は変化していない。丸瓦の接続技術は、黒瀬1号窯が印ろう焼き法で江沼の津波倉廃寺式と基本的に同じであるのに対し、保賀廃寺、弓波廃寺の紀寺式は瓦当裏面に凹みをもつものであり、「嵌め込み式法」などによる特殊な技法を用いている。<sup>(註9)</sup>弓波廃寺には瓦当裏面に凹みをもたないものも出土しているが、弓波廃寺では末松廃寺式の軒丸瓦も出土しており、その影響を受けた可能性もある。瓦当文様では密接な関連を想定せざるを得ないが、その接合技術は3者3様であったと言えよう。

紀寺式軒丸瓦の分布を第48図に示した。図示した範囲外には、鳥取県・齊尾廃寺、千葉県・二日市場廃寺、真行寺廃寺があげられるにすぎず、ほとんどが畿内とその周辺に集中する。とくに、京都府南部と大阪府での集中傾向が著しい。各地で出土する紀寺式軒丸瓦は、奈良県を除いて、すべてが明らかに紀寺より退化している。また、各地では独自の変化を示しており、相互に密接な関係をもっていたとは考えにくい。それぞれの地域の中で、系譜を異にして導入・展開したものと想定される。江沼地域と紀寺の間にある京都府南部や滋賀県南部の例も、江沼より退化が進んだものであり、双方とも系譜を異にすると思われる。<sup>(註10)</sup>今のところ、江沼地域の紀寺式軒丸瓦の原型は、直接、奈良県・紀寺に求めざるを得ない。あるいは、江沼こそ紀寺式軒丸瓦の故地であった可能性すらあるかも知れない。畿内のなかでは、攝津に出土例がなく、大和も極めて少ない。大和において分布が稀薄なことは、法隆寺式や川原寺式軒丸瓦と著しく異なり、瓦当文様としては垂流の1つにすぎなかったことを物語るのであろう。また、紀寺では細弁化した紀寺式軒丸瓦も<sup>(註11)</sup>存在し、江沼地域と異なる退化傾向を示している。



第48図 津波倉廃寺式・紀寺式軒丸瓦の分布



第49图 宫地嘴寺出土平瓦

江沼地域の紀寺式軒丸瓦についてまとめてみると、①全国的にももっとも忠実な紀寺式であること、②瓦当文様を忠実に踏襲しており、たとえ退化しても文様構成が変化しない点は大和・紀寺以上であること、③瓦当文様では密接な関係を想定せざるを得ないが、3遺跡の丸瓦接合技術は一致しないこと、などという点が指摘される。

## (2) 平瓦の系譜

篠原遺跡I類のように2次叩きを施す平瓦は周辺の各遺跡でも認められる。江沼地域における平瓦の流通・技術系譜を明らかにする上で、以下に各遺跡の平瓦を概観し、その中で篠原遺跡の平瓦の位置付けを行ないたい。なお、各遺跡の平瓦の分類は、「北陸の古代寺院—その源流と古瓦一」桂書房（1987）に基づいている。

### 宮地廃寺の平瓦（第49図）

I類（1～7） 篠原遺跡I類と同じ。叩き板も同一。ただし、5のような糸切り痕をもつものがあり、すべてが粘土ひも巻上げ作りとは考えにくい。

II類 篠原遺跡II類と同じ。

III類（8） 凹面に縄叩きを施したのち、未調整のもの。篠原遺跡では未確認。

### 弓波廃寺の平瓦（第50・52図）

I類（1） 細かい斜格子叩きを密にすき間なく施すもの。叩きしめの円弧を描く。斜格子文やその叩き方は、野々市町・末松廃寺平瓦I類と酷似する。

II類（2） I類よりややあらい斜格子叩きを密に施すもの。叩きしめの円弧を描く。

III類（3） II類よりさらにあらい斜格子叩きをまばらに施すもの。

IV類（6） 彫りの浅い斜格子叩きをややまばらに施すもの。

V類（4・5） 縄叩きを施したのち、その痕跡をなで消し、その上に格子叩きをまばらに施すもの。宮地廃寺・篠原遺跡I類と叩き板が類似するが、今のところ放射状の部分を確認しておらず、異原体の可能性が高い。

VI類（7） 縄叩きを施したのち、その一部をなで消すもの。

### 津波倉廃寺の平瓦（第53図）

I類（1） 斜格子叩きをまばらに施すもの。おそらく、縄叩きをなで消していると想定されるが、未確認。

II類（2・3） 縄叩きを施したのち、その痕跡をなで消し、さらに格子叩きをまばらに施すもの。格子文が宮地廃寺・篠原遺跡I類、弓波廃寺V類に類似するが、津波倉廃寺II類は刻線が直線ではなく、やや弓なりにそっていることから、異原体と思われる。

III類（4） II類と同じだが、2次叩きの原体が異なる。

IV類（6～8） 彫りの浅い斜格子叩きをややまばらに施すもの。弓波廃寺IV類と同一原体である可能性が高い。

V類（9） 縄叩きのあと、未調整のもの。

VI類（5） I～IV型式とは異なる斜格子叩きをややまばらに施すもの。

### 二子塚遺跡群の平瓦（第51図）

津波倉廃寺東方の二子塚地区からも瓦がごく少量出土している。出土量から判断して瓦葺建物の存在は想定しえず、津波倉廃寺、もしくはその周辺から何らかの理由で持ち込まれたと推定される。

I類（1） 繩叩きを施した後、その痕跡をなで消し、さらに斜格子叩きをまばらに、かつ等間隔に施すもの。

II類（3・4） 格子叩きをまばらに施すもの。

III類（2） 津波倉廃寺IV類と酷似。

津波倉廃寺との関係が考慮されるにもかかわらず、今のところ、I・II類は津波倉廃寺では確認していない。それは、津波倉廃寺の調査が遅れており、瓦もごくわずかしか採集されていないことも要因としてあげられる。津波倉廃寺北方の津波倉遺跡では、津波倉廃寺I類が出土している。

### 保賀廃寺の平瓦（第54図）

I類（1～4） 凸面を横なのであと、格子叩きをまばらに、等間隔に施すもの。横なので以前の調整は不明。確認しうるものは、すべて焼成が甘い。

II類（5～8） 繩叩きを施したのち、その痕跡をなで消し、さらに斜格子叩きをやや密に施すもの。

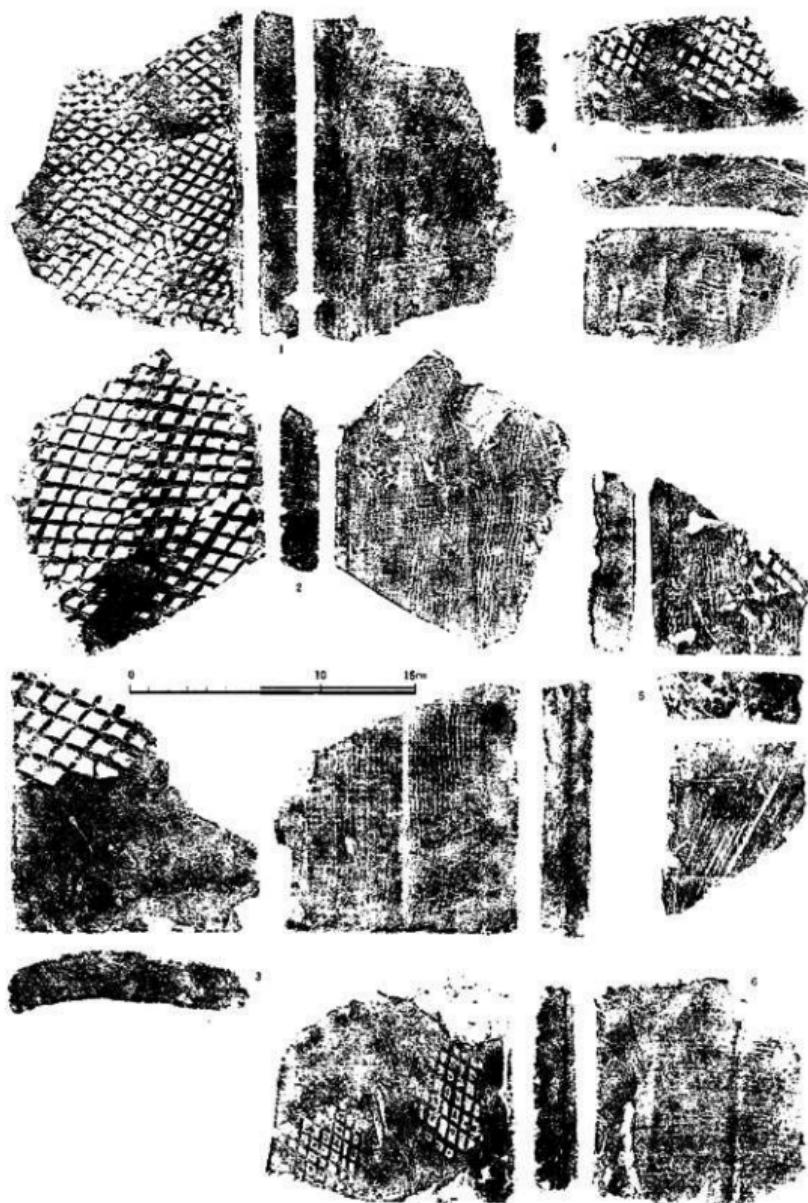
III類（9） 彫りの浅い斜格子叩きをややまばらに施すもの。丹波廃寺IV類、津波倉廃寺IV類と同一原体である可能性が高い。

### 黒瀬窯の平瓦（第55図）

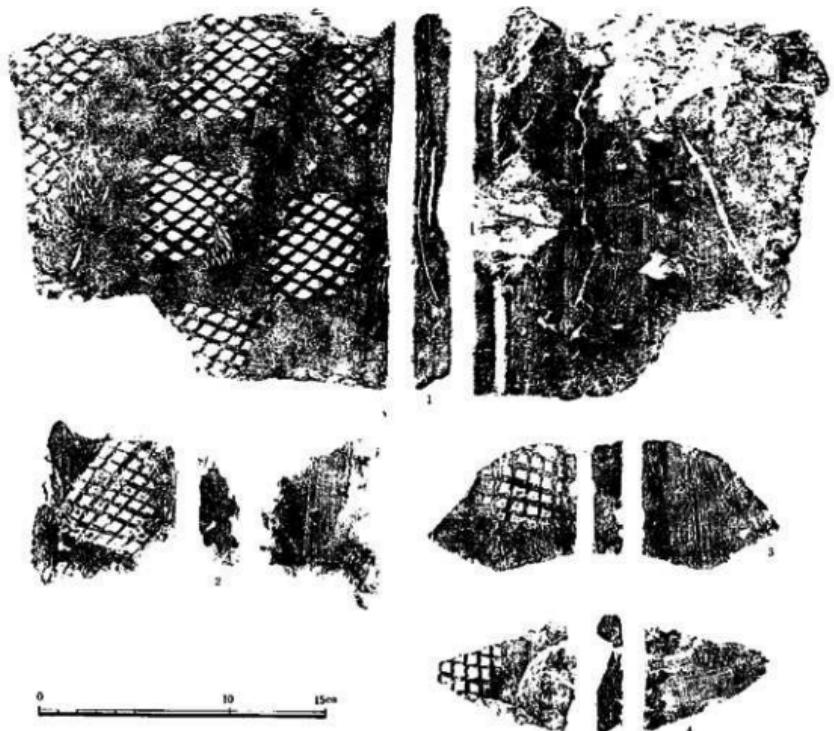
I類（1） 保賀廃寺I類と同じ。原体も同一。すべて焼成が甘く、ほとんどが橙色を呈する。1・2号窯双方から出土する。

II類（2） 凸面を横なのであと、斜格子叩きをやや密に施すもの。凹面布目は極めて細かいため、叩きしめが弱いためか、布目圧痕は不明瞭である。保賀廃寺II型式と斜格子文が類似するが、黒瀬窯II型式のはうが叩き板の摩耗が著しいのにかかわらず、保賀廃寺II型式に認められた傷が認められず、異原体である。1号窯から出土する。

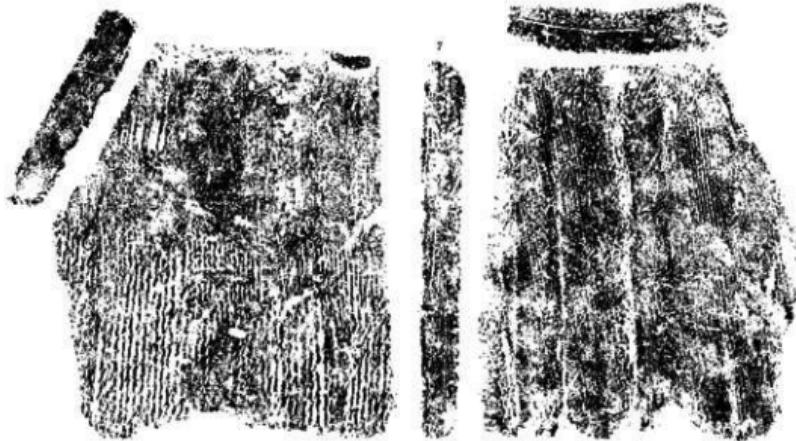
III型式（3） 彫りが深い2種類の叩き板を併用して、凸面をすき間なく密に叩きしめるものの、叩きしめの円弧を描く。2つの叩き板は任意に重複するのではなく、図示した資料のように明瞭に左右に分かれる。



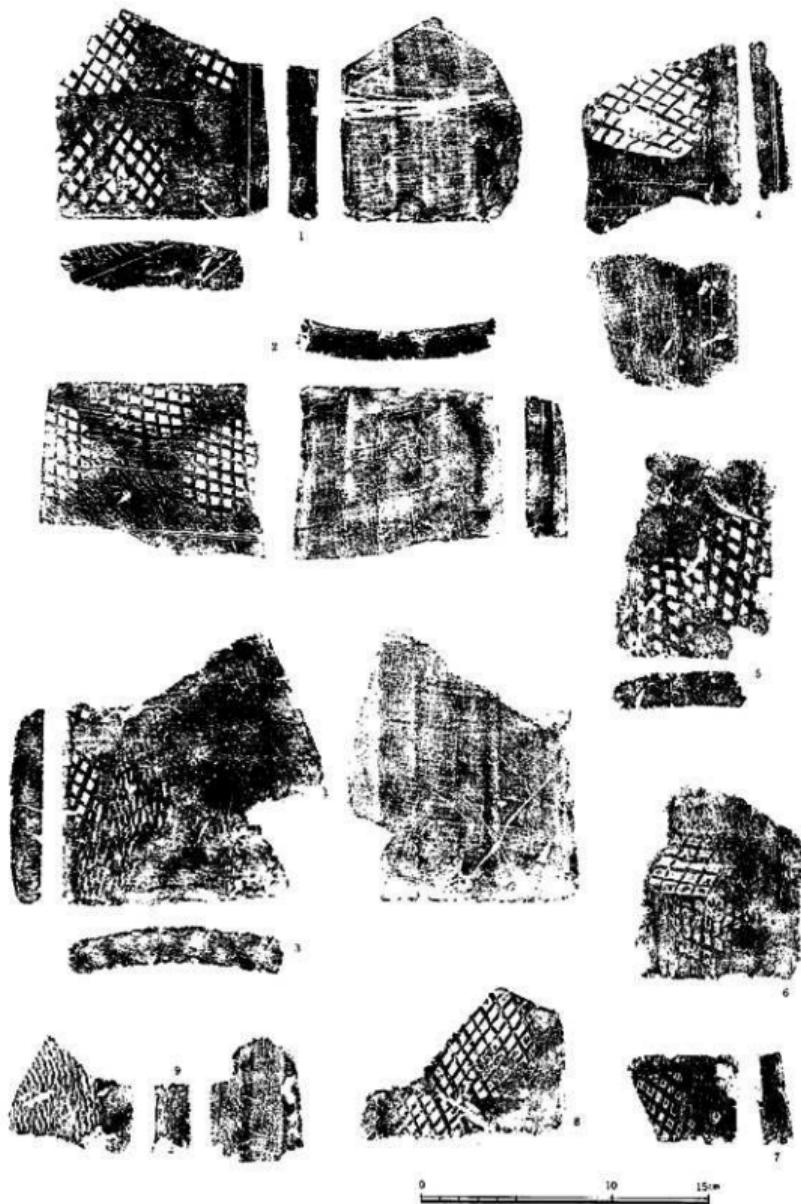
第50圖 弓波庵寺出土平瓦(1)



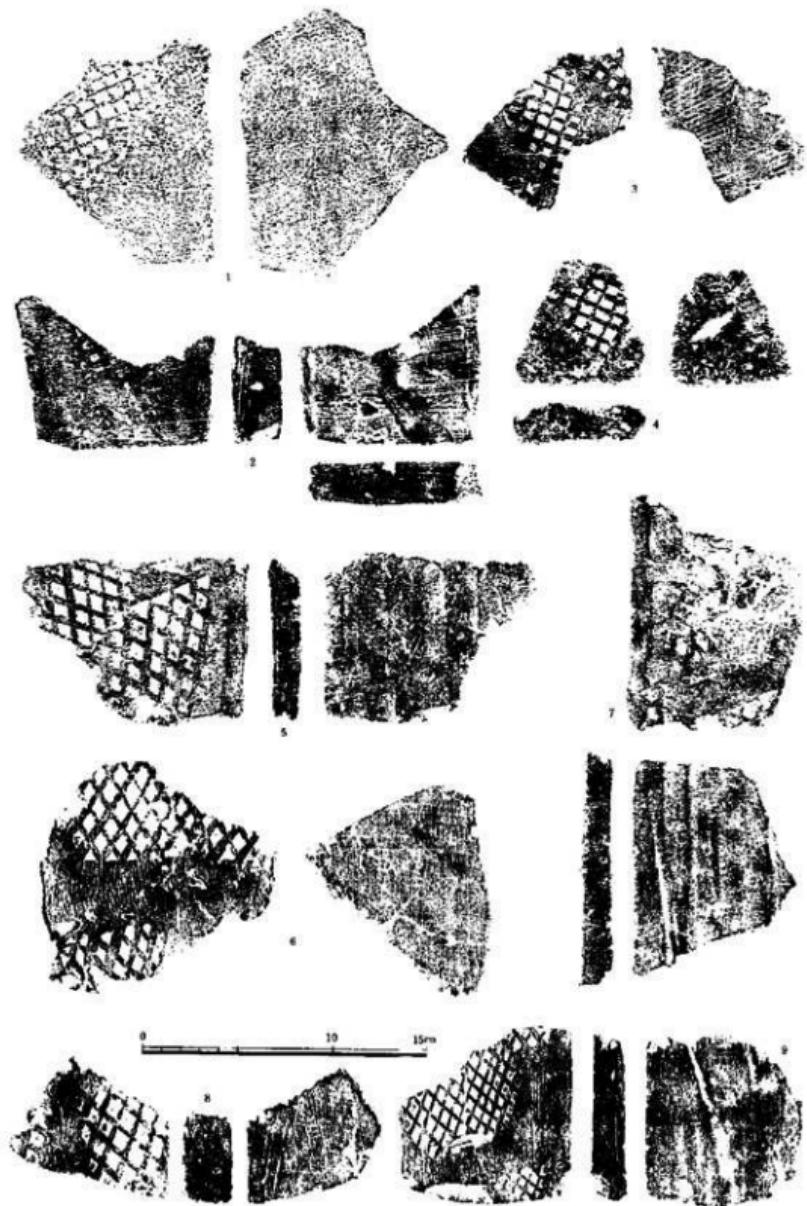
第51図 二子塚遺跡群出土平瓦



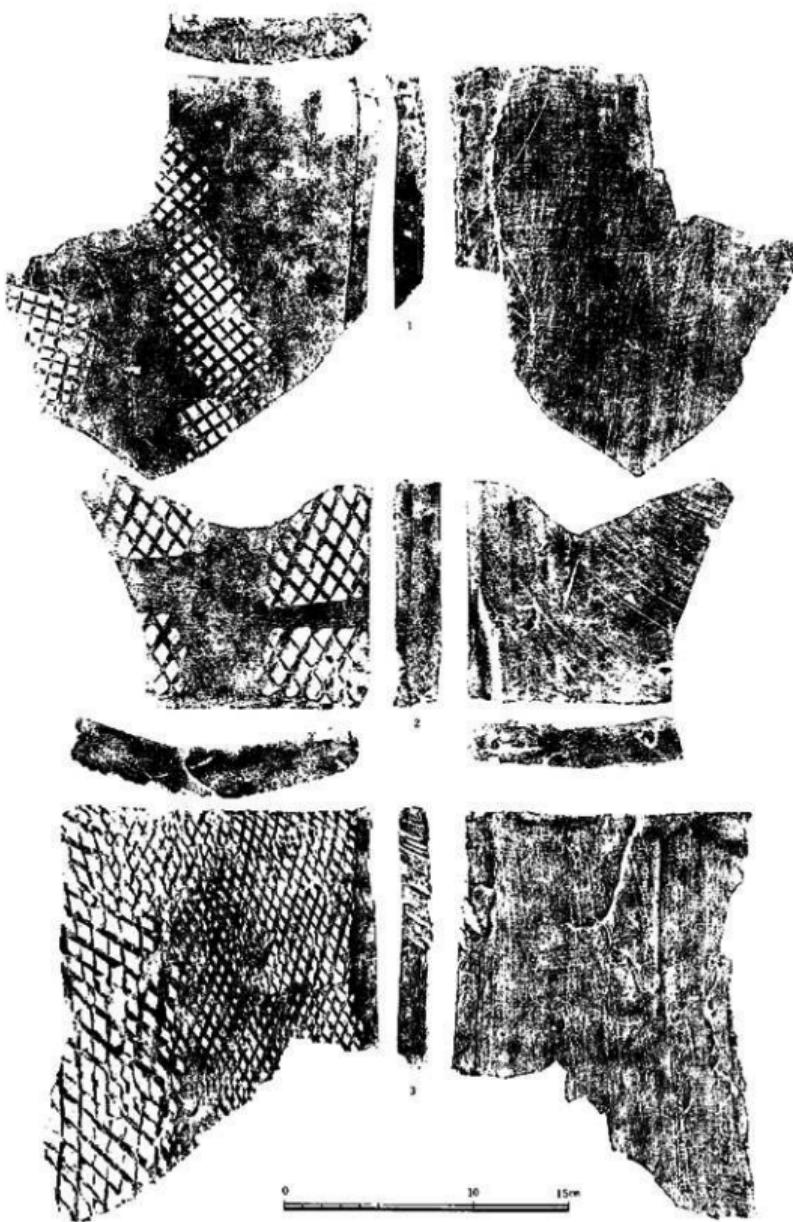
第52図 馬淵寺出土平瓦(2)



第53图 津波村庵寺采集平瓦



第54図 保賀庵寺採集平瓦

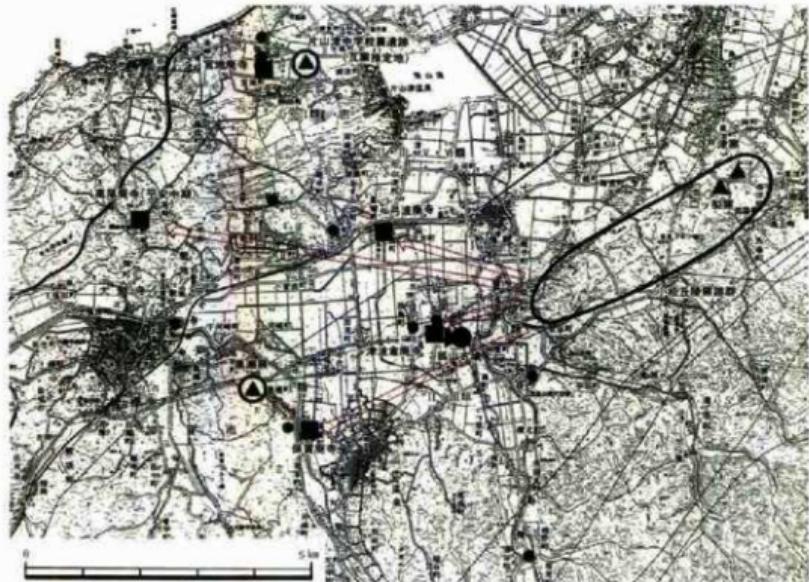


第55图 黑湖窑出土平瓦

江沼における平瓦の生産と流通 以上のような叩き板原体同定を重視した考古学的分類と螢光X線分析によって、平瓦の需給関係がかなり明確化しつつある。それをまとめると第56図のようになる。産地は確認されている黒瀬窯の他、未確認ではあるが小松丘陵窯跡群（「南加賀古窯跡群」）<sup>(注12)</sup>と片山津中学校裏遺跡が想定される。小松丘陵窯跡群は6世紀～10世紀にかけての加賀・能登最大の須恵器窯跡群であり、平安中期の瓦陶兼業窯である戸津窯、二ッ型窯も確認されているが、今のところ白鳳時代の瓦焼成窯は未発見である。おそらく今後発見されるだろう。片山津中学校裏遺跡は立地的に瓦窯と推定されているが、周囲の橋立丘陵には今のところ須恵器窯なども確認されていない。もしこれが窯だとすれば、宮地廃寺の専属瓦屋である可能性が高いだろう。ただし、橋立丘陵の窯の製品の螢光X線分析は行なっておらず、その存在を確認すること自体が今後の課題であり、かなり不確定な要素を含んだ推定である。

3つの産地（必ずしも同一窯・同一支群であるとは限らない）の製品は、それぞれ特色のある供給体制をとっている。黒瀬窯の消費地は、今のところ、ごく一部が保賀廃寺で認められるにすぎ、他の3つの廃寺でも認められない。黒瀬窯が保賀廃寺の専属瓦屋であるという推定は、保賀廃寺の調査がほとんど進んでいないため、今後の検討課題と言えるだろう。少なくとも、保賀廃寺は、黒瀬窯と小松丘陵窯跡群の双方から供給を受けていることは確実である。

津波倉廃寺は保賀廃寺とは異なり、小松丘陵窯跡群だけから供給を受けている。



第56図 江沼における平瓦の生産と流通(黒丸は瓦出土地および伝承地)

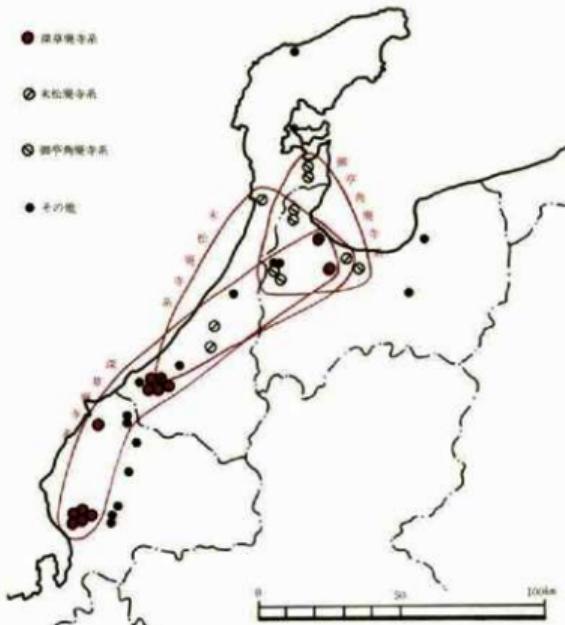
弓波庵寺は、保賀庵寺と同じように、2つの産地から供給を受けていたと思われるが、小松丘陵窯跡群のものは、津波倉庵寺IV類、保賀庵寺III類と同じものだけで、その大部分が隣接した橋立丘陵の未知の窯跡から供給されたと推定される。

宮地庵寺は、片山津中学校裏遺跡などの橋立丘陵の窯からのみ供給を受けたと推定される。

なお、橋立丘陵上の窯の存在が否定された場合、蛍光X線分析によればそれらはすべて小松丘陵窯跡群の製品と判断されることになる。その場合、保賀庵寺以外は、すべて小松丘陵窯跡群にだけ瓦屋をもうけていることになる。

しかし、白鳳時代には複数の産地が存在していたことは確実である。それに比べ、平安中期には戸津窯周辺の小松丘陵窯跡群に集約され、しかも、その供給地は北加賀まで広がっている。<sup>(註14)</sup>白鳳時院では不可能ながらも専属瓦屋をもとうとする努力が認められるのに対して、平安中期になるとそのような努力が全く認められなくなっている。

平瓦の技術系譜 宮地庵寺・保原遺跡I類、弓波庵寺V類、津波倉庵寺II・III類、保賀庵寺II類の平瓦は、繩叩き（1次叩き）→なで消し→格子叩き（2次叩き）という工程をへて製作さ



第57図 平瓦の系譜

れている。津波倉廃寺 I・VI類も同様であった可能性が高い。前述したように、2次叩きはまばらな叩きであるため、「叩き締め」の効果を果たしていない。このようなまばらな格子叩きを施す平瓦には黒瀬窯 I類があるが、1次叩きの痕跡をほとんどとめておらず、叩き締めがそのまばらな叩きのみであった可能性もある。<sup>(註15)</sup>

このようなまばらな格子叩きの平瓦を北陸全体で検討してみると、明らかに越前南部と江沼に集中していることがわかる。また、越中の御亭角廃寺とその瓦屋である小杉丸山窯でも、やや格子叩きが密になる傾向がうかがえるが、類似した平瓦が認められる。これらの平瓦の最古のものは、おそらく越前南部の深草廃寺と想定されるため、これらを深草寺系平瓦と呼びたい。この深草廃寺系の中にも1次叩きの不明な越前南部、繩叩きの痕跡を残す江沼、叩きしめが密になりつづる越中西部という3つの地域色が認められる。

このような平瓦に対し、末松廃寺では細かい斜格子叩きですき間なく密に、しかも叩きしめの円弧を描きながら叩きしめる平瓦が認められ、それが弓波廃寺（I・II類）や、越中・白石遺跡にも認められる。また、末松廃寺丸瓦III類に類似した丸瓦が能登・柳田シャコテ廃寺にも認められ、これも同類とみなした。これらの瓦のうち、末松廃寺がもっとも古いため、これらを末松廃寺系と呼びたい。なお、弓波廃寺では平瓦だけでなく、軒丸瓦も末松廃寺系のものが認められる。

御亭角廃寺のうち、古い平瓦は深草廃寺系の強い影響が認められるが、その後、格子文が徐々に巨大化し、ゆがみも目立つようになる。そのような巨大化し、ゆがんだ平瓦は越中西部の各遺跡や、能登・国分廃寺に認められる。これらの叩きは、深草廃寺系ほどまばらではないものの、末松廃寺系ほどきちょう面に叩きしめることをせず、叩き方も不規則でルーズなイメージを与えるを特徴とする。こうした平瓦を、御亭角廃寺系平瓦と呼びたい。御亭角廃寺系は、深草廃寺系から分派し、越中の変容をとげたものと理解できる。

越後の平瓦は以上のような理解ではとらえにくいか、横滝山廃寺は御亭角廃寺系に近い。

以上のように、北陸には3つの系譜の平瓦が認められる。これ以外の系譜のものも明らかにいくつか存在するが、この3つのような広がりは認められないだろう。

では、なぜこのような3つの系譜が重なりながら存在するのだろうか。地域色と理解するだけでは、御亭角廃寺の意味が十分に把握できない。こうした現象は、造寺技術を受け入れ、地域的なまとまりを形成する過程を示していると考えられるだろう。深草廃寺が北陸でもっとも古く創建され、御亭角廃寺がそれよりやや遅れて建立されることは、軒丸瓦が同一文様系譜でやや退化している点から指摘されている。平瓦製作技術もそれと同時にたらされたのだろう。しかし、それは創建期の古い時期だけであり、その後、越中の変容をとげる。深草廃寺系平瓦は、深草廃寺周辺に定着し、江沼地域まで影響を与えるが、御亭角廃寺とは同時かそれよりやや遅れて創建された異なる技術系譜の末松廃寺のため、それ以上の北進をはばまれる。弓波廃寺では、両者の技術が併存する。深草廃寺系平瓦は、当初は越中にまで影響を与えながら、その後、各地で造瓦が定着してゆく中で江沼以南に影響力を減少させたのではないだろうか。

以上はかなり大胆な仮説ではあるが、北陸各地の白鳳寺院の平瓦に時間差をもった地域色が認

められることは明らかである。また、これ以外にも点々といいくつかの異なる技術が存在し、3つの技術系譜だけで北陸の造瓦は明らかにしえない。今後に残された課題は極めて大きいが、瓦当の文様系譜とは異なる新たな視覚的系譜論の試みと理解していただければ幸いである。

宮地庵寺・藤原遺跡の平瓦 上記のような位置づけによれば、江沼地域のまばらな格子叩きの平瓦は深草庵寺系と言える。しかし、繩叩きの痕跡を残すものは越前南部には認められず、江沼的な特徴と言えよう。その点では、黒瀬窯Ⅰ類だけは深草庵寺式に忠実であると言える。

宮地庵寺・藤原遺跡の平瓦は、Ⅰ類の格子叩きの文様に放射状にみだれた部分があること、Ⅱ類のように格子叩きを省略するものがあること、Ⅲ類のような繩叩き未調整のものがあることなど、江沼の他の庵寺に比べ新しい要素が多い。宮地庵寺の建立は他の3つの庵寺より遅かった可能性が高い。

### (3)まとめにかけて

以上のように、宮地庵寺・藤原遺跡出土瓦は、軒丸瓦から見ても平瓦から見ても、江沼の白鳳寺院の中では新しい様相を示している。他の庵寺と同一型式の平瓦が認められないことから、単独の専用瓦屋をもっていた可能性の高いことも他の庵寺と異なっており、後出的であることを示す可能性がある。

軒丸瓦の文様系譜、丸瓦との接合技術、平瓦の製作技術は、江沼臣の本宗家の氏寺と考えられ、孤山古墳と近接する津波倉庵寺と一概することは、宮地庵寺の位置づけを考える上で重要であろう。ただし、平瓦の製作技術は軒丸瓦の文様系譜が異なる保賀庵寺・弓波庵寺にも一概するものがある。このような文様と技術の系譜の錯綜は、江沼地域に4つの白鳳寺院が密集することについて、一つの解答を与えてくれる可能性があろう。

宮地庵寺・藤原遺跡の瓦の系譜を明らかにしようとしたが、整理不足の現状をさらけだすだけでも、十分に論を展開できなかった。いずれ稿を改め、再度検討したい。

なお、最後になったが、平瓦の製作技術による地域的な系譜を探求する作業は、花塚信雄氏の須恵器甕製作技術系譜の検討（未発表）に刺激を受けたものである。記して感謝の意を表したい。

### 註

- (1) 上原真人「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号、1984。P15。
- (2) 稲垣晋也「飛鳥白鳳時代の古瓦」「飛鳥白鳳時代の古瓦」奈良国立博物館、1970。
- (3) ただし、写真による判定であり、実物をつきあわせた上での結論ではない。改刻があったとすれば、同庵の可能性がないわけではない。第37図1は石川県立埋蔵文化財センター保管、2は小松市博物館保管、3は加賀市教育委員会保管。
- (4) 菅見による限り、富山県・小杉丸山1号窯（丸瓦）、石川県・末松庵寺・湯屋窯などで確認される。  
上野章也「小杉流通業務園地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会、1984。  
瀧上秀明・木立雅朗編「辰口町湯屋古窯跡」辰口町教育委員会、1985。
- (5) 加賀市教育委員会蔵。
- (6) 近江文化史シリーズ第4回展「奈良時代の文化」滋賀県教育委員会他、1974。  
78'秋季特別展「近江の瓦」滋賀県立近江風土記の丘資料館、1978。

- (7) 北村圭弘氏の御教示による。至近距離の下八木で退化した軒丸瓦が出土している。
- (8) 註(2)と同じ。
- (9) 裏面に布目は認められず、保賀庵寺では丸瓦の剥落した瓦当があることから、一本作りとは考えにくい。ただし、註(2)で稻垣氏が想定しているような「嵌め込み式法」であるか否かは検討していない。また、稻垣氏の定義が全國的に普遍化できるとも考えていない。あくまで「のようなもの」である。
- ⑩ シンポジウム「北陸の古代寺院とその源流を探る」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦一』桂書房、1987。P 75~77。
- ⑪ 註(2)と同じ。P 346の67番。
- ⑫ 三辻利一「北陸地方の古代瓦の転写分析」、久保智康・木立雅朗・望月耕司・西井龍儀「考古学的に見た分析結果」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦一』桂書房、1987。
- ⑬ 小森秀三「片山津中学校裏遺跡」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦一』桂書房、1987。
- ⑭ 金沢市觀音寺遺跡。註⑫論文。ただし、この壙の瓦は出土量が少なく、縦瓦葺であったとは考えにくい。
- ⑮ ごくわずかに、まばらな格子叩きと同一原体と思われる叩きをなで消して、再び格子叩きをまばらに施したものがある。しかし、塊叩きの痕跡は今のところ一切確認していない。
- ⑯ 西井龍儀氏の御好意により実見。木松庵寺平瓦Ⅱ類に類似する。ただし、採集した方がすでに死亡しており、出所を十分に検討できない。西井龍儀「上牧野遺跡・中曾根遺跡・白石遺跡」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦』桂書房、1987。
- ⑰ 註⑯と同じ。P 72~74。

補足：満願寺出土瓦について

脱稿後、北村圭弘氏の案内で滋賀県東浅井郡びわ町弓削、「満願寺」出土瓦を実見することができた。発掘調査が行われていないため、実見した資料は少なかったが、若干補足しておきたい。なお、実見した資料は来現寺所蔵品、びわ中学校所蔵品、及び北村氏と木立が現地で表探しした資料である。

満願寺の軒丸瓦は今のところ津波倉庵寺式しか確認されておらず、これが創建期のものと考えられる（軒平瓦には奈良・平安時代の唐草文軒平瓦がある）。津波倉庵寺のそれに比べ、立体感が失なわれ、平板な印象が強い。文様構成は忠実だが、やや退化しており、全体的に津波倉庵寺よりも明らかに後出的であると思われる。本文では津波倉庵寺と満願寺の軒丸瓦の差はわずかであると述べたが、それほど小さなものではない可能性がある。宮地庵寺の軒丸瓦よりは多少古いとしても、よく似た時期である可能性もあるだろう（もちろん、津波倉庵寺式軒丸瓦は7世紀後半～8世紀前半の短期間に限られるのだが）。満願寺では、5重弧文軒平瓦が津波倉庵寺式軒丸瓦に伴なうと思定される。その凸面は蝶形状の叩き目文を施しており、同様の叩きの平瓦も目立つ。津波倉庵寺・宮地庵寺で出土する平瓦に類似するものは今回確認できなかった。今のところ、満願寺と津波倉庵寺・宮地庵寺との共通点は軒丸瓦に限られ、軒平瓦や平瓦には認められない。

満願寺出土瓦については、後日、北村氏が報告する予定である。

## 第4章 篠原遺跡の土器組成とその特徴

### 第1節 器種分類

篠原遺跡の土器組成は、極めて豊富な内容をもつ。時期は、前後するものを若干含むが、2様式II<sub>2</sub>期を主体としており、良好な一括資料が多い。2様式II<sub>2</sub>期は土器の組成の豊富な遺跡と、貧弱な遺跡との格差がもっとも顕在化する時期といえ、そのありかたは、消費遺跡のみでなく、生産遺跡でもみられる。篠原遺跡は前者の数少ない好例といえる。

ここでは2様式II<sub>2</sub>期の篠原遺跡の組成のあり方を客観化する意味で器種分類を試みたが、保留部分の多い結果に終わった。今後とも補正したい。分類の方法では、各器種の機能・用途を優先すべきか、形態上の系譜・推移を優先すべきか検討したが、後者を優先しつつ分類してみた。そのことで弊害も少なくないと思われるが、一方では、各器種の系譜の理解と、地城相および器種の消長が相対的に容易に表現出来るのではないかと考えている。なお、特徴、量比等の記述は、特に断わらない限り、2様式II<sub>2</sub>期の当該遺跡のあり方に触れたものである。

#### 1) 須恵器

##### 供膳器

杯　杯は径高指数により3分類（A・B・C類）、高台の無（a類）有（b類）により2分類、口径の法量によりI類・II類・III類の3分類出来る。この内、当遺跡で一般的にみられる器種は、AaII類、AbII類、BbI類、BbIII類の4器種で、その他、AbI類、AbIII類、CbIII類がみられるが、その頻度は例外的である。Ba類、Ca類は確認できていない。

A類 径高指数25前後の一群で、もっとも浅い杯部をもつ。Aa・Abがみられる。共に当該期を特徴づける器種で、出土量は多い。特にAa類はa類杯のはば絶てを占めている。

Aa類 出土量は多い。法量では若干のバラツキを見せるが、口径13.5cm前後、器高3.5cm前後のII類で占められる。I・III類に相当するものは希である。1器種1法量よりなる器種といえる。底部はナデによる粗い2次調整を加える程度で、ロクロケズリ施す例は確認できていない。B類に比べて粗製品が多い。

Ab類 出土量は多い。法量では口径18.0cm前後、器高4.0cm前後のI類と、口径15.0cm前後、器高3.5cm前後のII類および、口径10.0cm前後、器高2.5cm前後cmのIII類がみられる。Ab類ではII類がほぼすべてを占める。III類は少なく、I類の頻度は例外的で、少なくとも組成としては定着していない。共に器種として分類することは保留しておきたい。底部は粗いナデによる2次調整を加える程度のものが一般的で、ロクロケズリ施す例が少量みられる。

B類 径高指数35前後の一群で、相対的に深い杯部をもつ。口縁部は丸く納める。Ab類の出土量は多いが、Aa類の確認例はない。Aa類は管見の範囲では、他の遺跡でも確認していない。

Bb類 出土量は多い。法量では口径18.0cm前後、器高6.0cm前後のI類と、口径12.0cm前後、器高4.5cm前後のIII類がみられるが、II類の明瞭な確認例はない。少なくとも、一定量がみられるI・III類とは区別でき、器種として定着していないようである。当類には外底部をロクロケズリするものが相対的に多い。なお、本類には口径9.0cm前後、器高4.0cm前後の小型品がみられ

る。ここでは法量の整理が充分でないので細分しなかったが、IV類として分類できる可能性をもつ。

C類 径高指数 40 以上の一群である。当遺跡ではCb類若干がみられたが主要な組成とはなっていない。少量であるが、当該期には a・b 類両者が見られる。

S類 深い体部をもつ、小型の杯。形態的にはバラツキをもつが、通常、口径 9.0 cm 前後、器高 7.0 cm 前後を測り、それを大きく超える大型品はない。底部はロクロケズリ。調整は丁寧で、胎土は精選されたものが多い。

皿皿は主に口唇部形態により 5 分類 (A・B・C・D・E 類)、高台の有無により 2 分類、さらに法量により 4 細分出来る。法量については、資料が少なく傾向を把握するに留まるが、口径 17 cm 前後のもの、口径 20 cm 前後のもの、口径 22 cm 前後のもの、および口径 28 cm のものとに細別できるようである。ここでは、便宜的に前者より、III類、II類、I類、特大と整理しておく。

A類 通常外反して伸びる口縁部をもち、口唇部を丸く納める一群。当該地域では次の B 類とともに、一般的にみられる型式である。Aa・Ab 類がみられる。法量では、皿にみられる総ての法量のものが確認できる。

Aa 類 法量では I 類と II 類を確認している。外底部をロクロケズリするものが目立つ。皿の内では出土頻度は高くない。

Ab 類 Aa 類同様、法量では I・II・III 類がみられる。外底部をロクロケズリするものが目立つ。皿の内では出土頻度は高くない。

B 類 直立した短い口縁部をもつ。例外なく外底部をロクロケズリしている。a・b 類があるが、当遺跡では b 類は確認できていない。法量では口径の小さい III 類に集中する傾向をもつ。

D 類 内湾気味の口縁部をもち、口唇部を内屈させる。外底部は例外なくロクロケズリする。本類は a 類のみで、b 類は確認できていない。当該地域では当遺跡例が唯一のものであるが、当遺跡での出土例は多い。平城京（奈良国立文化財研究所 1981）での土器器皿 A との関連を窺わせる。法量では I・II・III 類が確認できた。皿の内での出土頻度は高い。

E 類 外傾した口縁部をもち、口唇部はヨコナデにより外傾した面を持つ。b 類は確認できない。D 類同様、当該地域では当遺跡例が唯一のものである。出土例は多くないが、一定量みられる。法量では II・III 類が確認できた。

X 類 将来的に細分できる可能性のあるもので、類例の少ないものを包括した。1 は口唇部外面に沈線をもつ、金属器写しに類似した手法をもつもの、3 は 7 世紀以来の皿の系譜をひくもの、2 は 3 に近いものである。

金属器写しのタイプ 金属器写しのタイプの杯、碗の出上例は少ない。ここでは分類を保留する。

## 鉢

A 類 内湾して立つ深い口縁部をもつ。尖り底ないしは丸底を伴う。当遺跡での確認例は少な

い。平城京での鉢Aに相当する。出土例は少ない。

F類 斜め上方にひらく体部と、円盤状の底部をもつ。片口を伴うものもある。平城京での鉢Fに相当する。出土例は多い。

G類 口縁部突帯を巡らせるもので、底部の形態は明らかでないが、A類同様の円盤状の底部をもつと推定される。出土例は少なくない。

#### 盤

A類 平底の底部に、ほぼ直立する体部をもつ。通常把手をもつ。平城京での盤Aに相当する。出土例は多い。

B類 A類に比較して深い体部を持つもので、1点確認している。一对の把手をもつ。

#### 高杯

A類 倒蓋タイプの杯部をもつもの。高杯ではもっとも出土例が多い。

B類 7世紀以来の皿形の杯部をもつもの。

#### 貯蔵器

壺 当該期の壺は、多様なものがみられる。7世紀以来の壺が形態的に定型化（器種分化）する時期に当たっている点を基調に、在来型の型式に加え、平城京での型式に酷似したもののがわっていることの反映と理解できよう。在来型式の発展では理解できない壺A・G・H・I類は調整が特に丁寧で、胎土も他の型式に比較して精選されている。搬入品を含む可能性もある。

A類 肩の張った球形の体部をもつ短頸の壺。法量で細分できる。天井部が平坦で直角に折れ曲がる比較的長い口縁部をもった蓋を伴う。平城京での壺Aに該当する。第58図に示した大型品は精製品。

B類 全体の形態はA類に近いが、肩が相対的に角張り、体部下半が直線的なものを包括した。壺E類、壺D類に類似したものも含んでおり、形態的に未分化な一群ともいえる。将来的には細分すべき型式といえよう。

D類 B類に類似するが、体部が長く、形態的に定型化したもの。直口壺（吉岡1983）に該当する。

E類 壺G類ないしは壺A類の体部に、直立して伸びる短頸の口縁部をもつ。

G類 内湾気味に開く体部が肩で鋭く屈曲し、外傾気味の短い口縁部をもつ。2点確認しているが、精製品で、胎土も他の型式と異なる。平城京での壺Eに該当する。

H類 肩で鋭く屈曲した長脚の体部をもつ。法量で細分できる。肩衝壺（吉岡1983）に該当し、平城京での壺Bに当たる。第58-2図に示したものは精製品である。

I類 体部はG類に類似するが、口縁部は外半して長く伸びる。平城京での壺IIに該当する。

J類 I類と壺A類の折衷型式かと推定される。出土例の多い器種であるが、当遺跡での出土例は少ない。

K類 無頸の壺を包括した。

O類 口縁部の形態は明らかでない。不定型な平底をもち、底・側部にケズリ調整を加えている。定型化した器種とは考えられない。

瓶類 瓶類も壺と同様のあり方を示す。瓶C類は精製品である。

A類 いわゆる長頸瓶。出土量は多い。北陸で盛行した器種の一つといえる。

B類 脚のないA類ともいえるが、在来型のA類から派生した器種とはとらえられない。精製品で、胎土も他の型式と異なる。平城京での壺Kに該当する。出土例は1点である。

C類 東海地方にみられる「フ拉斯コ」型の体部をもつ。北陸での出土例は多いとは言えないが、類例は散見できる。当遺跡では1点。

F類 いわゆる水瓶。当遺跡では頸部の破片1点からみられた。

G類 注口をもち、3本の脚をもつ。全形は明らかでないが、一般的に見られる器種とはいえない。

H類 いわゆる双耳瓶。当遺跡の資料は、肩部の破片のみで全形が明らかでなく、保留部分を残す。

・ 平瓶

横瓶

甕 甕については煮炊具と貯蔵器とに大別して分類した。

(煮炊具)

A類 土師器甕A類と同様の形態、技法をもつ。当該遺跡では1技法（土師器系技法）によるII類甕がみられる（完形）。須恵器A類甕の集落遺跡からの出土例は希で、機能的にも煮炊具とは理解できない。

(貯蔵器)

A類 明瞭な確認例は無い。次のB類との対比では、外反して伸びる比較的長い口縁部をもち、口縁部端面が外側する点で区別できる。

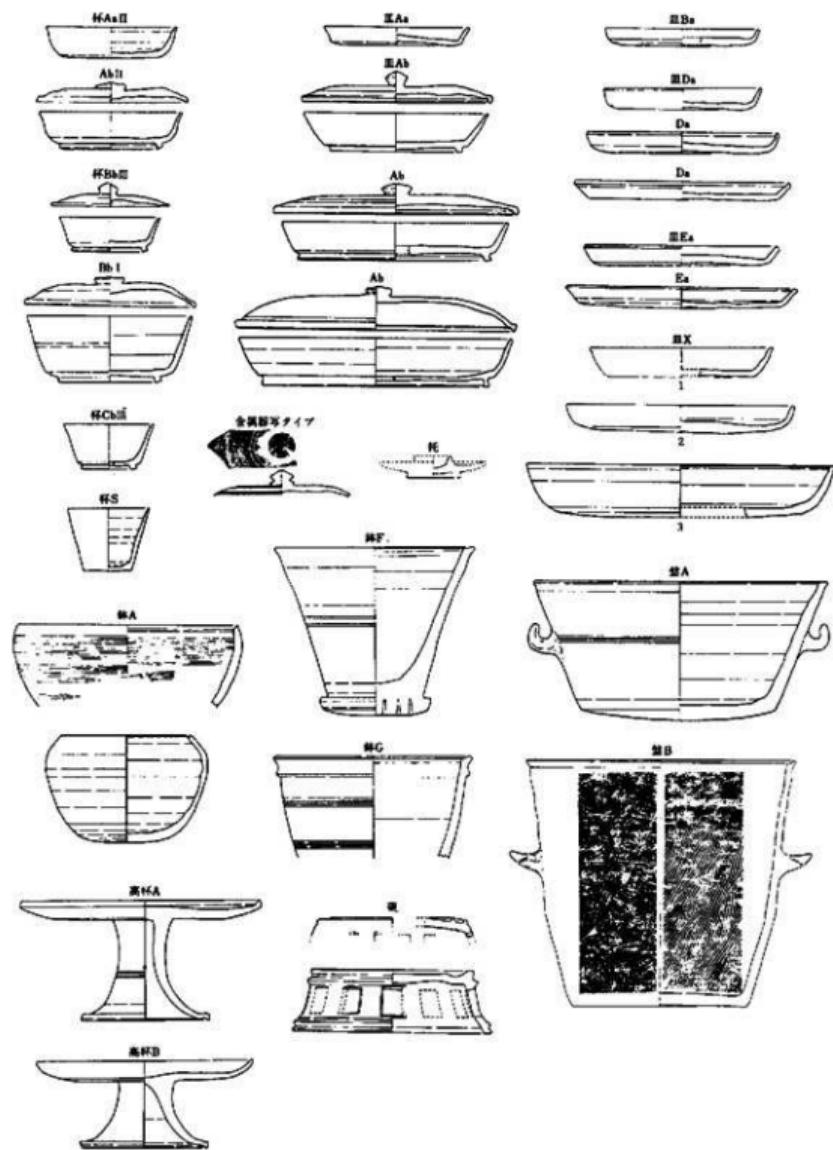
B類 肩の張った体部に、外半した比較的短い口縁部をもつ。口唇部は端面が水平ないしは内傾気味につくられる。出土量は多い。

C類 外反して伸びる比較的長い口縁部をもち、通常口縁部外面に突帯をもち、口唇部を丸く納める。特定できる資料はない。

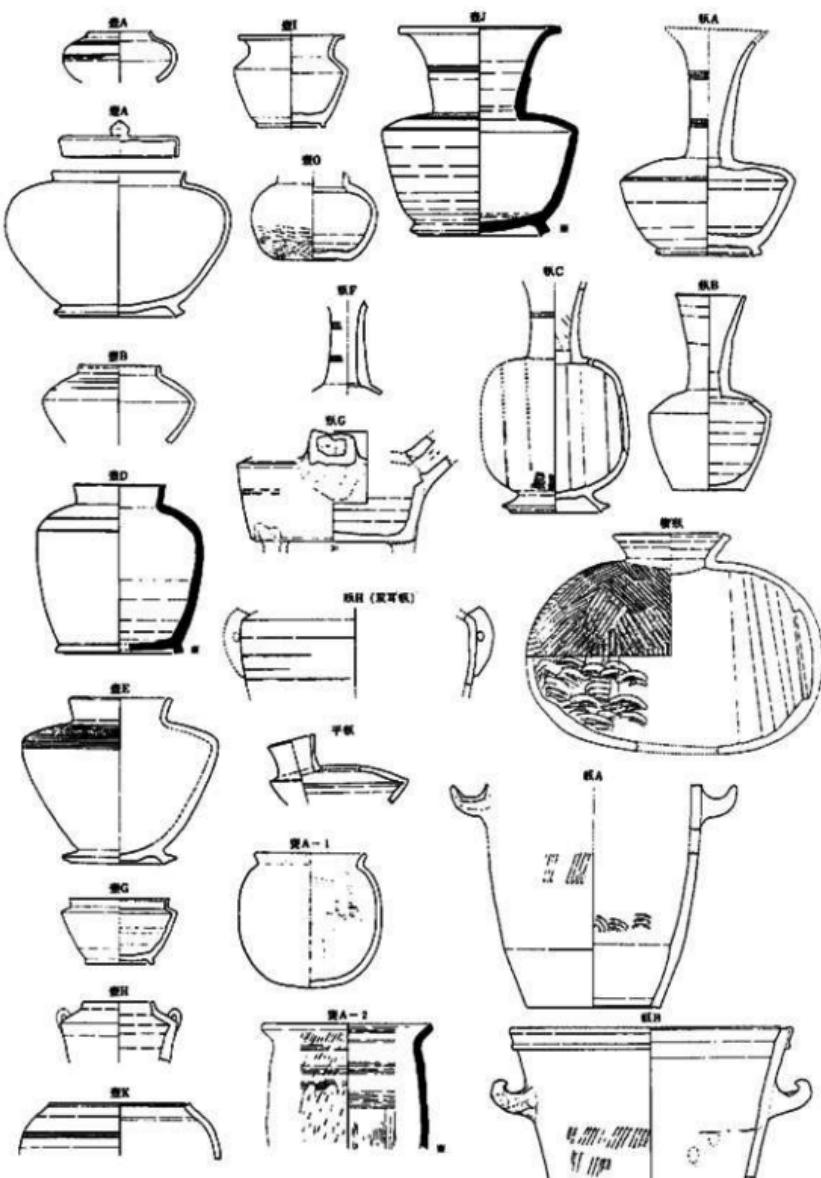
D類 肩の張った仕部をもち、直立したい短い口縁部をもつ、口縁部中程に沈線を巡らせることが多い。本類も特定できる資料はない。

E類 外傾気味の短い口縁部をもつ。平城京での甕Cに類似した形態をもつと推定されるが、全形は明らかでない。底部は丸底である可能性が高い。本類も特定できる資料はない。

F類 いわゆる把手付き甕。口縁部の形態では土師器甕の2技法（須恵器系技法）によるものに近いもの（1・2）と、甕B・C類に対応するもの（3）とがみられ、成形、調整でも2技法を駆使したもの（1・2）と、甕B類と同一のもの（3）とがある。分類は今後に委ねたい。

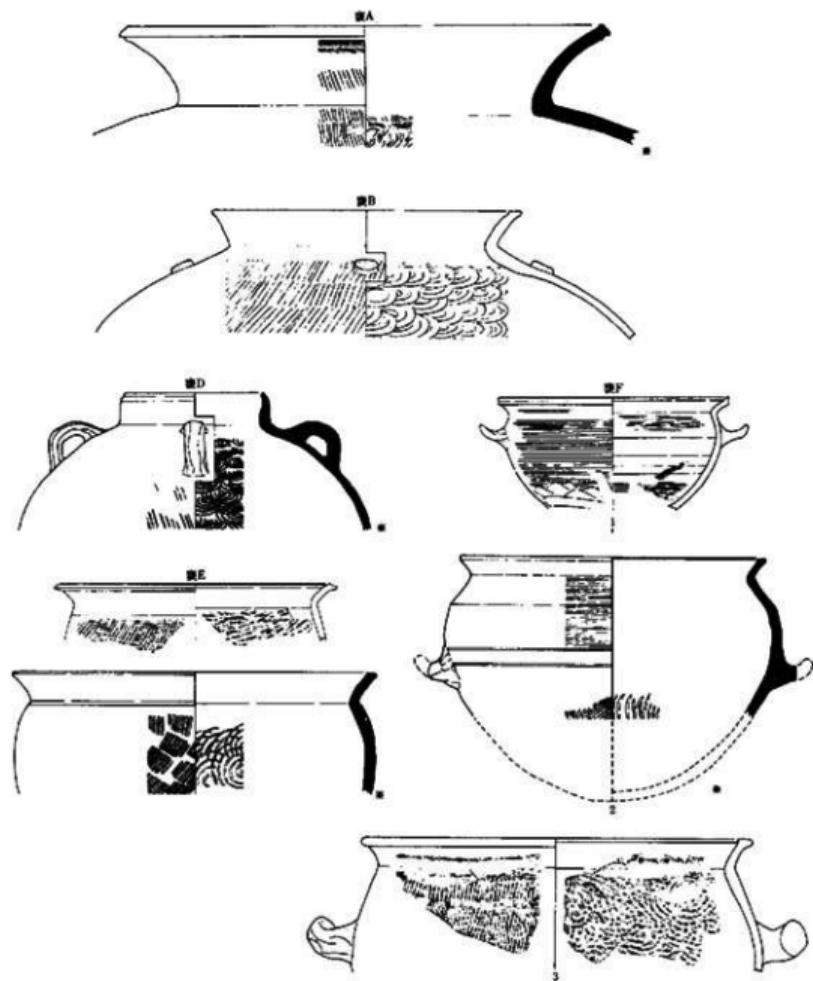


第58-1圖 雜種分類(頸惠器)

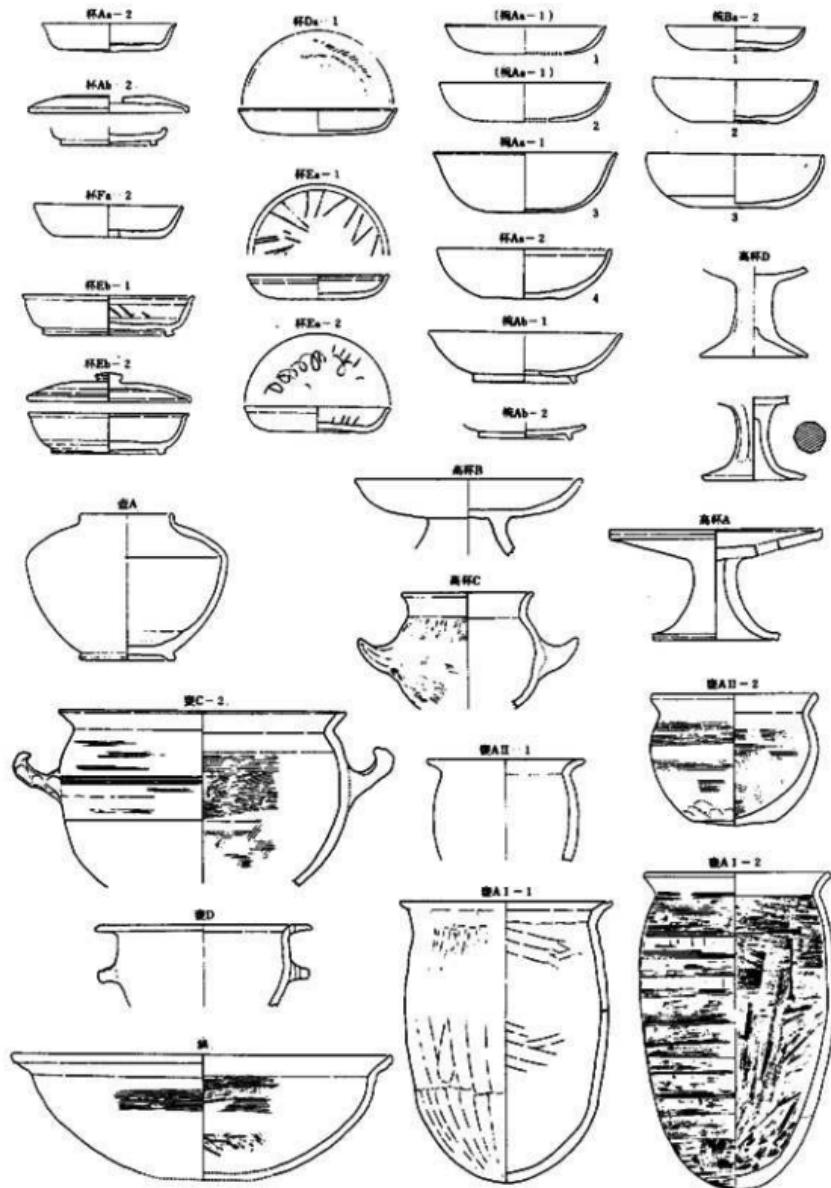


第58—2圖 器種分類(烟燭器)

(東印は富山県小杉流通業務団地内遺跡群の資料を引用した)



第58・3図 器種分類(須恵器)



第58-4図 菩提分類(上器)

## 概

A類 古墳時代以来の伝統的形態をもつ。1技法、2技法の両者があると推定されるが、当遺跡では2技法のものが確認されている。

B類 鉢G類同様、口縁部に突帯をもつもの。A類とは異なり2技法によるものに限られる可能性が高い。

### 2) 土師器

供膳器 ここでは、杯、椀、高杯について分類したが、その他小片ながら皿も確認できる。杯、椀の数量整理は出来ていないが、須恵器と対比した供膳器に占める頻度は、通常の集落遺跡と比較して極めて高いといえる。当遺跡の組成を特徴づける器種である。

杯 須恵器写しのタイプ（A・B類）と、畿内（平城京）の土師器杯を模倣したもの（D・E類）および、その折衷的なもの（F類）がみられる。なお、杯および次ぎに報告する椀については、詳細な検討が出来ていない。ここに触れられなかった器種が新たに含まれる可能性が高く、また、さらに型式細分出来る可能性も多い。付言しておきたい。

A（B）類 須恵器写しのタイプで、1は杯Aa類、2はA(B)b類を模したものです。形態のみではなく、技法も須恵器系技法（2技法）によっている。通常、内外面とも赤彩する。

D類 口唇部をわずかにつまみ上げる特徴をもつ。1は1技法によるもので、平城京での土師器杯Aに酷似する。その他、1技法によるb類も破片であるが認められ、2技法のものも少なくないようである。通常暗文を施し、赤彩する。

E類 口唇部を外方に引き出すもので、平城京での土師器杯Cに該当するものかと推定される。1・2技法のものがみられ、2技法のものが多い。赤彩し、ほぼ例外なく暗文を施す。出土例は多い。

F類 平底の底部をもち、直線的に外方に開く口縁部をもつ。口唇部を丸く納める点でD・E類と区別できる。2技法のもののみ確認している。赤彩するが暗文を施す頻度は低いようである。

椀 底部を丸く作るもの（A類）と、平底に作るもの（B類）に大別してみたが、体部の形態差あるいは、口唇部の形態差による分類も可能であろう。技法的には1・2類がみられ、1類は少ない。通常赤彩し、暗文を施すものも少なくない。

A類 底部を丸く作るもので、体部の深さにより1と、2と、3・4に3細分することも可能である。技法的にはもっとも深いタイプの3・4で、1・2技法のものを確認しているが、統ての深さのものに両者が併存していると推定している。3は口唇部をわずかにつまみ上げており、4は口唇部を丸く肥厚させている。土師器杯D・E類同様の細分が可能となろう。

B類 底部を平底に作るもの。A類同様体部の深さにより1、2、3に3細分することも可能である。技法的には1技法は確認できず、すべて2技法のものとなる。

高杯 4タイプに大別できる。4タイプとも出土量は多くない。

A類 須恵器高杯A類と同形態のもの。

- B類 須恵器高杯B類と同形態のもの。赤彩を施している。
- C類 脚部を角柱状に仕上げたもの。杯部の形態は明らかでないが、平城京での高杯Aとの関連の強い型式である。赤彩を施している。
- D類 古墳時代以来の型式。楕円形の杯部をもち、通常、杯部内面を黒色処理する。高杯の内では出土頻度は高い。

### 壺

- A類 須恵器壺A類と同形態のもの。赤彩を施している。出土例は1点である。
- 壺A 成形技法により2タイプ(1技法・2技法)に大別でき、それぞれ法量により2分類(I・II類)できる。出土量は多いが、通常の集落遺跡との比較では出土頻度は低いようである。なお、2技法には定型化した北陸型煮沸セットとして、岸本が技法的に整理したもの(岸本1982)以外の未分化なものも含めた。

A-1 伝統的な技法によるもの。法量により2細分できる。出土量は多いが、A-2類との頻度ではやや少ないようである。

A-2 いわゆる「北陸型煮沸セット」を構成する須恵器系技法による壺。法量により2細分できる。当遺跡では、糸切りによる小型平底壺は一般化していない。1様式4期のあり方を反映していると言えよう。出土量は多い。

### 甌

- C類 須恵器甌F類と同形態のもの。須恵器甌同様、技法により1・2手法のものに大別できる。
- D類 形態はA類に類似するが、口縁部と把手に孔を穿ったものをB類とした。

### 鍋

- 2技法による例が確認できる。
- 甌 良好的な具体的な資料はない。通常、形態的には須恵器分類でのA、B、2タイプがみられ、Aタイプでは1・2手法、Bタイプでは1手法のものがある。

## 第2節 出土土器の観察

### 1 観察表について

「番号」 出土番号を記入。土器番号は各図毎に付け、図番号は図の変わり目に斜線枠の左側に記入した。

「出土地点」 出土遺構名・取り上げ番号(遺構平面図対照)を記入。複数の遺構の接合資料は主となるものを当欄に、他は備考欄に記入した。

「器種」 「第1節 器種分類」に従い記入。土師器は「土師器」としてその旨を明記したが、須恵器については特に記していない。土師器の中で両面赤彩のものは特に「赤土師」と記入した。

「法量」 [口] …口径、[高] …器高、[胴] …胴部最大径、[底] …底径、[台] ……高台径、[脚] …脚台径、[孔] …孔径

「胎土」 須恵器・土師器食膳具（赤彩土師器）・土師器煮炊具をそれぞれ各群に分けて観察した。但し、判別しかねるものは可能性のある群を併記した（例えば[AB]で、これは前者Aにより近いことを示す）。特徴は以下のとおりである。

#### \*須恵器

A群……素地にS(0.5mm以下)で角～亜角の砂粒を2(並)～5(特に多い)含む。砂粒の混和はない。堅く焼きしまるものは一般に、器表面に砂粒が現れザラついた印象を与える。ただ、ロクロナデ等で砂粒が沈み、焼きがあまい場合や光沢のある自然釉を帯びる場合には異なった印象を与えることがある。砂粒の粒径・組成、黒色粒の吹き出し具合等にバラエティーがある。確実に細別が可能で複数の生産地（窯群）を包括しているが、現段階での内眼観察の限界を鑑みそれは保留した。生産地としては、南加賀古窯跡群をはじめ能美古窯跡群（北群）が考えられる。福井県北東部のものも含まれる可能性はある。

B群……胎土に含まれるS砂粒の量は1(非常に少ない)で、素地は密、しっとりとした質感がある。断面縞状になるものが多い。器種にやや偏りがある。生産地としては、A群生産地（杯S・壺A・壺H・鉢Aなど特殊な器種の精製品）、ないしは能美古窯跡群（中群…辰口町南部）が考えられる。

X群……上記2群とは明らかに異質なもので、素地は非常に緻密、スリガラスの質感がある。濃い青灰色を呈する精良品である。杯Bb III(第13図29)、壺G(第15図14・第25図5)の3点である。器種・形態からもA・B群以外の地域の産である可能性が高い。

#### \*土師器食膳具類

A群……砂粒Sの量は1(非常に少ない)以下。色調はA・Bが主体。

B群……素地に角～亜角で均質なS砂を4(多い)～5(非常に多い)含む。色調はBが主体でCも多い。なお、本群の中に含まれるが、まれに角～亜角のM砂を1～2含むものがある(C群)。

X群……第26図5(杯Da-1)の1点のみである。砂粒はほとんど含まない。SSで板状、無色透明に光るもの(火山ガラス)を5含む。色調はBである。

#### \*土師器煮炊具

A群……素地には亜角～亜円の均質なSS砂(須恵器A群や赤彩土師器B群の素地の砂粒よりは明らかに細かい)を5含む。混和砂粒はない(SS砂は混和されたものの可能性もある)。やや風化した白色の海綿の骨片を1含む。色調はAが多い。

B群……A群の素地に円～亜角のL(2mm以上)～M砂を2～4含む。赤色系の砂粒を多く含むものをB<sub>2</sub>とした。色調はB<sub>1</sub>がB、B<sub>2</sub>がDが主体である。

C群……素地に含まれる砂粒Sは1程度とみられ、やや粉っぽい。円～亜角のL～M砂を3～4含む(混和)。色調は白色系のものが主体である。

D群……素地に亜角～角で均質なM～S砂を4～5含む。混和したとみられる砂粒はない。色調はAが主体である。なお、B群に分類したものの中で、素地がA群ではなく本群のものも含ま

れている可能性がある。本来は厳密に区別すべき性格のもので、新たに一群を設定すべき(E群)であったが観察不足であった。

「色調」 胎土と同様に須恵器・土師器食膳具・土師器煮炊具に分けて観察した。須恵器については、焼成状態を加味したもので複数の色調のみられるものは各々を列記した。

\* 須恵器

A群……青灰色～淡青灰色。焼きは並～ややあまい。

B群……灰色。焼きは並～堅。光沢のある自然釉を帯びることがある。

C群……暗青灰色～黒灰色。焼きは並～堅。光沢のある自然釉を帯びることがある。

D群……灰白色。焼きはあまい。

E群……茶灰色～赤褐色。焼きはあまい～堅(酸化)。

\* 土師器食膳具類

A群……赤褐色系。断面は内部まで同色。橙褐色のものもある。

B群……橙褐色系。断面は内部が白色。

C群……白色系。

\* 土師器煮炊具類

A群……淡橙褐色。

B群……淡黄褐色～淡橙白色。

C群……白色系。

D群……橙褐色。

「遺存」 図示した部分の何分の一が遺存するかという観点で記入した。二段に列記したもの〔1/2、完〕は、例えば高杯では杯部が1/2で脚部が完形であることを示す。破損品の中でも、口縁部の一部が欠けたにすぎないなど、本来の用途に耐え得るとみられるものは〔略完〕した。1/5以下は〔小片〕とした。

「備考」 成形・調整の特徴、そのほか補足事項を記入した。須恵器食膳具の調整ではロクロケズリなどに注目したが降釉等で観察不能の場合でもその旨は特に記してはいない。赤彩土師器食膳具の暗文についても同様である(摩耗により観察不能が多い。図示していないものでも確認したものは記入した)。

本観察表の作成は主に田嶋と北野が行った。

(註) 奥田尚氏の教示による。

## 2. 箕原遺跡出土土器の胎土

本遺跡の胎土の観察を通して気付いた点について二・三触れておきたい。

a. 須恵器

肉眼観察での胎土の識別は、近年県内でも自然科学的な方法と共に急速に進歩している（吉岡 1983、木立 1986）。県内の 5 窯跡群（南加賀、能美、末、押水・高松、鳥屋）については、それぞれ特徴的なものはかなり識別可能となってきた。ただそれはあくまでも「特徴的なもの」に限られており、判別不能のものが多いことは言うまでもない。逆に限定することはかえって間違いを犯すことにつながる。本遺跡の須恵器の観察についても例外ではなく、当初多くの群別を考えたが、現状での観察能力が、焼成状態や一つの窯でのバラエティーを越えられないと判断したため大ざっぱな分類に終っている。

須恵器で圧倒的に多いのは A 群である。A 群は南加賀古窯跡群を主体に考えたもので、最も至近に位置する窯跡群である（河川や湖沼を介すればかなり近い）。僅かに B 群の一部が能美窯跡群産の可能性があるが、いずれにしても「江沼」郡内であり、近距離の供給が普遍的であったとみられる。また、A 群内においても細別可能で、いくつかの窯支群から多元的に供給を受けたことも事実であろう（形態のバラエティーからも伺える）。X 群の 3 点は県内ではみられないもので遠隔地の可能性がある。なお現在の所、当窯跡群では I<sub>2</sub> 期（吉岡 1983）で本遺跡のような「律令的」な土器組成を持つ窯跡は発見されていない。

#### b. 土師器食膳具類

B 群は、南加賀古窯跡群産の須恵器の胎土（の一部）に類似している。須恵器窯に近接して発見される 8 世紀前半代の小形平窯が土師器窯（特に小形の食膳具類を中心とした窯）とみられることからすれば、B 群は当窯跡群産の可能性が最も高い。杯 Aa・Ab、杯 Ea・Eb、碗 Aa、碗 Ba、高杯 A・B・C、壺などがある。

A 群は精製品が多く暗文手法を用いるものが多い。杯 E、杯 F、碗 A がある。ここで本群に包括したものの中には B 群の精製品（水鏡）とみられるものと別の生産地を想定しうるものがある。前者は色調 B・C のもの（A-B、A-C と表す）で、少ないながら（1 以下）B 群に近い砂粒を含んでいる。一方、色調 A のものは微細な白色粒を多く含むなど A-B などとは違った質感を持つ。A-A は今の所、非クロロ成形・調整の杯 H でしか確認されていない。

#### c. 土師器煮炊具類

A 群の砂粒の細かさは、南加賀古窯跡群では確認できない。量は少ないが海綿の骨片を含む点でも別の産地を考えたい（同窯跡内では確認例がない）。S S 砂自体が砂丘砂で海綿の骨片がそれに含まれたものの可能性もある。遺跡の近隣でありうる胎土である。

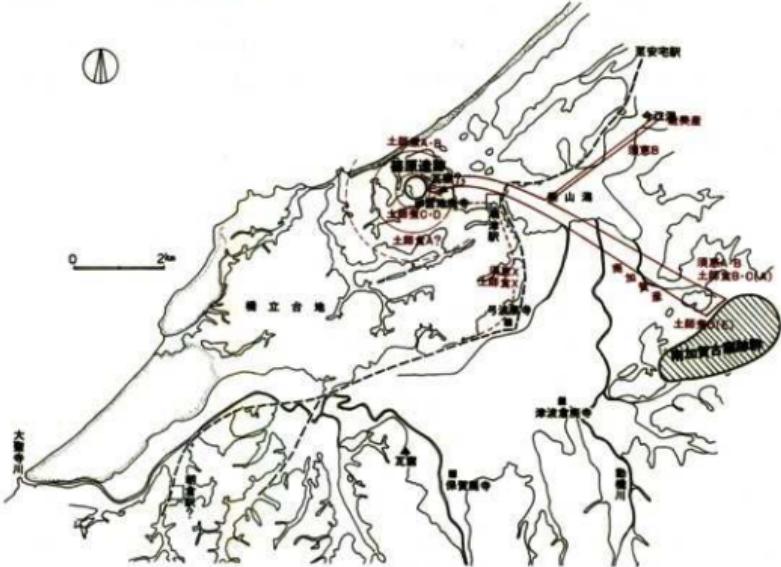
B 群は A 群に近い窯地に丸みを帯びた砂粒を 3~4 混和するが、砂粒の粒形からは、窯跡群地域よりは遺跡の近傍で河川の軽砂を用いて作られたものの可能性が強い。A 群に近い地域であろう。C 群も同様に遺跡の近傍産と推定される。

D 群は須恵器 A 群や土師器食膳具類 B・C 類に対比されるもので窯跡群産とみられた。

以上の観察結果を踏まえて、胎土からみた 8 世紀前半代の羅原遺跡における土器の供給圏を想定してみた（第 59 図）。

須恵器はほぼ一元的に南加賀古窯跡群（いくつかの支群）から供給を受け、中には「律令的」な土器組成を持つ窯も含まれる。能美産や産地不明品のあり方は極めて限られたもので主体的に供給がなされたものではないとみられる。土師器食膳具類についても、同窯跡群からのものが主体とみられるが、別の生産地のものも一定量含まれる可能性がある。土師器煮炊具類はそれらとは別に、遺跡近傍で供給されたものと考えられる。窯跡群産のものは僅かに含まれるのみである。

先に、土師器煮炊具のうち、ロクロ成形の製品の大部分が須恵器生産地の近傍で生産され、それが定型化・普遍化した時点で旧来の土器生産体制（供給圏）は解体・消滅したのではないかと考えたが（北野 1986）、今回の検討から、少なくとも 8 世紀前半代でそのようなことはなく、むしろ厳然と在地で独自の供給圏を保持していることを確認した。同後半代での検討は今後の課題であるが、おそらくは何等かの形でそれを引き継いで行くものと推察している。



第59図 脱土からみた桜原遺跡の土器供給圏

### 第3節 古代土器の編年軸設定

古代の土器については吉岡氏により、3段階6期11小期（奈良・平安時代）に細分する構想（吉岡1983）が示されている。吉岡編年は重厚かつ詳細なもので、個々の理解や評価は完璧とさえいえる。ここにあえて筆者の理解を提示する由縁は、吉岡編年が7世紀を含めていないこともある。

が、基本的には吉岡編年の、3段階の編年構想に疑問をもったからに他ならない。<sup>(註1)</sup>

古代 吉岡編年（吉岡 1983）を軸に、5様式 9期 17小期に細分した。古代の開始は、法皇山III期（田嶋 1971）を当てた。須恵器・土師器での新たな器種の出現。須恵器窯の急増・拡充と、それを背景とした、須恵器=供膳・貯蔵形態、土師器=煮沸形態という土器の種類・機能による「北陸型」の用途区分（吉岡 1983）の始まりを指標とした。古代の終末は8・9世紀以来の器種・型式が極限まで単一化され、須恵器と土師器が土器の組成を相互に補かんしつつ展開してきた北陸での土器生産・体制（土器様式）が崩壊したと推定される5様式（吉岡編年VI期）までを当たる。

古代前半期 前半期は1様式から3様式までを当てた。暦年代では7世紀初頭から9世紀前半代までが該当すると考えている。前半期と後半期の境は、吉岡編年のIII<sub>1</sub>期とIII<sub>2</sub>の間にあて、前半期の内、吉岡編年I<sub>2</sub>期に含まれていた型式の一部は、3様式 I期（吉岡編年II期）に含める。<sup>(註2)</sup>

前半期の特色にはいくつかの要素を上げることができようが、基本的には北陸での上器組成が、須恵器=供膳・貯蔵形態、土師器=煮沸形態という土器の種類・機能による用途区分が明瞭にみられる段階であり、土器作りの技法が、須恵器系の技法に齊一化される過程としてとらえられる。それは、まさに北陸での古代土器組成・生産体制が確立する過程、完成する段階ともいえる。一方、前半期は、土器に反映される階層性が、須恵器と土師器（赤彩土師器）によってのみ具現された段階ともいえる。前半期における須恵器生産の隆盛と、多様な器種・型式の存在は、この点を通じて理解できるように思われる。<sup>(註3)</sup>

1様式は、古代への胎動期であるとともに、北陸での前半期上器群の方向を決める画期である。2小期に細分した。

須恵器は、新たな器種が出現するとともに、伝統的器種・型式の多くが当期のうちに衰退・消滅する。土師器では煮沸器に鍋が出現するとともに、長胴化を完成した甕の一群が成立する。供膳器には新たな器種・型式の成立を確認できない。伝統的器種の粗悪化の減少としてとられえらようか。1様式は先にも触れたとおり須恵器窯の急増・拡充期で、北陸の窯跡群では当該期から稼働するものがもっとも多い。そして、その反映として、少なくとも越前、加賀、能登、越中では須恵器=供膳・貯蔵形態、土師器=煮沸形態という土器の種類・機能による用途区分が確立する。<sup>(註4)</sup>なお、当該期での土師器が新たに供膳器を生み出すことなく、伝統的供膳器を減少する過程を辿った事は、北陸での前半期土器群の方向を決める大きな動きと言え、当該期を北陸での土器組成を決定した一つの起点とみた。

2様式は、須恵器では3様式以降に直接つながる組成が確立し、木立氏が律令官人的土器様式（木立 1986）とした、階層による上器組成の区別が定立するとともに、須恵器系技法による土器器が創出される段階といえる。2期4小期に細分してみた。

I期は、須恵器にII期以降一般化する器種・型式が成立し、須恵器と土師器の間の技術交流が具体的に開始される時期である。2小期に細分できる。<sup>(註5)</sup>

須恵器では、I<sub>1</sub>期に新たな器種・型式が出現する一方で、伝統的器種・型式が試され、I<sub>2</sub>期

第4表 碑年輪の策定案

時代	様式	時期	碑年案との対応	南 加 賀		北加賀地域の開墾遺跡
				消費遺跡	生産遺跡	
古 代	3	I	田嶋(1986) 12	(+)	漆町132号土坑、高座方形 周溝状遺構	(加南窓)(能美窓)
		III	13	宮 地	漆町157・97号土坑、水町 ガマノマガリ11・16土坑	
		I	14		漆町72号土坑	
	4	II	15		漆町18号溝、高堂3号土地	
		田嶋(1971)			二ツ梨マメオ カ山	善正寺高岳遺跡
	5	III	I		敷地天神山	
		II			二ツ梨10号	戸木C25号溝
	6	I <sub>1</sub>	III			
		I <sub>2</sub>	IV		千崎11号住	御坂カタシロ-5号
古 代 前 期	7	I <sub>1</sub>	V		漆町163号土坑	(黒川2号)
		I <sub>2</sub>	VI	吉岡(1983)	金比羅山6号 マルヤマ	
	8	II <sub>1</sub>			金比羅山10号	
		II <sub>2</sub>			金比羅山2号	
	9	I <sub>1</sub>			桃の木山1号 サクラマチ3号	
		I <sub>2</sub>			サクラマチ1号	上二口A-4号住 八野1号
	10	II <sub>1</sub>			福宮5号 和氣1号(古)	
		II <sub>2</sub>			和氣後白谷2号	若林3号
	11	III <sub>1</sub>			和氣中和氣	ヤキノ2号
		III <sub>2</sub>				元女西山
古 代 後 期	12	I				
		II <sub>1</sub>	田嶋(1986)	III <sub>2</sub>		
		II <sub>2</sub>	IV <sub>2</sub>	IV <sub>2</sub>		黒川2号
	13	IV <sub>1</sub>			戸津31号	吉澤利根木1号土坑
		IV <sub>2</sub>			戸津9号	安妻寺71号土坑
	14	V <sub>1</sub>		V <sub>1</sub>	戸津35号	安妻寺91号土坑
		V <sub>2</sub>			戸津48号	吉澤利根木B地区
	15	V <sub>1</sub>		V <sub>2</sub>		三浦上層
		VI <sub>1</sub>				安妻寺1安和1号土坑
	16	VI <sub>2</sub>		VI		
		VI <sub>2</sub>				
中 世	17	I	VII		漆町3号井戸	(白山町7号土坑)
		II <sub>1</sub>	VIII <sub>1</sub>		田尻シンペイダン01大溝	
		II <sub>2</sub>	VIII <sub>2</sub>		漆町100号土坑	
	18	I	IX		永町ガマノマガリ40号土坑	
		II <sub>1</sub>	X <sub>1</sub>		漆町7号井戸	
	19	II <sub>2</sub>	X <sub>2</sub>		佐々木A5号井戸	

注 古墳4様式の表記法保有

注 ゴチックは様式遺物(遺跡)

にはII期につながるほとんどの器種・型式が定着する。I<sub>1</sub>期の須恵器は、1様式の完成とともにそれらが、有台杯、かえりを持たない杯蓋、一定量の皿、鉢の出現、法量差をもつ蓋杯の出現、あるいは、蓋杯で確認できる手法の変化などは、2様式の起点として評価したい。また、平城京での楕C類似の無台杯が一定量みられるようになるのも当期以降の特徴である。伝統的器種では伝統的蓋杯が確実に消滅し、壺、提瓶、有蓋高杯、伝統型式の無蓋高杯など、伝統的器種が消滅しないしほり型式を著しく変形して衰退する。I<sub>2</sub>期は、I<sub>1</sub>期に成立した器種・型式が一般化する時期といえ、供膳器では規格性に乏しいが、II期の器種・型式の絶てが揃う。一方、壺・瓶類の組成は、II期に一般化する器種が確認できず貧弱である。また、金属器を模倣したと推定されるものが多くみられるのも当期の特徴であろう。

土師器は須恵器系技法の影響を受けた型式が出現する画期である。伝統型式の組成は1様式と変わらない様である。<sup>(註12)</sup>

須恵器との技法の接触はI<sub>1</sub>期に確実にみられ、I<sub>2</sub>期には「北陸型煮沸セット」の祖形が出現する。土師器の須恵器系技法への傾斜は、I<sub>2</sub>期に急速に進行したと推定される。I<sub>2</sub>期には「北陸型煮沸セット」の祖形を出現するとともに、伝統的技法による甕の一群にも、口縁部を強くヨコナデ調整した須恵器系技法との関連を窺わせるものが目立つようになる。煮炊具の須恵器系技法への傾斜は、一元的には変化していない。また、須恵器系技法への推移は、須恵器窯で定型化されたものが出現し、それが土師器に一般化する須恵器(生産者集団)先行型の変化と特定できない。具体的には、土師器にロクロ技法、叩き技法が取り入れられる一方で、須恵器窯では伝統的技法に準じた甕、鍋の焼成が開始される形で認められ、祖形は、須恵器(窯)、土師器の両者に確認できる。伝統的技法の土師器は、煮沸器の鍋、甕が主体となり、供膳器では一定量の高杯が見られるが、楕は著しく減少するようである。なお、当期には少量の赤彩土師器が出現している可能性(木立他 1985)がある。

II期は、木立氏が律令官人的土器様式(木立 1986)とした階層による土器組成の区別が定立するとともに、須恵器系技法による土師器が一層一般化する時期といえる。

須恵器は、II<sub>1</sub>期の供膳器はI<sub>2</sub>期のあり方を継承するが、壺、瓶などの器種はII<sub>2</sub>期につながるもののが新たに出現すると推察され、I<sub>2</sub>期とは区別できる様である。II<sub>2</sub>期には供膳器も含めて大きく変化する。供膳器では杯B<sub>a</sub>類が組成として定着し、法量で2器種に分化する。それに杯A<sub>a</sub>・A<sub>b</sub>類、有・無台の皿、倒蓋状の杯部をもった高杯が加わった食器の組み合わせが確立する。また、壺、瓶等の器種にも多様なものがみられ、須恵器による宮都類似の組成が成立する。しかし、このあり方は一般的とは言えず、消費遺跡、生産遺跡両者に組成の貧弱な一群が厳然と併存し、その例のほうがかえって一般的といえる。そして、後者には、次ぎに触れる上師器赤彩土器の種類、量も少ない。

土師器では、「北陸型煮沸セット」が技法的・形態的に確立するとともに、多様な形態の赤彩土器の出現に象徴される。一方、伝統的技法による土師器甕・鍋形土器は確実に併存し、伝統的技法による土師器が確認できるのは最後の段階とも言える。<sup>(註13)</sup>

「北陸型煮沸セット」はロクロナデ、(かき目調整)、叩き技法を技法の3要素(岸本1982)とするが、当該期にはまだ多様性がみられる。「北陸型煮沸セット」は、岸本氏が指摘したように須恵器窯でも一定量生産されているが、伝統的な土師器と同一の胎土よりも確実に認められ、在来型の生産による製品も少なくなかったと推定される。しかも、伝統的技法による土師器甕・鍋形土器も確実に併存し、II<sub>1</sub>期では伝統的技法による土師器甕・鍋のはうが多い。伝統的型式の土師器供器は少ないが、楕、高杯などがみられる。赤彩土師器はII<sub>2</sub>期には確実に一定量出現する。赤彩土師器の組成は充分明らかでないが、金属器からの直接的な模倣品、巖内型土師器の模倣品、須恵器の模倣品などからなる。器種では杯、楕、高杯等の供器形態のほか、壺、甕、瓶、鉢などの器種におよぶ。技法的にも須恵器系、土師器系の技法がみられ、胎土も煮沸器同様2者が併存するようである。赤彩土師器の出現は、先にみた須恵器の重層的なあり方をさらに明瞭にするものであったといえよう。階層による土器組成の区別は、赤彩土師器出現と、II<sub>2</sub>期の須恵器によって定立したといえよう。

当該期の土師器の生産には、須恵器生産と一体に生産された場合と、須恵器系技法を駆使しつつ在来型で生産した場合と、伝統的技法を踏襲した在来型の生産とが併存していたといえ、それそれが、在来型の生産単位を母胎として併存しているようでもある。少なくとも現状では、当該期に、土師器生産者が須恵器生産者に吸収されたとする、「北陸型煮沸セット」成立をめぐる評価<sup>(註19)</sup>、理解(岸本1982、吉岡1983、北野1986)は再検討の余地があると考えている。消費遺跡、生産遺跡での具体的な検討が当面の課題である。

2様式は、古墳時代以来の伝統的型式の払拭から始まり、その内に、「北陸型煮沸セット」に象徴される土師器技法の変化、赤彩土師器の出現、重層的で齊一的な組成の定立など多くの画期、要素を内包している。各要素は実際には波状的に変化、進行しているが、これらを一体的、有機的にどう把握するかが2様式理解の鍵といえる。また、2様式にみる、齊一的で多様な器種・型式を具有する須恵器と赤彩土師器は、現状でも加賀から越後までは同一の組成と型式をもって括がっている。「北陸型煮沸セット」と、須恵器の類似型式は、さらに北上し秋田県まで確認できる。当様式が宮都の様式と深く係わっていることと合いまって、その成立と展開が、律令国家の成立過程と密接に連動していること(吉岡1983)は明らかである。

3様式は2様式までの展開が集約される完成期としての側面と、4様式以降に続く新たな要素<sup>(註20)</sup>(後半期の起点)の成立期としての側面とを合わせ持つ様式である。古代前半期において、「北陸固有」の土器様式定立の時期が設定できるなら、当該期こそふさわしいと考える。そして当様式は、土師器・須恵器からなる土器(焼物)組成の完成期でもあり、両者がその主体である最後の段階ともいえる。

土師器は良好な集落遺跡の資料が少ないため、詳細には保留部分を残すが、甕・鍋形土器は「北陸型煮沸セット」として須恵器系技法を駆使したものにはば齊一化され、小型の甕もこの段階には、底部を糸切り調整した平底のものが一般的となるようである。伝統的型式はこの段階の内には消滅するようである。赤彩土師器の杯、楕等の供器形態のものも、技法的に須恵器系技法のも

のに齊一化されている可能性が高い。土師器は当様式の内に伝統的型式を取り扱い、技法的にも伝統的技法からロクロ技法を駆使した須恵器系のものに転換、齊一化されたと推定される。土師器が消失し、土師器系土器（白石 1984）が一般化する画期といえる。土師器から土師器系土器への変化は、2 様式以来の帰結ともいえるが、土師器が消滅する画期としての評価は重要である。土師器系土器は改めて述べるまでもなく、後半期には主体となる土器であり、それが主体である時期は、北陸では 12 世紀まで続く。

須恵器の変化も大きい。須恵器生産（量）がもっとも高揚した時期と推定され、土師器同様、前半期の展開が集約されるとともに新たな展開を始めた段階といえる。供膳器では 2 様式に器種分化した組成が、当該期以降の基本セットとして確立する。供膳器以外の器種では、伝統的器種、<sup>(II 23)</sup> 2 様式Ⅱ期に盛行した器種のいくつかが衰退、消滅する一方で、9 世紀につながる新たな器種が<sup>(II 24)</sup> 成立する。また、2 様式にみられた組成の 2 面性が解消されるとともに、2 様式Ⅱ期にみられた<sup>(II 25)</sup> 齊一的なあり方から、個々の窯跡群に器種、型式や技法・手法に独自性が現れるようになる。製作技法、焼成技法の改良もこの期の特徴である。また、窯跡群が当様式の成立を期に、窯場を移動し、盛行する例も多い。

古代後半期 後半期は 2 様式に分けた。暦年代では 9 世紀前半代から 11 世紀前半代までが該当すると考えている。<sup>(GE 31)</sup>

後半期は北陸の土器生産に大きな比重を占めた須恵器生産の衰退と、それを補かんするものとしての土師器供膳器の出現・盛行に象徴される。北陸での上器生産の主要な特徴の一つであった、須恵器＝供膳・貯蔵形態、土師器＝煮沸形態という土器の種類・機能による用途区分が崩れる段階である。その現象は土師器系土器と須恵器が「北陸型」でない、まさに汎日本的な機能別の分化に同調した段階として評価できるかもしれない。一方、後半期の展開は、須恵器生産の優勢な北陸南西部と、相対的に虚弱な東北部とでは様相が異なる。国単位ないしはそれよりも小さい単位で地域差をもって展開していると推定できる。前半期の展開が北陸および東北（日本海側）をも巻き込んで齊一的に展開したのとは大きく異なる。また、後半期は赤彩土器も減少し、それに反比例するかのように、極少量の磁器と、綠釉・灰釉が供給される段階もある。前半期にみられた主として須恵器と土師器でのみ土器の階層性を具現したあり方から、磁器と、綠釉・灰釉が加わり、須恵器と土師器系土器がその主流から傍系へと変質し、更に、その階層性は一般集落にも深く浸透し進行した段階といえるかもしれない。

4 様式は須恵器生産の絶対量が大きく減少し、土師器系土器供膳器が出現し、その量を急速に増加していく時期である。2 期 3 小期に細分できる。

須恵器生産は、中核的な窯跡群を除いて稼働を停止し、一方では窯跡群の拡散・分散化が進行する。生産の絶体量は大きく減少したと推定される。生産量の減少とあいまって、器種の淘汰・<sup>(II 33)</sup> 単一化が進み、残存した器種も、型式の簡素化と粗悪化がすむ。

土師器は黒色処理を施した椀、須恵器系の形態をもつ皿などの供膳器が出現し、当様式の内に瓷器系の椀・皿も確実に加わり、Ⅱ期には供膳器の内に大きな比重を占める。赤彩土器の杯、

椀等は漸減傾向を示し、当様式の内で消滅する。また、II期以降には一定量の土師器供膳器を伴出する須恵器(窯)が見られるようになるとともに、かっての須恵器窯の近傍に、土師器の生産遺跡かと推定される遺跡も散見されるようになる。須恵器優先から土師器系土器への傾斜が、生産遺跡にも具体的に現れたといえよう。そして、当該期から5様式にかけては群域よりさらに小さな単位で、土師器系土器供膳器に様相差がみられ、須恵器窯を持たない地域にも独自の型式の土師器系土器供膳器が確認できる。

5様式は須恵器生産衰退が決定的となる一方で、土師器系土器も調整の簡略化、型式の单一化が極限まですむ。須恵器と土師器が相互に補完しつつ展開してきた北陸での七器生産(体制)がこの様式をもって崩壊すると捉えられる。2期5小期に細分できる。

I期は、須恵器生産の優勢な南加賀地域でも、供膳器の須恵器から土師器系土器への置換現象が急速にすむ。須恵器供膳器に土師器系土器の型式や糸切り技法が取り入れられ、須恵器供膳器の型式と技法の規制にさえ弛緩がはじまる。そして、日期には、須恵器窯が確認できず、消費遺跡では須恵器供膳器が消失する。

土師器系土器供膳器はI期、II期では内面黒色処理、外面赤彩するものが目立つが、III期には急速に衰退する。赤彩土師器は確認出来ないが外面赤彩土師器がその機能を継承したものといえようか。II期には内面黒色処理、外面赤彩を施すものは確認できない。在來の器種も供膳器では有・無台の椀に限られ、一定量小皿が組成に加わる。調整の簡略化、型式の单一化が極限まですむといえる。

土師器と須恵器は本来の「器」に解消したといえよう。

註1 現実的契機は、吉岡編年の二段階(III・IV期)の指標と評価にたいする疑問から出発した。吉岡氏が指摘した二段階の指標は多岐にわたるが、その内容は、①三段階への過渡的側面をもつ段階。②「北陸固有の平安朝様式の定立の四期」となる段階の2点に要約できよう。そして、②の指標として「基本形態が崩れた短頸壺、第Ⅲ期まで殆ど見られない長頸壺と新種の長頸瓶、平安時代を通じ北陸の代表的器種として周知される双耳瓶が各窯の公約数的器種となる」点をあげている。しかし、これら4器種は、吉岡氏も指摘しているように先行期にみられ、当該期以降急速に進む器種の淘汰・单一化のなかで公約数的器種として残存、顕在化したとも評価できる。筆者は、平安期須恵器生産の独立性を過少に評価するつもりはないが、二段階は、その底流としてある、須恵器生産の衰退化、すなわち三段階への過渡的側面こそ強調すべきであると考える。また、二段階に、三段階への連続性(過渡的側面)を指摘しながらも、あえて二段階を設定した背景には、III期を二段階に包括したこと一因と推定している。「北陸固有」の土器様式定立の時期が設定できるなら、3様式(吉岡編年II期)こそふさわしいと考える。

註2 このあたり方は、地域を既定すれば6C前半にその萌芽がみられる。古代での日期はその普遍化と言える。

註3 III期に含められた窯式の一部を前半期(吉岡編年II期)に含めれば良いのか、III期そのものが前半期に位置づけられるのかは検討中である。なお加南窯での戸津5号窯式は窯式としては再検討の余地を残す。

註4 若狭3号窯、平塚3号窯、出土品など。

註5 古代の土師器と須恵器を捉える視点には、いくつかの要素があろうが、土師器と須恵器が機能として、階層性を保持し(階層性を具備)している段階を古代と見ることも可能ではないかとも考えている。前半期は基本的に土師器と須恵器でのみ階層性を具備した段階といえる。前半期での器種・型式の多様性と、2様式II期での赤彩土師器の出現、II期での食器セットの確立はその点において一つの評価ができる。後半期は土師器、

須恵器以外に磁器と、綠釉・灰釉が加わる段階といえる。土師器・須恵器の器種の淘汰や單一化、調整の相場化は、須恵器・土師器が階層性を具備した基本的な器物から、その座を磁器、綠釉、灰釉に譲り俗系に転じた結果とも理解できよう。この理解は宇野隆夫氏の教示によるところが大きい。

註 6 金屬器写しの杯蓋・鉢を始めとし、大型鉢・すり鉢・陶鏡など。

註 7 伝統杯・提瓶・壺、有蓋高杯・無蓋高杯のうちの杯部に二段の脚をもつ型式など。

註 8 土師器供給器の減少は、「北陸型煮沸セット」の成立に先立ち、既に 1 様式に見られる。土師器供給器の減少は北陸での土器組成の大きな特徴であるが、裏返せば須恵器がその欠を補っていることを意味する。当該期に土師器供給器が改良・発展することなく衰退していったことの評価は重要な検討課題であろう。

註 9 「当該期の土師器の技法の変化（「北陸型煮沸セット」の成立過程）については北野氏の詳細な検討（北野 1986）がある。

註 10 土師器と須恵器との技術交流は 1 様式には見られると考えている。

註 11 壺類が多様な器形に分化・定型化するのは日暮以降と推定され、当該期は基本的に 1 様式を継承するといえる。

註 12 羽佐柳田タンフリ窯出土甕（福島 1982）、小松市漆町遺跡 163 土塙甕

註 13 小松市漆町遺跡 105 土塙出土甕

註 14 加賀市二子塚遺跡、松任市法仏遺跡出土資料

註 15 「北陸型煮沸セット」については岸本氏がその特徴を整理（岸本 1982）している。ここでは、ロクロ技法、ケズリ技法と叩き技法を駆使したもののとし、やや幅をもたせ使用している。

註 16 この時期には岸本氏が指摘したように、「北陸型煮沸セット」の多くが須恵器窯（窑窓）で焼成されている。「北陸型煮沸セット」（土師器）を須恵器窯で併焼する生産形態はこの後、5 様式まで続く。なお、「北陸型煮沸セット」が須恵器窯で焼成されていること評価は、在来型の土師器生産者が須恵器の生産にたずきわかった結果と考えている。

註 17 検証作業を始めたばかりであるが、漆町遺跡、保原遺跡、法仏遺跡等で該当する資料を確認している。胎上の観察では北野氏の教示を得ている。

註 18 在来型の土師器生産については、群域をさらに細分するような狭域を供給領域とする自給的な土器生産（集団）を考えている。以下では、特に須恵器生産のあり方の理解（註 19）と対照させるものとして使用しているが、具体像の理解は曖昧である。今後の検討課題としたい。

註 19 「北陸型煮沸セット」の成立と、その評価をめぐっては、岸本（岸本 1982）、吉岡（吉岡 1983）、北野（北野 1986）等の理解がある。3 氏は、「北陸型煮沸セット」の成立は、土師器工人が、須恵器工人主導型のもとで政治的に須恵器工人に吸収・再編成された反映と理解する。そして、そこに、北陸での「律令的土器生産体制」の成立と特質を見ようとしているといえる。ただ、土師器工人（生産者）の、須恵器工人（生産者）への具体的な編成・吸収のありかたの理解では、土師器工人が須恵器工人に吸収されたとする北野の理解の他は、「須恵器生産組織への吸収をただちに考えないにせよ」とする岸本の理解、「須恵器生産組織の一環に再編成された」とする吉岡の理解など、それ表現に微妙な違いがみられる。保留部分を残すが、3 氏の基本的な理解は、当該期の土器生産体制の変化を、在来型の土師器生産体制（その集団およびその供給のあり方を含めて）を解体する方向での変化とする点で一致しており、そこに重要な結論があったと考えている。

一方、今日の「北陸型煮沸セット」成立と、土師器・須恵器生産をめぐる一般的な理解には、土師器工人・須恵器工人が厳密に区分され組織されていたとの前提と、ロクロ技法を須恵器（生産者）の技法、非ロクロ技法（伝統的土師器技法）を土師器（生産者）の技法と特定する前提、さらには、須恵器生産と土師器生産との間に融合の余地のない技術・生産体制上の格差をみる理解が前提としてあるように思えてならない。

註 20 本文とも重複するが、前半期の「北陸型煮沸セット」の成立過程を在来型の土師器生産との関連で要約すれば次のように整理できよう。

① 「北陸型煮沸セット」の成立は土師器供給器も含めた北陸での土器製作技法（土師器系土器）の変革と理解できる。

② 「北陸型煮沸セット」は在来型の土師器窯、謫を母胎としており、検討の余地を残すが、「北陸型煮沸セット」

ト」にみる多量の混和剤のありかたは土師器の技法である可能性をもつ。「北陸型煮沸セット」の成立が、須恵器系技法を基調としつつ創出されたことは明らかであるが、そこには土師器の技法が融合していることも見失ってはならない。

- ③ 「北陸型煮沸セット」成立、齊一化までには、長胴甕・鍋の成立（1様式）、土師器と須恵器の技術交流（2様式Ⅰ期）、須恵器系技法を採用した2タイプの甕の出現（1期）、「北陸型煮沸セット」の定型化（II期）、小型の甕も含めた技法上の齊一化（3様式）までの過程をへており、その変化は漸移的ともいえる。
- ④ そして、「北陸型煮沸セット」の成立状況は、須恵器窯（出土品）で一定度定型化されたものが創造され、それが一般化・汎用する須恵器窯先行型のあり方と特定できない。2様式Ⅰ期には須恵器窯でも伝統的技法に準じた手法の甕、鍋が焼成されており、II期でさえその例がある。粗形は須恵器窯、在来型の土器生産者（土師器生産者集団）の手となると推定されるものの両者の認められる。そして、在来型の土器生産者の手となると推定される「北陸型煮沸セット」は、2様式の例だけでなく、土師器が須恵器系技法への転換を完了する3様式の例（漆塗191土竈）すら確認できる。
- ⑤ 定型化した「北陸型煮沸セット」がみられる2様式にも、在来型の技法による土師器甕、鍋などは一定量認められ、一般化できるかどうか検討の余地を残すが、3様式の例もある。「北陸型煮沸セット」に占める頻度は地域的に偏りがみられるとともに、小地域内であっても偏りがあるようである。当該期の土師器の生産には、伝統的技法を踏襲した集団と、須恵器系技法を相対的に早く取り込んだ集団との2者の存在を想定できる。

筆者は「北陸型煮沸セット」の成立を含めた前半期土師器の推移（土師器系土器成立）を、土器生産者が須恵器生産者のもとに吸収・再編成された結果とし、そこに土器生産者と須恵器生産者との確執をみる理解には立たない。

「在来型」で生産されたと推定される「北陸型煮沸セット」が、2様式Ⅰ期の例だけでなく、3様式の例すら確認できることは、須恵器生産と密接に関連した在来型土器生産者の存在を暗示するとともに、それら生産者が須恵器生産集団に組み込まれていたとの理解にたっても、必要に応じて「在来型」での生産も行っていたことを示している。須恵器と土器の生産がせつ然と区別されていない点と、在来型の土器生産に代表されるような生産形態を母体（基礎）としている点に当該期の土器生産の1つのあり方をみたい。そして、3様式の須恵器生産の高潮は、これらの集団の多くが、須恵器の完成にたずきわった結果とは考えられないであろうか。また、3様式での土器系土器への齊一化は、須恵器系技法が2様式の内に土器生産者集団の間に深く浸透し、土器製作技法として広く定着していた帰結と考える。4様式以降には須恵器窯跡群を伴わない土器系土器の土器窯が確認できるようになるが、3様式に須恵器生産に専与しない土器系土器生産者が一般的な形態として存在していたかどうかは今後の検討課題として残っている。

蛇足ではあるが、須恵器生産（窯跡）のイメージも、一元的な管理下におかれた特定技術者集団の排他的・占有的な生産体制を強調するのみでなく、窯跡は該当地域での土器生産者が共同で使用するような共有・共同の窯場、生産地であり、これら自給的な土器生産者の複合的な生産を基礎としていた可能性も、追求すべきであると考えるに至っている。同一窯における手法の異なる遺物や、麻印（中村1981）、叩き目文原本の同定の成果（花塚1984）、あるいは窯跡間の焼成器種の偏りなどを、この視点より照射してみたい。

註21 小稿では3様式と4様式の間に画期を求めて、古代の土器の推移を2大別して理解する方法をとっているが、3様式の成立も大きな両期として評価すべきと考えている。3様式の成立は、生産面での革新を基調としており、その変化は齊一的で、せつ然としている。4様式の変化は、それに対比させれば消費ないしは供給製品組成の変化といえ、推移も地域差がみられる。

註22 細切り手法が一定量見られるようになるのは当該期といえる。技法上の両期ととらえられよう。須恵器での使用例は少ないが、杯（碗）、瓶、鉢などに確認例があり、土器では赤彩土器、小型甕に通常みられる。土器器の主要な手法として当該期以降一般化する。

註23 身の深い有台杯（B<sub>1</sub>・B<sub>4</sub>III）、それに無台の杯、有・無台の皿、皿状の杯部をもった高杯（A）が加わった供膳器の組み合わせの確立。2様式にみられた身の浅い杯（A）は当該様式には消滅する。なお、当該様式の杯の変化はA類からB類への変化といえる。I期にはA類が一部残存。

- 註 24 土師器同様、この様式で伝統型式を試すとともに、2様式Ⅱ期に出現・定型化した器種にも減少・消滅、ないし著しく型式を変化するものがみられる。伝統型式の高杯・瓶・把手付壺、広口の瓶が減少・消滅し、把手付壺、高壺は著しく型式を変化する。
- 註 25 双耳瓶、肩衝壺、長颈瓶など
- 註 26 3様式Ⅱ期には特定窯、特定消費遺跡でしか見られなかった組成が、この期に一般化する。組成では器種によって減少するものもあるが、相対的には2様式Ⅱ期の組成の一般化であり、様式的な発展と評価できる。
- 註 27 様相がある程度明らかなる能美窯でその特徴を上げると、他の窯跡群に比較して調整の丁寧な優品が偏在すること、高台を取り付ける窯所が窯底部に寄る有台杯の形態的特徴、糸切り手法の杯の偏在などを抽出できよう。また、加南、能美窯跡群で有台の瓶が量産されるのも窯跡群を単位とした特徴といえよう。
- 註 28 花塚は、内面格子叩きを検討し、能美窯での偏在を指摘している（花塚 1984）。なお、越後では当該期での東海系の型式の頸在化を指摘している。この傾向は越中でも指摘できる可能性があり、能美窯での糸切り手法の偏在なども同様に理解できる可能性がある。
- 註 29 重ね焼きの確立（木立雅朗氏教示）。
- 註 30 当該期に窯場を移動する例が多い。具体的には能美窯、加北窯、鳥屋窯で指摘できるし、県外でも福井県の越南窯、富山県の小矢部、小杉、呉羽地域の窯跡群などで指摘されている。また、末窯では移動を開始する。一連の動向と理解できよう。
- 註 31 当該期の年代観、特に4様式Ⅱ期と、5様式をめぐる年代観を想させようとする理解がある。筆者は共伴する灰陶・鍍鉄陶との対比から、4様式Ⅱ期にはK-90窯式が最新型式として共伴し、O-53窯式は5様式Ⅰ期を初頭とすること、同じく近江系縁輪の共伴例の初現が5様式Ⅱ期であることを主たる根拠に、4様式Ⅱ期と5様式Ⅰ期の交又を10世紀の第1四半期に、5様式Ⅱ期を10世紀中葉においている（田嶋 1986）。
- 註 32 4様式の成立も、齊一的、画一的に成立していない。
- 註 33 痛患器生産衰退の大きな要素の一つをここに求めたい。
- 註 34 当該期での窯跡の減少は指摘（吉岡編年）されているが、相対的には痛患器生産が堅長との理解が強いようである。ここでは数量的に具体的に示すことは出来ないが、絶対量の減少を強調しておきたい。
- 註 35 加南窯、加北窯、鳥屋窯など群衆を超えた供給領域を持つ窯跡群。
- 註 36 分散化はⅡ期で顕在化する現象といえる。これについては集約的生産体制の崩壊という側面の他、小さな供給領域を単位とする痛患器窯が稼働したとしても評価できよう。
- 註 37 伝統型式の長颈瓶、有台皿、高杯、平瓶、横瓶、金属器写しの器種などの減少・消滅。主として奈良時代に盛行した器種・型式が消滅する時期といえ、その点では平安時代の组成の確立期（吉岡 1983）ともいえる。金属器写しの器種は3様式に減少の兆候が現れると推定しているが、当様式には少量の鉄体形の鉢を除いて消滅する。この変化は前半期痛患器組成との区別で重要である。
- 註 38 無台杯に対する有台杯比率の減少、あるいは能登地域での無台杯と無台皿との明確な区別の消失、あるいはⅡ期での小型有台杯の減少など。この傾向は5様式以降加速的に進む。
- 註 39 ヘラケツリの省略、ヨコナデの粗悪化。また、叩き技法の規範の乱れも当該期以降進む。
- 註 40 戸津窯、給分小袋窯など。戸津窯では、肩窯と土師器を焼成したと推定される小型の窯が併存していた（河田ほか 1985）。ここには註41と同様、痛患器生産（者）と土師器生産（者）の一體的なあり方を見ることができるのではなかろうか。
- 註 41 長口サクラマチ窯、同・大口遺跡、末窯（出越氏教示）など。
- 註 42 当該期の土師器にみる手法差、形態差は群衆をさらに細分するような単位でみられるようである。具体的な検討は充分でないが、菅原の範囲でも、加賀地域では江沼西南部、梯川流域、手取川左岸域、手取川右岸域、犀川河口地域でそれぞれ異なる型式を抽出できる（田嶋 1986）。手法差、胎土の違いを更に検討すればより狭域での細分化が可能になるとを考えている。そして、この様相差が示す領域は、どこまで選ばせ得るかは明らかでないが、古代の土器生産の単位と供給領域を検証する上での有効な素材と考えている。一方、個々の消費遺跡のあり方は複雑で、器種による供給先の違い（吉岡 1983）の他、同一の器種でも胎土に違いがみられ、複数の生産地から供給も考えられる。同様の作業は痛患器でも（吉岡 1983、木立 1986）検討されている。個々の消費

遺跡にみる受給のありかたと、先にみた、狭域土器圏とをいかに整合的に理解するかは今後の課題であるが、消費地にみる具体的な受給状況の検討は、土器の供給の問題に留まらず、当該期の土器生産に具体的に迫る有効な素材といえる。

註43 須恵器を作る際の技法と、土師器を作る際の技法には明確な使い分けがあったと考えられる。当該期はその使い分けすら、混乱した段階といえよう。一方、須恵器に多用される技法を須恵器系技法、土師器の場合を土師器系技法とよぶことは可能と考えるが、それぞれの技法差を安易に工人差に解消するのは疑問である。なお、規範の乱れについては当該期での東海系技法の波及も考慮しておく必要があろう。

註44 当該期以降の須恵器窯は確認されていないが、消費遺跡では在地産と推定される須恵器が確実に認められる。窯を主体に焼成した須恵器窯は存続していると推定される。

#### 引用・参考文献

- 伊藤隆三 1981 「富山県小矢部市平塚岡山3号窯跡」 小矢部市教育委員会  
上野 章・池野正男他 1980 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第2次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
上野 章・狩野 瞳他 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
上野 章・岸本正敏他 1984 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
岡崎卯一 1972 「福山窯跡」「富山県史」 考古資料編  
折戸靖幸 1985 「八野古窯跡発掘調査報告書」 高松町教育委員会  
樋田 誠・望月精司 1985 「戸津」 小松市教育委員会  
金沢大学考古学研究会 1976 「金沢大学考古学研究会活動報告」 第2号  
金沢大学考古学研究会 1981 「金沢大学考古学研究会活動報告」 第3号  
岸本雅敏 1982 「東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編」 上市町教育委員会  
北野博司他 1986 「佐々木ノテウラ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター  
木立雅朗 1985 「能美窯跡群の須恵器編年 (1)北群」「辰口町湯原古窯跡」 辰口町教育委員会  
木立雅朗 1986 「辰口町湯原窯跡の重要性について (発表要旨)」「石川考古」 第168号 石川考古学研究会  
小嶋芳孝 1975 「金沢市末町付近の窯跡群とその歴史的性格」「石川考古学研究会誌」 第18号 石川考古学研究会  
小村 茂・橋本澄夫 1974 「小松市古府しのまら遺跡」 石川県教育委員会  
小森秀三・出島正和 1980 「高尾廬寺跡発掘調査報告」 加賀市教育委員会  
白石太一郎 1984 「中世窯業の黎明」「講座・日本技術の社会史 第四巻・窯業一」 日本書評社  
間 清・池野正男他 1983 「七美・太閤山・高岡線内遺跡群」 富山県教育委員会  
大聖寺高等学校郷土研究部 1971 「南加賀古窯址群宮地地区調査報告」「郷土」  
池上秀明・木立雅朗他 1985 「辰口町湯原古窯跡」 辰口町教育委員会  
田嶋明人 1973 「柳田古窯跡群」「羽咋市史」 原始・古代編  
田嶋明人・平田天秋 1979 「田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書」 石川県教育委員会  
田嶋明人・越坂一也他 1986 「漆町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター  
田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店  
上野富士夫・木立雅朗他 1986 「矢田遺跡」 石川県七尾市教育委員会  
中島俊一他 1975 「安養寺遺跡群(安養寺・柴木・郡入道地区)発掘調査報告」 石川県教育委員会  
中村 浩 1976~78 「陶邑」 1~30 大阪府文化財調査報告 28~30編 大阪府教育委員会  
中村 浩 1981 「和泉南邑窯の研究」 柏書房  
奈良国立文化財研究所 1981 「平城宮発掘調査報告IX」

- 西野秀和・垣内光次郎 1985 「鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(II)」 石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和 1985 「高松町若林ヤキノ窯跡」 石川県高松町教育委員会
- 橋本澄夫・田嶋明人他 1971 「法皇山横穴古墳群」 加賀市教育委員会
- 花塚信雄 1984 「河北郡高松町若林地内新発見の須恵器窯について」『石川考古学研究会誌』第27号 石川考古学研究会
- 浜岡賢太郎 1970 「池崎一号窯」「七尾市史・資料編」 四
- 浜岡賢太郎 1974 「第4節 歴史時代 倉垣コマクラベ窯跡・猪の谷町水池窯跡」「志賀町史・資料編第一巻」
- 浜岡賢太郎・平田天秋 1976 「高松町箕打・みやの古窯」 石川県教育委員会・みやの古窯跡発掘調査委員会
- 平田天秋他 1984 「辰口町東丸サクラマチ窯跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 平田天秋他 1986 「金沢市・戸水C遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実・木立雅朗他 1987 「第四節 奈良・平安時代」「辰口町史」 第二卷前近代編 辰口町史編纂専門委員会
- 福島正実他 1982 「柳田タンワリ1号窯跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実 1985 「那谷金比羅山窯跡群」「昭和59年度農業は場整備事業・農業公害防除特別上地改良事業関係埋蔵文化財調査概要」 石川県立埋蔵文化財センター
- 宮下幸夫 1979 「小松市郡谷町篠の木山1号窯」 石川県教育委員会
- 宮下幸夫 1980 「戸津九号窯」 小松市教育委員会
- 宮本哲郎他 1977 「金沢市安原工業団地遺跡」 金沢市教育委員会
- 山本正敏・岸本正敏・池野正男・松本幸二 1978 「富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概報」 富山県教育委員会
- 湯尻修平他 1975 「安養寺遺跡群(上林地区)調査報告」 石川県教育委員会
- 吉岡康暢・橋本澄夫 1965 「石川県鹿島郡廻西町金丸宮地遺跡の土師器」『石川考古学研究会誌』 第9号
- 吉岡康暢 1965 「石川県河北郡黒川第二号窯跡」「日本考古学年報 13」
- 吉岡康暢 1966 「輪島市の考古学的調査 第1報〈柳舟古窯跡〉」『石川考古学研究会誌』 第10号
- 吉岡康暢 1966 「洲衛古窯址群」「石川考古学研究会誌」 第10号
- 吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の横年」「考古学ジャーナル 6」
- 吉岡康暢他 1967 「加賀三浦遺跡の研究」 石川県・松任市教育委員会
- 吉岡康暢 1983 「奈良平安時代の土器編年」「東大寺領横江庄遺跡」 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 四柳喜章他 1971 「北陸自動車道関係埋蔵文化財調査概報II」 石川県教育委員会
- 四柳喜章 1983 「古墳時代の沙庭と祭具」「北陸の考古学」 石川考古学研究会

土器観察表

第9回

番号	出土地点	器種	法量(cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	1号土坑 フク土 AbII	杯	台 9.4	A	B	小片	
2	2号土坑 フク土	"	口11.8 高 3.2	A	A	"	
3	"	"	台10.4	A	A	X	
4	4号土坑 フク土	杯蓋	口12.1 高 2.5	A	B	略完 天ロクロケズ リ	
5	"	"	口10.4	A	A	X 天神ロクロケ ズリ	
6	"	"	口13.2 高 3.1	A	B	略完 天ロクロケズ リ	
7	"	"	口12.8 高 2.2	A	AB	略完	"
8	フク土	"	口15.2 高 1.8	A	C	X	
9	"	"	口15.8 高 2.2	A	BC	略完 天ロクロケズ リ	
10	フク土上面	"	口16.0 高 3.4	A	BC	X	
11	フク土	"	口17.0 高 2.9	A	BC	X 天神ロクロケ ズリ	
12	"	"	口17.8 高 3.0	A	AC	X 天ロクロケズ リ	
13	フク土	"	口17.0	A	B	X	"
14	"	"	口17.3	A	B	X	"
15	"	"	口19.6 高 3.1	A	AB	X	天神化線2条
16	"	杯 CbIII	口 9.4 高 4.8 台 5.8	A	BC	X 外底ロクロケ ズリ	
17	"	"	口10.4 高 3.6 台 8.0	A	AD	X	"
18	フク土	"	口11.8 高 4.1 台 8.3	A	BC	X	"
19	"	"	口13.8 高 3.3 台 11.0	A	AD	X	
20	フク土	"	口15.3 高 3.5 台 10.7	A	AD	X	
21	"	"	口14.8 高 3.9 台 10.8	A	B	X 外底ロクロケ ズリ	
22	"	"	口15.2 高 4.0 台 11.0	A	BC	略完	
23	フク土	"	口15.3 高 3.5 台 11.1	A	BC	X 外底系伏压痕	
24	"	"	口15.8 高 4.7 台 11.1	A	AB	X	
25	"	"	口19.4 高 7.5 台 15.0	A	A	X 外底ロクロケ ズリ、系統压 痕	
26	フク土	"	口17.1 高 7.5 台 12.1	A	BC	X	
27	"	"	口13.0 高 3.5	A	AD	X	

28	"	フク土	"	口14.3 高 3.6	A	AD	X
29	"	"	"	口14.0 高 2.9	A	AB	X
30	"	16	"	口13.4 高 3.5	A	A	X
31	"	"	"	口12.7 高 3.6	A	AD	X
32	"	"	"	口13.2 高 3.6	A	B	X
33	"	"	"	口13.7 高 2.6	A	AD	X
34	"	フク土上層	"	口13.9 高 3.9	A	A	X
35	"	フク土	"	口14.3 高 3.2	B	AD	X
36	"	"	S	口 8.5 高 5.9 幅 5.1	B	BC	光 外底ロクロケ ズリ
37	"	"	Bas	口15.7 高 1.8	A	C	X 外底ロクロケ ズリ
38	"	"	Da	口18.6 高 3.0	A	A	X 外底ロクロケ ズリ
39	"	"	Ea	口21.8 高 2.2	A	AB	X

第10回

番号	出土地点	器種	法量(cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	4号土坑 フク土	蓋	口24.0	A	C	X	天沈縫2条
2	"	5	口25.5	A	C	X	天ロクロケズ リ 天沈縫2条
3	"	フク土	高杯	口13.5	A	A	X
4	"	27	"		A	AD	X
5	"	29	鉢	底 11.0	A	C	X 光
6	"	2	口12.5	A	BC	X	
7	フク土	"	底 13.4	A	AD	X	
8	"	"	口12.5	A	B	略完	
9	"	蓋 A	口 6.6 幅 12.0	A	B	X	
10	"	底 A	"	A	BC	X	11と同一個体 か?
11	フク土	A	台 10.7	A	B	X	
12	"	31	口17.7	A	C	X	
13	フク土	A	口 17.4 台 9.5	A	C	X	
14	"	F-2	口23.9	A	AD	X	
15	"	蓋 A	口35.6 高 10.5	A	AC	X	
16	"	底 F-1	口40.0	A	AD	X	同心円呂盤 底部片あり

第11回

番号	出地	土点	器種	法 量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	4号土坑	B	口23.2 高34.2	A	C	X		
2	"	アク土	土器 杯 Aa	口14.2 高3.1	B	B	X	赤彩なし
3	"	40-3	赤土器 高杯 C	口10.2 高10.2	B	B	X	角柱
4	"	11	" A	口121.7 高11.6 周12.5	B	B	X X	
5	"	33	土器 甕 AH-1	口13.3 高12.4 周14.0	C	C	X	
6	"	フク土	甕 C-2	口28.3	BA	B	X	

第12回

番号	出地	土点	器種	法 量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	5号土坑	B	甕	口15.3	A	C	X	
2	"	アク土	"	口16.0	A	C	X	天口クロケズ リ
3	"	5	" 高3.0	口16.7 高3.0	A	B	X	天輪口クロケズ リ
4	"	アク土	" 高3.2	口16.0 高3.2	A	C	X	天口クロケズ リ
5	"	"	" 高2.8	口16.3 高2.8	A	C	X	"
6	"	1	杯 AbII	口16.3 高4.0 周11.1	A	BC	X	
7	"	3	" 高4.1 周11.0	口16.3 高4.1 周11.0	A	BC	X	
8	"	10	" 高3.8 周11.2	口15.6 高3.8 周11.2	A	C	X	
9	"	7	An	口14.7 高3.8	A	AD	X	
10	"	11-9	甕 A	口18.7 高10.6	A	C	X	
11	"	2	甕	口31.7	A	C	小片	
12	"	17	赤土器 高杯 B	" 高3.0	B	C	略光	
13	"	アク土	" 高3.0	口16.9 高3.0	BA	C	X	
14	"	"	" 高4.1	口17.6 高4.1	BA	C	X	黒斑あり
15	"	"	" 高6.3	口19.2 高6.3	A	C	X	暗文? 剥・外底ケズ リ
16	"	土器 鍋 AH-2	口23.2	C	C	小片		
17	"	"	口12.8 高10.3 周12.6	BC	B	X		
18	"	"	" 周12.6	BC	B	X		

19	"	19	" A1-2	口24.6	B	BA	X	下サケズリ
20	6号土坑	フク土	甕	口16.0	A	B	X	天口クロケズ リ
21	"	"	"	口17.9 高3.3	A	C	略光	
22	"	"	甕 Aa	口13.8 高3.5	A	C	X	
23	"	"	高杯 B	口22.5	A	AD	小片	

第13回

番号	出地	土点	器種	法 量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	7号土坑	49	甕	口11.5 高2.1	A	BC	光	天口クロケズ リ
2	"	43	"	" 高2.5	A	BC	X	"
3	"	アク土	"	口14.5 高2.0	A	B	X	
4	"	"	"	口15.8 高2.2	A	BC	X	
5	"	30-1	"	口16.4 高2.4	A	AC	X	
6	"	21	"	口16.2 高1.2	A	C	X	天口クロケズ リ
7	"	アク土	"	口16.9 高2.0	A	B	X	"
8	"	32-1	"	口16.0 高2.2	A	BC	光	
9	"	アク土上層	"	口12.6 高2.2	A	AB	X	"
10	"	"	"	口12.0 高2.2	A	C	X	11号土坑に破 片あり
11	"	アク土	"	口12.8 高2.6	A	AC	X	"
12	"	46-4	"	口12.7 高2.4	A	BC	X	
13	"	46-4	"	口13.3 高2.6	A	AB	X	天口クロケズ リ
14	"	アク土	" 高3.3	口13.4 高3.3	AB	A	X	「真」
15	"	アク土上層	"	口12.2	B	AD	X	「平」
16	"	アク土	"	口15.8 高3.2	A	B	X	天口クロケズ リ
17	"	"	"	口16.5 高2.8	A	AB	X	"
18	"	"	"	口17.4 高2.4	A	C	X	"
19	"	"	"	口17.0 高3.1	A	AC	X	
20	"	アク土	"	口16.0 高2.4	A	AC	X	内天へラ記号 X 天口クロケズ リ
21	"	4-2	"	口17.2 高2.0	A	AC	X	"
22	"	3	"	口17.4 高2.9	A	BE	X	"
23	"	アク土	"	口17.8 高3.0	A	BC	X	
24	"	23-1	"	口17.4 高3.7	A	A	X	天口クロケズ リ
25	"	アク土	蓋	口16.6	A	A	X	"

26	"	37	粘 BbIII	□ 9.8 高 3.5 合 7.8	A	BC	X	
27	"	フク土上層	"	□ 9.6 高 3.8 合 6.3	A	AB	X	
28	"	フク土	"	□ 10.7 高 4.8 合 7.4	A	C	X	
29	"	4-2	"	□ 11.6 高 4.5 合 8.0	X	A	略完	
30	"	48	AbII	□ 12.0 高 3.6 合 9.0	A	BC	X	外底ロクロケ ズリ
31	"	52	"	□ 13.9 高 3.8 合 9.7	A	BC	X	
32	"	56-58	"	□ 15.9 高 3.4 合 12.6	A	BC	X	
33	"	フク土	"	□ 14.2 高 4.0 合 9.2	A	A	X	
34	"	"	"	□ 14.3 高 4.0 合 9.6	A	B	X	
35	"	46-1	"	□ 13.7 高 3.5 合 10.6	A	B	X	堅・外底ロク ロケズリ
36	"	フク土上層	"	□ 14.3 高 3.2 合 11.5	A	B	略完	外底ロクロケ ズリ
37	"	16	"	□ 14.8 高 3.2 合 11.0	A	BC	X	"
38	"	68	"	□ 15.0 高 3.6 合 11.8	A	AB	X	
39	"	68	"	□ 15.0 高 3.8 合 10.0	A	BC	X	
40	"	フク土	"	□ 14.8 高 4.4 合 11.0	A	BC	X	
41	"	7	"	□ 15.5 高 3.6 合 11.0	A	CE	X	
42	"	フク土	"	□ 17.1 高 3.1 合 13.2	A	B	X	
43	"	4-2	"	□ 16.2 高 3.8 合 11.6	A	A	X	外底ロクロケ ズリ
44	"	"	"	□ 17.1 高 4.2 合 12.3	A	AB	X	
45	"	3-29	"	□ 15.7 高 5.2 合 10.8	A	C	X	外底ロクロケ ズリ

3	"	フク土上層	"	"	□ 19.6 高 7.4 合 14.4	A	AB	X	外底ロクロケ ズリ
4	"	45	"	"	□ 17.7 高 7.3 合 11.5	A	AB	X	
5	"	46-1	"	CbII	□ 15.8 高 8.2 合 10.6	A	C	略完	外底ロクロケ ズリ
6	"	フク土上層	"	Aa	□ 12.5 高 3.2	A	C	X	
7	"	23-1	"	"	□ 12.7 高 3.0	A	D	X	
8	"	45-66	"	"	□ 13.3 高 3.3	A	AE	完	
9	"	23-2	"	"	□ 13.3 高 2.9	A	AD	X	
10	"	7フク土上層	"	"	□ 13.5 高 3.2	A	A	X	
11	"	53-1-34	"	"	□ 13.3 高 3.1	A	C	X	
12	"	7-46-1	"	"	□ 13.4 高 3.9	A	B	略完	
13	"	37	"	"	□ 13.7 高 3.2	A	AD	略完	
14	"	52	"	"	□ 13.8 高 3.1	A	D	X	
15	"	63-1	"	"	□ 13.4 高 3.4	A	E	X	
16	"	15-17	"	"	□ 14.0 高 3.6	A	A	X	
17	"	68	"	"	□ 14.2 高 3.2	A	A	X	
18	"	61	"	"	□ 14.6 高 3.3	A	A	略完	
19	"	25	"	"	□ 13.4 高 3.6	A	AC	X	
20	"	9-14-2	"	"	□ 13.7 高 3.4	A	AD	X	
21	"	26	"	"	□ 13.8 高 3.2	A	B	略完	
22	"	フク土	"	"	□ 14.0 高 3.0	A	A	X	
23	"	7	"	"	□ 14.2 高 3.1	A	AD	略完	
24	"	68	"	"	□ 14.2 高 3.2	A	AD	略完	
25	"	フク土	"	"	□ 14.0 高 2.9	A	AC	X	
26	"	27	"	"	□ 14.4 高 3.3	A	A	X	
27	"	68	"	"	□ 14.2 高 3.4	A	AB	略完	
28	"	21-58	"	"	□ 13.9 高 2.7	A	D	X	
29	"	フク土上層	"	"	□ 13.8 高 2.7	A	E	X	
30	"	3	"	"	□ 14.4 高 3.6	A	AE	X	
31	"	16	"	"	□ 13.6 高 3.3	A	B	X	「山」
32	"	フク土	"	"	□ 14.7 高 3.1	A	AD	X	
33	"	44-2	"	"	□ 14.3 高 4.0	A	AD	X	
34	"	53-2	"	"	□ 14.9 高 3.6	A	A	X	

第14回

番号	出土地点	岩種	法 量 (cm)	粘土	色調	連存	備考
1	7号土坑 62-2	粘 BbI	□ 17.5 高 6.7 合 11.3	A	B	略完	堅底ロクロケ ズリ
2	" 40	"	□ 17.2 高 7.0 合 10.8	A	A	X	堅・外底ロク ロケズリ

35	"	フク土	"	□14.6 高3.7	A	A	X	
36	"	1	"	□15.1 高3.4	A	AB	X	
37	"	フク土	"	□15.2 高3.2	A	A	X	
38	"	23-1-44-2	田面	□29.0 高4.6	A	AD	X	11-12号土坑 に破片あり。 瓦口クロケズ アリ
39	"	62-2-67- 58	"	□25.6 高3.3	A	C	X	"
40	"	44-1-45- 4-68	Ab	□28.6 高5.1 合23.8	A	AD	X	外底ロクロケ ズアリ
41	"	フク土上面	"	□20.6 高3.8 合15.6	A	AD	X	
42	"	"	Aa	□15.8 高1.9	A	AD	X	
43	"	"	"	□15.8 高1.7	A	AD	X	
44	"	21-1-68	Da	□17.8 高2.2	A	AC	X	外底ロクロケ ズアリ
45	"	フク土	"	□18.3 高2.2	A	A	X	12号土坑に破 片あり。外底ロクロケ ズアリ
46	"	50	"	□18.9 高1.9	A	A	X	"
47	"	62-1-62- 2	"	□19.4 高2.2	A	A	X	"
48	"	63-2	Ea	□23.5 高2.2	A	D	略定	
49	"	フク土	Da	□20.3 高2.3	A	A	X	外底ロクロケ ズアリ
50	"	"	X	□31.6 高5.5	A	A	X	8号土坑に破 片あり。 アリ

10	"	フク土	"	□10.5	A	C	略定	
11	46-1	"	F	削15.5	B	B C	X	11号土坑に破 片あり
12	"	フク土	碧玉	□12.1				
13	40-58	"	B	□9.2	AB	A	X	
14	"	フク土	G	□9.2 高7.1	X	A	X	
15	"	"	K	□14.6	A	A	X	
16	"	平秋	削10.0	A	A	完		外底ロクロケ ズアリ。外底ケ ズアリ

第16回

番号	出土地点	砂種	法(㎝)	粘土	色調	遺存	備考
1	7号土坑 4-1	碧玉	□32.5	A	C	略定	
2	"	46-3堆	"		A	CE	略定
3	"	22	海島		A	AC	手綱沈鏡で表 現
4	"	24-1	碧	□14.0	A	AD	X
5	63-2	"	碧	□18.5	A	A	X
6	"	20	赤土緑 杯盤	□16.9 高3.0	B	B	X
7	"	27	杯 Eb-2	□16.5 高4.3 合11.9	B	A	X
8	"	68	Fa-2	□15.3 高3.4	A	C	X
9	"	43	柄 Ba-2	□12.8 高2.5	B	B	X
10	"	12	"	□14.3 高2.5	B	B	X
11	"	フク土	土緑器 Da-1	□15.7 高2.8	X	B	X
12	"	63-1	赤土緑 Aa-2	□15.5 高3.5	B	B	略定
13	"	フク土	"	□17.8 高3.8	A	B	X
14	"	68	"	□19.6 高5.0	B	B	X
15	"	49	"	Aa-2	AB	B	X

第17回

番号	出土地点	砂種	法(㎝)	粘土	色調	遺存	備考
1	7号土坑 46堆	赤土緑 Aa			A	B	ロクロ成形 台付
2	"	50	赤土緑 AII-2	□12.5 高10.5	A	A	X

3	"	フク土	"	AH-1	□14.2 高12.5	C	C	X	外底ケズリ
4	"	フク土	"	AH-2	□16.7	A	A	X	
5	"	フク土上層	"	"	□16.7 高13.8	B <sub>1</sub>	B	X	底面粗いケズリ
6	"	"	"	"	"	B <sub>1</sub>	B	X	"
7	"	"	"	"	□15.0	B <sub>1</sub>	B	X	底部あり
8	"	"	"	"	□14.2	C	C	X	11号土坑に破片あり
9	"	"	"	"	□14.5	A	A	X	
10	"	"	"	A1-2	□20.3	B <sub>1</sub>	B	X	
11	"	フク土	"	AH-2	□17.8 高18.0	B <sub>2</sub>	D	略光	底部までカキマダラ骨片MS1~2
12	"	フク土	"	"	"	A	A	X	
13	"	フク土上層	"	"	□15.8	A	A	X	
14	"	"	"	C	□29.7	B	B	X	11号土坑(10-68)に破片あり
15	"	フク土	"	"	長9.7 幅4.0 厚2.4	A	B	光	
16	"	フク土	"	"	長4.0 幅1.7 厚0.6	B	B	光	
17	"	地山直上	"	"	長8.5±上			略光	

第18回

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	胎土	色調	遺存	備考
1	8号土坑 フク土	杯形	□6.4 高1.9	A	C	光	外底クロケズリ
2	"	"	□13.0 高2.5	A	B	X	"
3	"	"	□12.2 高3.0				
4	"	46匁・口	□15.3 高2.1	A	B	光	大粗いロクロケズリ、ロクロナダ
5	"	9号土坑 31	□17.3 高3.0	A	B	X	外底クロケズリ
6	"	8号土坑 44	□9.9 高3.9 台7.5	A	B	X	
7	"	50-57	□14.8 高3.8 台11.2	A	AB	略光	外底底状压痕
8	"	78	□14.1 高3.7 台11.0	A	AB	略光	"
9	"	11-12	□18.0 高6.7 台13.7	A	B	X	外底クロケズリ

10	"	22	"	□18.5 高6.4 台14.2	A	E	X	外底クロケズリ、底面アラード、底状压痕、成形工具
11	"	53-40	Aa	□13.8 高3.4	A	A	X	
12	"	60-67	"	□13.5 高3.6	A	D	X	
13	"	77	"	□13.7 高3.3	A	A	X	
14	"	フク土	"	□13.5 高3.4	A	A	X	
15	"	68	"	□13.8 高3.5	A	A	X	
16	9号土坑 18	"	"	□14.0 高3.3	A	A	X	
17	8号土坑 42	"	"	□14.0 高3.5	A	D	X	
18	"	40	"	□13.7 高3.8	A	A	略光	
19	"	フク土	"	□13.2 高3.2	A	A	X	
20	"	1	"	□15.5 高3.2	A	AC	X	外底墨書き?
21	"	フク土	"	"	A	D	略光	生焼
22	"	74	"	"	A	D	X	"
23	"	69	"	"	A	D	X	"
24	"	79-70	Ab	□20.7 高4.1 台18.0	A	C	X	外底クロナダ、底状压痕
25	"	32	Da	□16.3 高2.4	A	B	X	側・外底ロクロケズリ
26	44-59-4 59-□	高杯	A	□23.3 高12.3- 台13.2	A	AC	略光	底部部ロクロケズリ
27	"	鉢	"	□11.7				
28	"	35D	B	□7.0 高20.5 底7.5 台12.6	B	BC	略光	体部・底部ロクロケズリ
29	"	フク土 A	"	□9.7 高17.6	A	B	X	土坑群に破片あり
30	"	33	"	□17.0 高10.7	BA	B	光	
31	?	壺	"	□12.7 高4.0	A	B	X	8号土坑かD-9-12

第19回

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	胎土	色調	遺存	備考	
1	8号土坑 41-64-13	唐F-1	□44.5	A	A	X	4号土坑に破片あり	
2	"	24-39-72	瓶瓶	□10.5 高30.8 台23.1	A	C	略光	
3	"	3	壺I	"	A	A	略光	
4	"	72	杯	"	A	A	小片	丁目□
5	"	7	隼耳杯 Eb-1	□17.7 高4.2 台13.7	B	A	X	内底不定方向ナダ、底部ユビオサエ
6	"	フク土	"	□15.2 高2.6	B	C	X	外底ロクロケズリ

7	"	"	Ea-1	口17.8 高4.0	A	A	X	底盤クロケ ズリではな い?
8	"	"	Ba-2	口18.2 高5.4	C	C	X	外底クロケ ズリ?
9	"	"	Aa-2	口18.0 高4.5	B	B	X	側・外底ロク ロケズリ
10	"	"	Ba-2	口16.3 高4.5	B	B	X	外底クロケ ズリ?
11	"	"		口13.7 高2.7	BC	B	小片	外底クロケ ズリ
12	"	"	土壤分 類 AII-1	口11.7 高10.7	AB	AB	X	
13	"	"	AII-2	口23.5	C	C	X	
14	"	"	AII-2	口39.7 高13.4	D	B	X	

第208

番号	出土地点	鉱種	法面 (cm)	粘土	色調	透視	備考
1	11号土成 フク土	重	口8.4 高1.9	A	BC	X	
2	"	"	口9.3 高1.9	A	BC	X	
3	"	杯画	口10.3 高2.3	A	B	略定	天ロクロケズ リ
4	フク土	"	口11.6 高1.7	A	BC	完	
5	"	"	口11.5 高2.4	A	A	X	
6	"	"	口12.1 高3.0	A	AB	X	天ロクロケズ リ
7	"	"	口13.2 高2.6				
8	フク土	"	口11.5 高2.5	A	BC	完	天ロクロケズ リ
9	"	"	口11.8 高2.0	A	AC	略定	
10	フク土	"	口12.7 高2.1	A	BC	X	
11	"	"	口13.6 高2.4	A	CE	X	天ロクロケズ リ
12	"	"	口13.8 高2.1	A	C	X	天ロクロケズ リ 2名のヘラ骨 と沈棒
13	"	"	口14.4 高2.0	A	AB	X	"
14	フク土	"	口13.5	A	BC	X	
15	"	"	口12.2	BA	AB	X	天ロクロケズ リ
16	"	"	口11.3 高2.1	A	C	X	"
17	"	"	口12.0	A	AD	X	「山」 天ロクロケズ リ
18	"	"	口14.5 高2.6	A	A	X	"
19	"	"	口12.6				

20	"	4	"	口13.5 高2.5	A	B	X	
21	"	29	"	口16.2 高3.5	A	A	略定	天ロクロケズ リ
22	"	"	"	口16.9 高3.0				
23	"	"	"	口15.2 高2.7				
24	フク土	"	"	口15.5 高3.2	A	AB	X	天ロクロケズ リ
25	"	"	"	口18.1 高3.1	A	AD	X	"
26	"	64・57	"	口17.3 高1.5	A	AB	X	"
27	"	56	"	口16.5 高3.2	A	AD	X	"
28	"	"	"	口16.3 高2.5				
29	フク土	"	"	口17.5 高1.8	A	B	完	天ロクロケズ リ
30	"	23	"	口15.8 高1.5	A	E	X	"
31	フク土	"	"	口16.0 高1.7	A	E	X	
32	"	54	"	口18.4 高2.4	A	B	X	天ロクロケズ リ
33	フク土	"	BbIII	口9.5 高3.6 台7.0	A	AC	X	
34	"	16	"	口9.4 高4.2 台6.0	BA	BE	X	
35	フク土	"	"	口10.8 高4.1 台8.4	A	BC	X	
36	"	"	"	口10.4 高3.8 台7.8	A	B	X	外底ロク ロケズリ
37	"	"	"	口10.6 高3.8 台7.6	A	E	X	
38	"	15	"	口11.8 高4.5 台9.2	A	AB	X	外底ロク ロケズリ
39	フク土	"	"	口12.4 高4.1 台8.7	AB	BC	X	
40	"	52	"	口13.3 高4.3 台9.0	A	A	X	
41	"	68	"	口12.7 高4.7 台9.2	A	BCE	X	
42	"	17	AbIII	口9.9 高2.7 台7.4	A	CE	略定	
43	"	65	BbIII	口10.5 高3.5 台8.2	A	B	X	外底ロク ロケズリ
44	"	67	"	口11.7 高3.7 台8.9	A	E	X	
45	フク土	"	BbI	口16.6 高5.8 台12.0	A	A	X	
46	"	68	"	口18.4 高5.9 台13.8	A	AC	X	外底ロク ロケズリ
47	"	25	CbII	口16.2 高7.4 台10.9	A	BC	X	

48	フク土	Rb I	台12.7	A	AE	X	
49	"	"	□17.0 高7.1 台12.8	A	BC	X	
50	フク土下層	"	□19.0 高7.2 台10.9	A	E	X	深度カキメ ほかにP-496 の2
51	フク土	"	□20.3 高7.0 台14.7	A	AC	X	

第21回

番号	出地	土点	形種	法量 (cm)	粘土	色調	透存	備考
1	11号土坑	64	杯	□15.0 高4.2 台11.0	A	B	X	
2	"	21	"	□14.4 高3.8 台10.9	A	AE	X	
3	フク土	"	"	□14.8 高4.0 台10.5	A	B	X	
4	"	22	"	□14.9 高3.6 台11.3	A	E	X	
5	"	68	"	□14.7 高3.5 台11.1	A	E	X	
6	"	67	"	□15.3 高3.8 台11.1	A	AD	X	
7	フク土	"	"	□15.7 高4.3 台11.2	A	BC	X	外底系統痕
8	"	"	"	□15.7 高4.3 台12.7	A	B	X	12号土坑に破 片あり
9	"	64	"	□15.1 高4.1 台10.6	A	BC	X	
10	"	63	"	□14.7 高3.8 台12.5	A	AB	X	
11	"	57	"	□14.4 高4.0 台10.7	A	B	X	
12	フク土	"	"	□13.5 高3.3 台11.1	A	A	X	
13	"	"	"	□13.5 高3.0 台10.7	A	BC	X	外底系統痕
14	"	"	"	□12.2 高2.8 台9.2	A	BC	X	外底クロケ ズリ
15	"	As	"	□13.7 高3.5	A	A	X	"山"
16	"	"	"	"	A	A	X	"山"
17	"	"	"	□12.5 高3.5	A	A	X	
18	"	"	"	□14.7 高3.4	A	AB	X	"山"カ
19	"	65	"	□13.6 高3.0	A	A	X	
20	フク土	"	"	□12.4 高2.7	A	AC	X	
21	"	"	"	□13.7 高3.2	A	E	X	

22	"	"	"	□13.7 高3.5	A	AC	X	
23	"	"	"	□14.2 高3.2	A	A	X	
24	46	1	"	□14.2 高2.9	A	CE	X	
25	"	"	"	□13.7 高3.3	A	AB	X	"山"
26	"	68	"	□12.4 高3.5	A	A	X	
27	"	57	"	□12.3 高2.7	A	C	X	
28	"	"	"	□14.4 高3.5	A	ADE	X	
29	"	"	"	□13.9 高3.1	A	AD	X	
30	"	"	"	□13.7 高3.3	A	E	X	
31	"	67	"	□14.7 高2.9	A	AE	X	
32	"	"	"	□13.6 高3.3	A	A	X	
33	"	3	"	□13.3 高3.4	A	A	X	
34	"	66	"	□14.5 高3.2	A	AB	X	
35	"	65	"	□13.5 高3.5	A	AC	X	
36	"	68	"	□14.2 高3.1	A	E	X	
37	"	67	"	□13.6 高3.2	A	D	X	
38	"	65	杯蓋	□19.8 高3.3	A	AB	X	天ロクロケズ リ
39	"	53	"	□19.2 高3.3	A	C	X	
40	"	32	"	□19.7 高4.1	A	AB	X	天ロクロケズ リ
41	"	24	皿 Ab	□22.0 高4.0 台17.6	A	A	X	外底ロクロケ ズリ、瓦状化
42	フク土	"	"	□21.2 高3.3 台16.2	A	AB	X	
43	"	"	"	□24.7 高4.7 台21.6	A	AB	X	外底ロクロケ ズリ
44	"	"	"	□24.0 高4.4 台19.6	BA	A	X	"

第22回

番号	出地	土点	形種	法量 (cm)	粘土	色調	透存	備考
1	11号土坑	65	皿 Da	□15.2 高2.5	A	CE	X	外底ロクロケ ズリ
2	フク土	"	"	□16.0 高2.2	A	AE	X	"
3	"	"	"	□17.2 高2.6	A	BC	X	"
4	"	"	"	□17.2 高3.0	A	ACE	X	"
5	"	"	"	□17.3 高2.8	A	CE	X	"
6	"	"	"	□16.9 高2.8	A	ACE	X	"
7	"	17	"	□18.8 高2.4	A	CE	X	"

8	"	"	口19.9 高2.5	A	AC	X	"	
9	"	"	口20.2 高2.4	A	A	X	"	
10	"	Ea	口22.2 高1.9	A	A	略完	"	
11	"	"	口19.8 高2.1	A	AC	X	"	
12	"	64	口21.0 高2.3	A	A	X	"	
13	"	"	口21.2 高2.4	A	A	X	"	
14	"	58	口16.8 高1.8	A	A	X	"	
15	"	17	口17.0 高2.5	A	A	X	"	
16	"	フク土	口18.9 高3.1	A	A	X	"	
17	"	66	口23.3 高2.9	A	DE	略完		
18	"	高杯 B	口21.1	A	BC	X	杯外底ロクロ ケズリ	
19	"	フク土上層	托	台5.7	BA	D	略完	
20	"	高杯 A	脚11.1	A	AB	X		
21	"	14・46	口23.6 高13.0 脚13.0	A	AC	X X	杯外底ロクロ ケズリ	
22	"	フク土	口13.3	A	C	X	体下外タキ	
23	"	高 B	口8.5 脚16.1	A	B	X		
24	"	2	盤 A	口31.5 高13.5	A	AC	X	9号土坑23- 4号土坑24に 被りあつ
25	"	2・26-64	口30.8 高10.0	A	A	X	脚底ロクロケ ズリ、外底敷 板紙	
26	"	フク土	口11.8 高3.8	A	C	X	天ロクロケズ リ	
27	"	2	盤 A	口14.0 高15.3 脚23.6 高13.6	B	E	X	体部中位以下 ロクロケズリ
28	"	フク土	脚 H		B	B	小片	

第23回

番号	出地	土点	形種	法量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	11号土坑 58-2, 67	高 B	脚	口23.6 脚36.5	A	C	X	
2	"	円頂碗			A	BC	小片	
3	"	フク土上層	歌附		A	C	完	
4	"	フク土	痕板	口12.4 高25.3 脚32.5	A	HC	X	8号土坑如即- 12号土坑に痕 板片あり
5	"	赤土筋 付蓋		口16.7	B	A	X	天ミガキ
6	"	"	杯 Ab	台10.1	B	A	X	
7	"	"	柄	口10.3 高3.3	B	B	X	

8	"	63	杯 Aa	口13.4 高3.5	B	C	X	
9	"	66	"	口14.1 高3.9	B	B	略完	赤彩なし
10	"	フク土	柄 Aa-2	口13.8 高2.9	B	A	X	脚・外底ロク ロケズリ

第24回

番号	出地	土点	器種	法量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	11号土坑 フク土上層	赤土筋 Aa-2	脚	口16.0 高3.7	B	B	X	脚・外底ロク ロケズリ
2	"	66	"	口15.8 高3.4	B	B	X	
3	"	68	Ba-2	口14.7 高5.3	BA	A	X	脚・外底ロク ロケズリ、端 文?
4	"	フク土	"	口17.0 高4.5	B	C	X	"
5	"	60	"	口18.3 高5.6	B	C	X	"
6	"	フク土	高杯 C	口24.0	B	C	X	脚内面も赤彩
7	"	68	高 A	口9.4 脚15.4 高21.0 脚10.0	B	B	X	
8	"	フク土	土筋 AI-2	口15.3 脚13.5 高16.7	A	A	完	
9	"	21	AI-2	口20.8 高20.0 脚20.7	C	C	X	7・9号土坑 に筋片あり、 底部円形に打 ち欠く、黒斑 あり
10	"	15-57	"	口21.3	B	A	X	
11	"	50-89	"	口21.2 脚21.5	BC	A	X	脚下半ハサ ケズリ海螺骨 舟MS1
12	"	フク土	AI-1	口22.2 脚29.8 高21.2	C	E	X	外縁縦きナデ ている

第25回

番号	出地	土点	器種	法量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	9号土坑 9	高 Aa	脚	口12.8 高3.6	A	D	X	
2	"	11	G	口18.8	A	B	X	
3	"	フク土	高杯		A	B	略完	
4	"	"	A	口19.4 高12.4 脚11.8	A	B	X	
5	"	"	G	口10.3 脚6.9 高12.2 脚7.2	X	A	X	
6	12号土坑 19	杯盖		口11.6 高3.1	A	B	完	

7	フク土	"	□10.9 高2.3	A	B	X	
8	"	"	□16.4 高2.8	A	CE	X	
9	"	21	□16.5 高3.4	A	AB	充	
10	"	26	□16.8 高2.8	A	AC	充	
11	"	13	□17.2 高3.1	A	AE C	略充	天口クロケズ り
12	フク土	"	□17.4 高3.0	A	B	X	天口クロケズ り
13	"	"	□20.6 高5.2	A	E	X	
14	"	c	□14.2 高3.8 合11.1	A	BE	X	
15	"	17	□14.8 高3.9 合10.3	A	BC	X	
16	"	10	□15.1 高4.0 合10.2	A	C	X	
17	フク土上着	"	□14.5 高3.9 合11.0	A	B	略充	
18	フク土	Aa	□12.0 高3.3	A	C	X	
19	"	"	□14.2 高3.5	A	A B	X	
20	"	18	□14.4 高3.3	A	D	X	
21	"	22	□14.8 高3.5	A	C	X	
22	フク土	"	□14.5 高2.7	A	A	X	
23	"	Aa	□15.3 高1.9	A	B	X	
24	"	Dm	□15.1 高2.3	A	AE	X	外露クロケ ズり
25	"	辱S	□7.3 高4.4	A	B	略充	衝・外露ロカ ロケズり
26	フク土	体F	□19.5 高24.8 合11.3	A	BC	X	10号 土 壤+18 号 土 脱粒に破 片あり
27	"	3	□24.6 高13.4	A	C	X	
28	"	14	□15.5 高9.7	A	B	X	
29	"	5	A	A	A	X	体下クロケ ズり
30	"	11	辱G	A	AC	X	3弱?

5	"	土師器 Da-1	□15.3 高2.8	X	B	X	赤彩なし 底部ユビオサ 工、第6群IIと同 一型体
6	"	■ 器 AII-2	□17.5	B <sub>2</sub>	D	X	
7	"	■ 器 AII-1	□11.5 高14.1 幅15.0	A	BC	X	須毛器 外底不定方向 のケズ?
8	13号土坑 8	杯 AbII	□15.3 高3.9 幅11.0	A	C	略光	
9	" 8	杯	底10.6	A	B	光	
10	" 15	盞	□16.2 高5.5	A	C	X	
11	" 10・13	盞	□10.0	A	B	X	
12	" フク土	帶土師 杯蓋	□18.4	B	C	X	
13	" 3	■ 瓶 Ab-1	□20.4 高5.3 台10.9	A	C	X	底部ユビオサ 工、暗文?
14	" 2	■ Ab-2	台9.9	B	C	X	外底ロクロケ ズ?
15	" 高杯 D	脚10.9	B	B	略光	杯部内黒	
16	" 9	土師器 雙 AII-2	□14.5	B	B	X	
17	" 16	■ AII-2	□19.8	D	A	X	体外、内面ケ ズ?
18	" 13・17	■ 瓶 AII-2	□37.8	C	AB	X	
19	" 11	斐イゴ 肩口	径6.0 孔3.0	C		X	
20	14号土坑 フク土	蓋	□16.5	A	B	X	
21	フク土上層	杯 BIII	□9.9 高4.2 幅7.5	B	DE	X	
22	" "	■ AbIII	□14.0 高5.8	A	B	X	側外底ロク ロケズ?
23	フク土	■ Aa	□11.8 高3.4	A	A	X	
24	フク土上層	杯	底12.0	A	AC	X	
25	フク土	高杯		BD	BC	略光	杯外底工事な ロクロケズ? ・精製品
26	" "	盞	□12.2 高4.1	A	BC	X	
27	" "	土師器 C-1	□13.6	A	A	X	

第26回

番号	出土地点	器種	法 儀 (mm)	粘土	色調	遺存	備考
1	12号土坑 アカ土	茶土師 杯	口17.5 高 4.0	B	C	X	
2	"	" 碗 Aa-2	口14.3 高 3.6	B	B	X	外底クロク 穴
3	"	" 杯 Fa-2	口16.4 高 3.6	A	C	X	暗文?
4	"	" 碗 Aa-2	口15.7 高 3.5	B	C	小片	

132

番号	出地 土点	品種	法量 (cm)	粘土	色調	遺存	備考
1	14号十坑 アツカ	土器器 A-1-2	口22.3	C	D	X	
2	15号十坑 アツカ	杯 AbII	口15.2 高4.5 底9.5	A	AD	X	

第28回

3	〃	〃	口13.3 高3.7	A	B	X	
4	16号土壤	杯盤	口13.3 高13.0	A	BE	X	
5	〃	〃	口13.9 高3.5	A	AB	X	
6	〃	〃	口15.2 高2.7	A	AB	X	
7	〃	〃	口16.1 高4.2	A	AB	X	
8	〃	杯 AbII	口14.6 高4.0 台9.5	A	AD	X	
9	〃	〃	口15.0 高4.0 台9.7	A	B	X	
10	〃	〃	台8.0	A	AD	X	
11	〃	〃	台9.6	A	B	X	
12	〃	杯 Bb I	台11.4	A	B	X	
13	〃	〃	口12.7 高3.7	A	A	X	
14	〃	〃	口14.3 高3.1	A	AB	X	
15	〃	〃	口14.8 高4.0	A	C	X	
16	〃	〃		A	AD	小片	
17	〃	瓶 A	口10.7 柄18.5	A	B	X	
18	〃	〃	口10.7	A	BC	X	
19	〃	〃	柄19.4 台11.2	A	B	X	
20	〃	〃	柄15.5 台11.3	B	BC	X	
21	〃	内面鏡	口20.8 高9.0 柄25.6				
22	〃	土壠管 B	口29.7	B	B	小片	
23	〃	瓶 D-2	口22.8	D	B	X	
24	〃	瓶 AbII 1	口15.8	C	C	X	
25	〃	土鍬	長4.5 幅1.7 孔0.3	B?	B	完	
26	〃	〃	長5.9 幅1.7 孔0.3	B?	B	完	
27	〃	〃	長6.5 幅2.2 孔0.6	B	B	略完	
28	17号土壤	杯盤	口16.4 高3.7	A	B	X	
29	〃	杯 AbII	台11.0	A	BC	完	爪状圧縮 外延ロクロケ ズリ
30	〃	Aa	口14.8 高3.5	A	BC	X	
31	〃	〃	口14.9 高3.5	A	BC	X	

番号	出場 地点	土 種	法 量 (cm)	粘土	色調	遺存	備 考
1	18号土壤 フク上	杯盤	口12.0 3.0	A	A	完	天ロクロケズ リ
2	〃	〃	口11.5 高2.4	A	C	完	〃
3	〃	〃	口16.4 高3.2	A	ACE	X	〃
4	〃	〃	口16.0 高2.9	A	AB	X	〃
5	〃	〃	口17.2 高2.9	A	C	X	〃
6	〃	〃	口17.1 高3.1	A	B	X	〃
7	〃	杯 AbII	口15.6 高4.2 台10.5	A	BC	X	
8	〃	〃	口16.4 高4.3 台13.0	A	BC	X	
9	〃	〃	口15.5 高3.7 台9.7	A	BC	X	
10	フク上表面	Aa	口14.4 高3.0	A	AB	X	
11	フク上	〃	口13.3 高2.7	A	BC	X	
12	〃	〃	口14.2 高3.4	A	A	X	
13	〃	〃	口13.9 高3.2	A	AD	X	
14	〃	内面鏡	口17.1 高6.6 柄21.0	A	BC	X	透し12(標準)
15	フク上表面	鉢 A	口23.0	A	BC	X	
16	〃	赤土層 Ba-2	口14.0 高3.0	B	C	X	割・外延ロク ロケズリ
17	19号土壤 6	杯盤	口15.8 高3.0	A	C	略完	
18	〃	杯 AbII	口15.3 高4.0 台10.2	A	BC	X	
19	〃	〃	口14.4 高4.3 台8.6	A	AD	X	外延ロクロケ ズリ
20	フク上表面	S	口9.1 高7.0 幅5.5	BA	B	X	〃
21	フク土	蓋 B	口8.5 柄13.4	A	BC	X	
22	〃	赤土層 Ba-2	底8.6	B	B	X	内底不定方向 ナマ
23	20号土壤 6	杯盤		A	B	X	天ロクロケズ リ
24	フク土	杯 AbII	口14.0 高5.0 台10.2	A	A	X	
25	〃	〃	口15.3 高4.0 台10.0	AB	AB	X	裏台のつくり ちがう
26	4	〃	口17.3 高4.7 台12.7	A	BC	X	
27	フク土	鉢 A	口13.5 高12.3	A	AD	X	外延ロクロケ ズリ、19号土壤 底面に頸片あり

28	"	平版	深19.3	A	AB	X	10号溝に砾石 あり
29	"	直垂	口6.4 高2.9	A	B	X	
30	"	帶上端 Ea-1	口14.8 高2.6	A	A	X	外底ニビオサ エ
31	"	幅 Ax-1	口20.8	AB	C	X	正・斜方射2 段理文
32	"	"	口17.2 高4.8	AB	C	X	

第29回

番号	出場	土点	容積	法量(cm)	粘土	色調	選存	備考
1	20号上坑 フク土	帶土端 杯 Ea-1			A	A	X	外底クロ成形
2	"	十字筋 壁 AII-1	口16.5	A	AD	X		
3	"	直杯 D	深10.8	B <sub>2</sub>	A	X	杯底内黒	
4	"	ワイズ 羽口		A	A	小片		
5	"	燧石	現長 6.5					
6	フク土	"	長 6.0 径 1.7 孔 0.4	BC	A	完		
7	"	"	径 1.8 孔 0.6	BC	A	略完		
8	21号上坑 フク土	杯 Bb-1	口15.7	A	B	小片		
9	"	杯 S	口 9.5 高 6.4 底 5.7	A	BC	X	外底クロケ ズリ	
10	"	裏		A	C	完	外底不定方向 のケズリ	
11	22号土坑	杯蓋	口13.7	A	B	X		
12	"	"	口16.2 高3.2					
13	"	杯 Aa	口13.3	A	B	小片		

14	"	土端谷 壁 AII	口16.8	C	C	X	
15	"	" AII-1	口16.2	C	C	X	
16	23号土坑 フク土	杯蓋	口16.7 高2.7	A	C	X	天ロクロケズ リ
17	フク土上面	"	口17.3 高3.1	A	B	略完	天ロクロケズ リ
18	"	杯 AbII	口14.7 高4.0 合11.2	A	AC	X	
19	フク土	"	台9.7	A	B	X	外底クロケ ズリ後ロクロ ナゲ
20	"	"	台12.3	A	BC	略完	
21	フク土	Aa	口13.8 高3.0	A	B	小片	
22	"	"		A	A	X	
23	24号土坑 フク土	杯蓋	口17.0 高3.6	A	AB	X	
24	"	杯 Aa	口13.8 高3.4	A	A	X	
25	土坑群 19	杯蓋	口17.4 高3.6	A	C	X	天ロクロケズ リ
26	"	23	口16.3	A	B	X	"
27	"	壁 Ab	口23.4 高3.8 合19.0	B	D	X	生焼け
28	"	"	台9.0				
29	"	27・28	口16.2 高4.2 合11.0	A	B	X	
30	"	22	口16.4 高4.5 合11.6	A	B	X	
31	"	30	口15.4 高3.7 合10.5	A	B	X	
32	フク土	円筒瓦	口19.5 高7.3 合26.5	A	C	小片	
33	"	裏 E	口29.7	A	B	小片	



道路遠景(南方の宮地町から)



高野原を近景(北から)



調査区近景(南から)



調査区北側近景(南から)



4号土坑(西が古)



5号土坑(南が古)



7・8号土坑(南から。上:8号土坑、下:7号土坑)



7・8号土坑(北から)



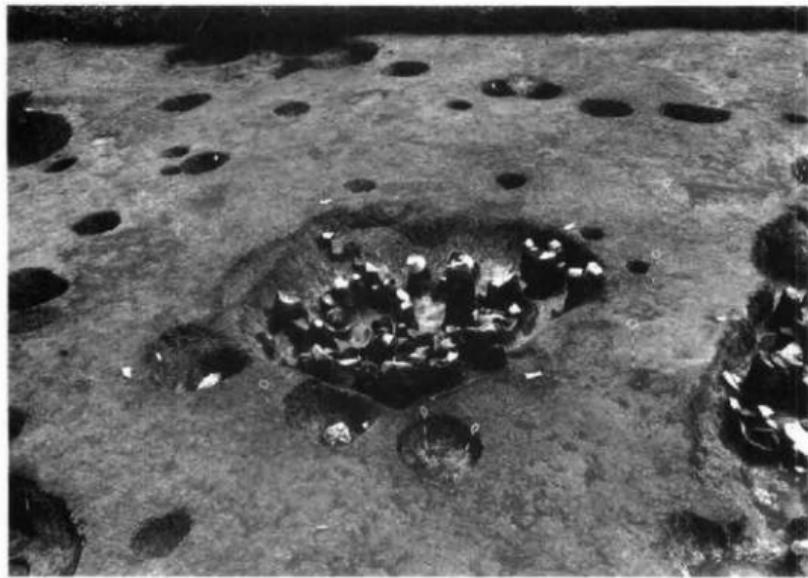
7号土坑(北から)



7号土坑(西から)



7号土坑(東から)



8号土坑(西から)



8号土坑(東かん)



8号土坑一土器出土状況(東かん)



11号土坑(北から)



12号土坑(北から)



[13号土坑(南から)]



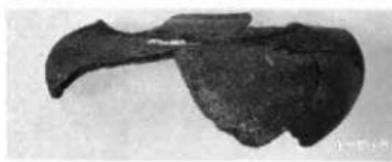
[18号土坑(南から)]



1号椭圆柱建物



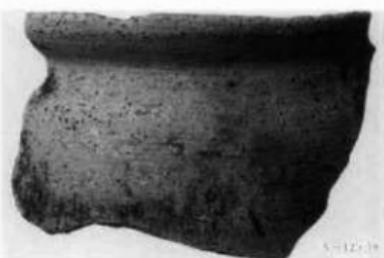
7号土坑陶马出土状况



4-10-1-8. 4-10-14. 4-10-6. 4-10-7. 4-10-17.



5-12-12



5-12-19



6-12-21



6-12-5



7-15-25



7-15-18



7-15-4



7号土块



7-15-14



7-15-3



7号土块



7-15-11



7号土块



5号土块, 6号土块, 7号土块



T-15+3



T-15+10



T-15+7



T-17+5



T-17+2

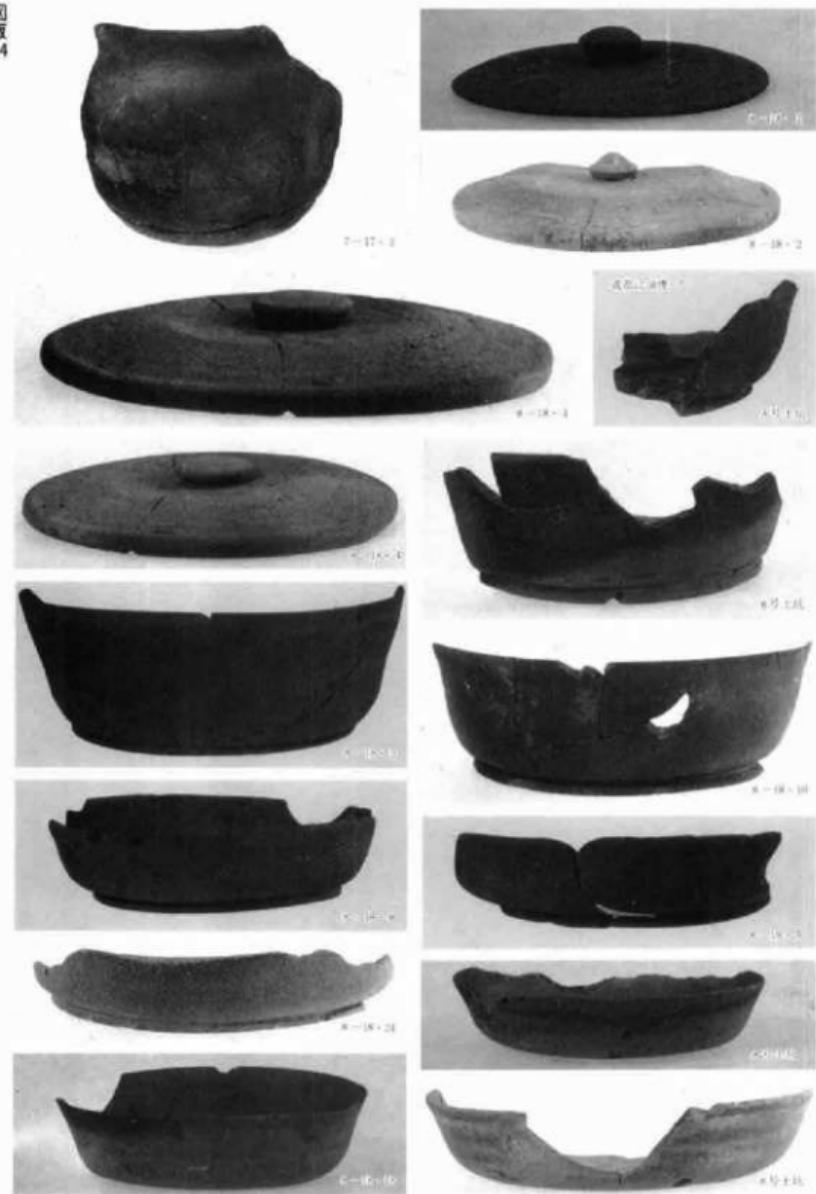


T-17+3

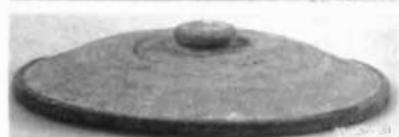
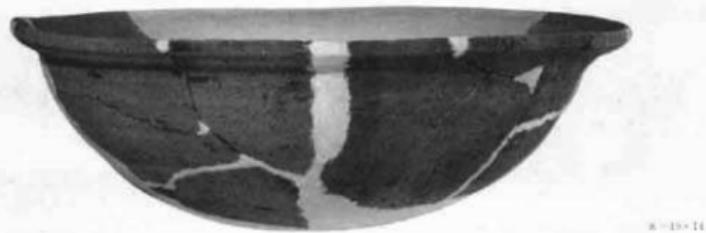
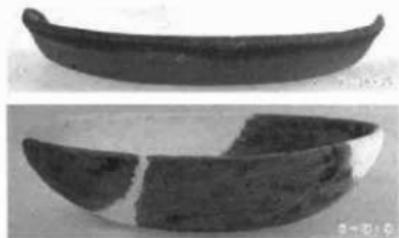
T-15+5



T-17+4

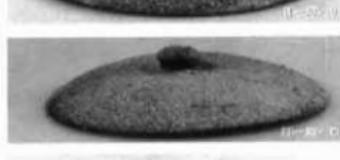
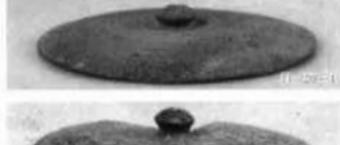
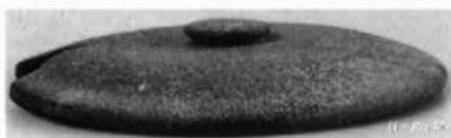
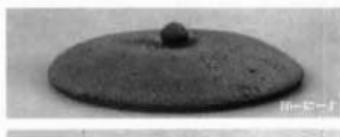


7号土坑·8号土坑

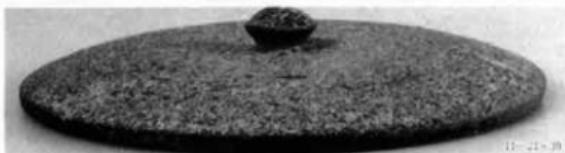
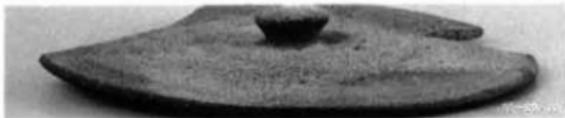


8-25-13, 8-25-9

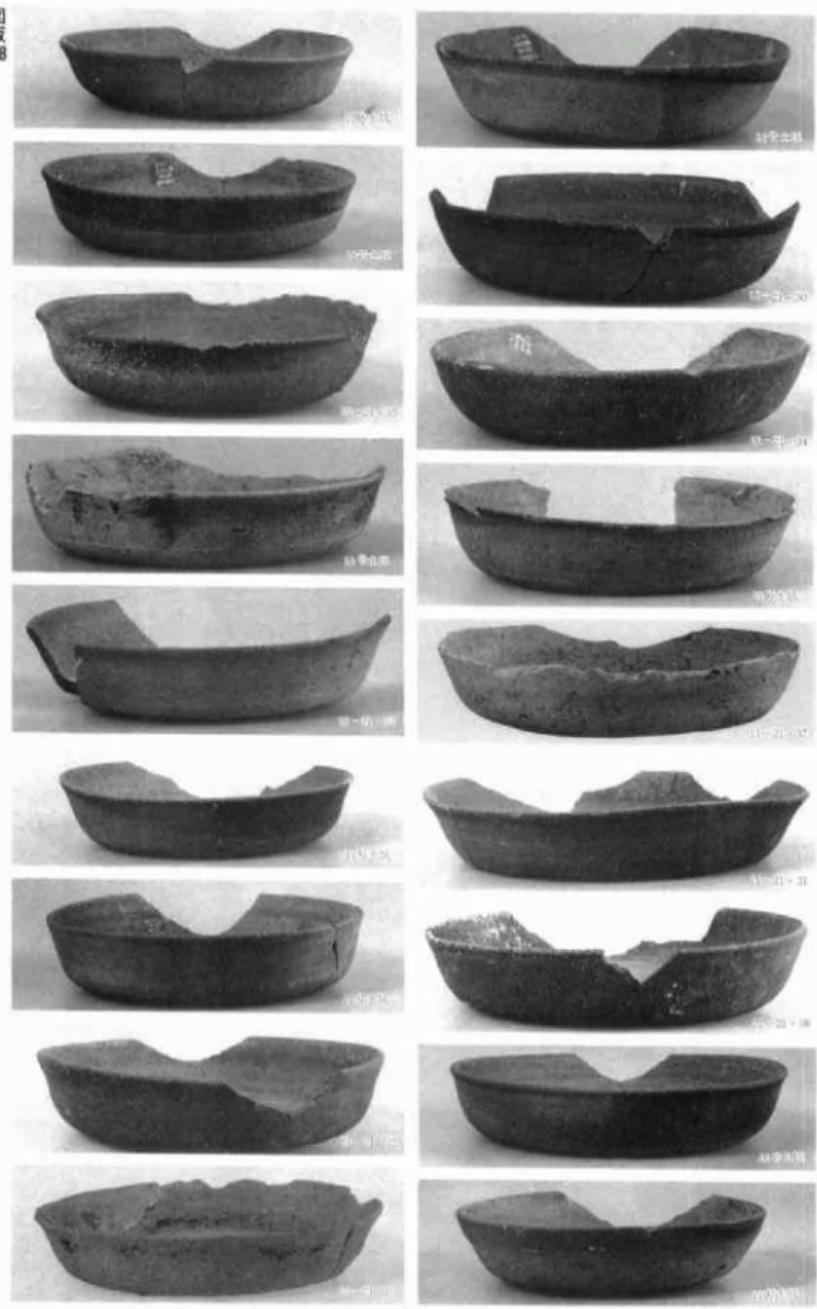




II号上层



11号土罐



18号土块



11-22



11号土灰



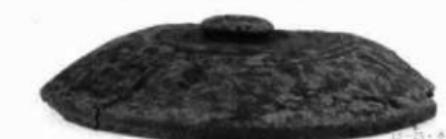
12-12-14



12-25-9



12-25-6



12-25-8



12-25-11



12-25-10



12-25-8



12-25-11



12-25-10



12-25-13



12-26-6



12-25-24

11号土壤·12号土壤



12-25+30



12号土瓶



12-23+35



12号土瓶



12-18+37



14号土瓶



12-24+37



12-25+36



12号土瓶

12号毛底、14号土瓶、18号土瓶、20号土瓶



11-23-26



11-23-27



11-23-28



11-23-29



11-23-30



11-23-31



11-23-32



11-23-33



11-23-34



11-23-35



11-23-36



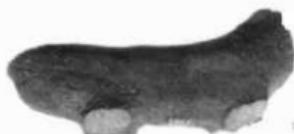
11-23-37



11-23-38

合計数など

II-23・4



7-16-3



77-29



29-34-15



32-25

石器類  
朱墨のある軒用硯

101. 7-29-8



31-11.



7-9-9

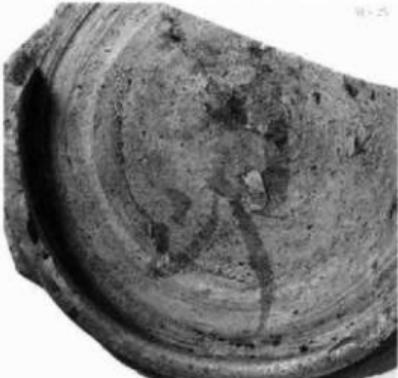
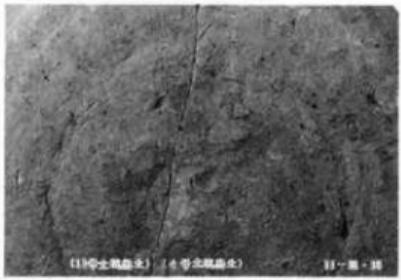
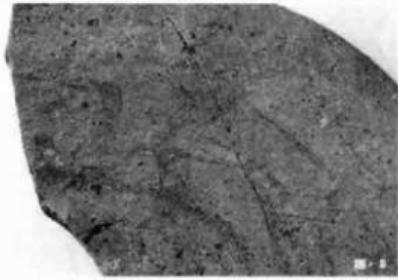
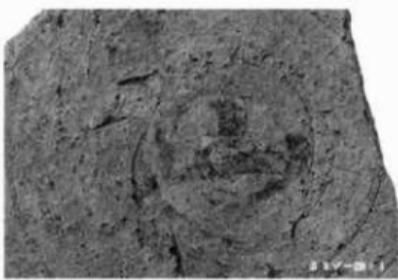


30-7-7



7-8-8

陶馬、磨製石斧、硯玉、獸舞、軒用硯(朱墨)、土鍤、墨書土器  
(朱墨のある軒用硯は4・7・9・11号土坑、10号溝、包含層より出土)



坐書上器



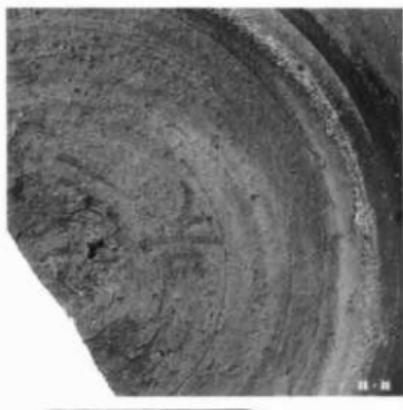
31號木植



31-1-20+32



31-1-3



31-30



31-2



31-12



31-1-16



31-1-16

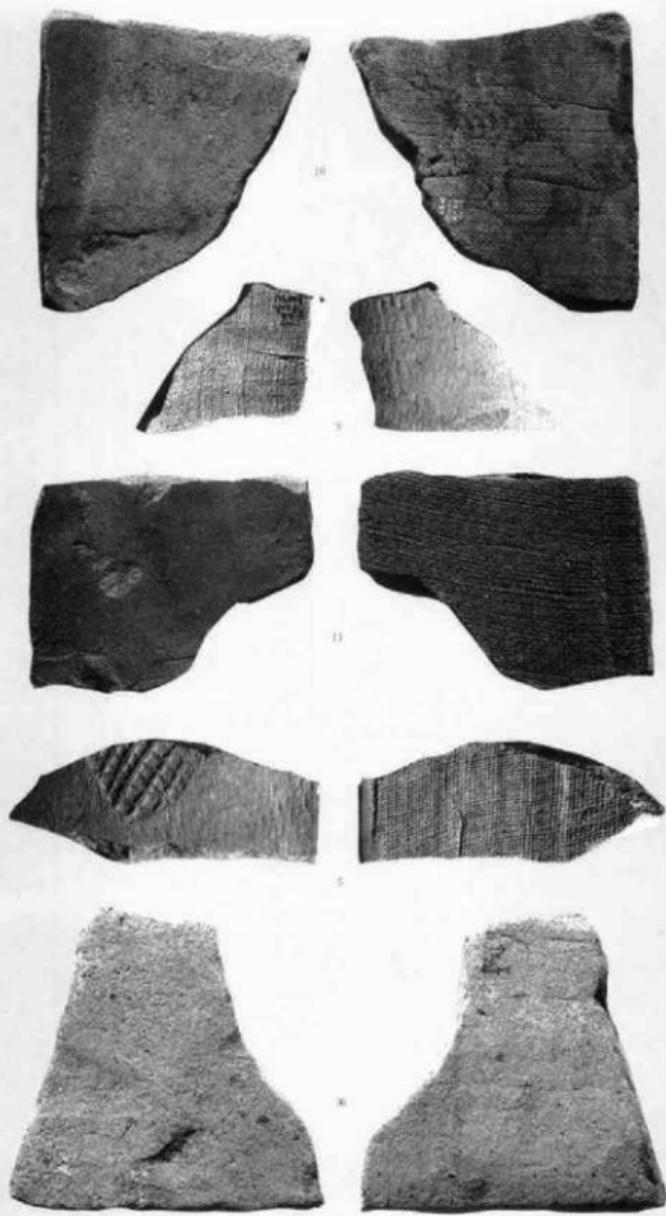
31號木植



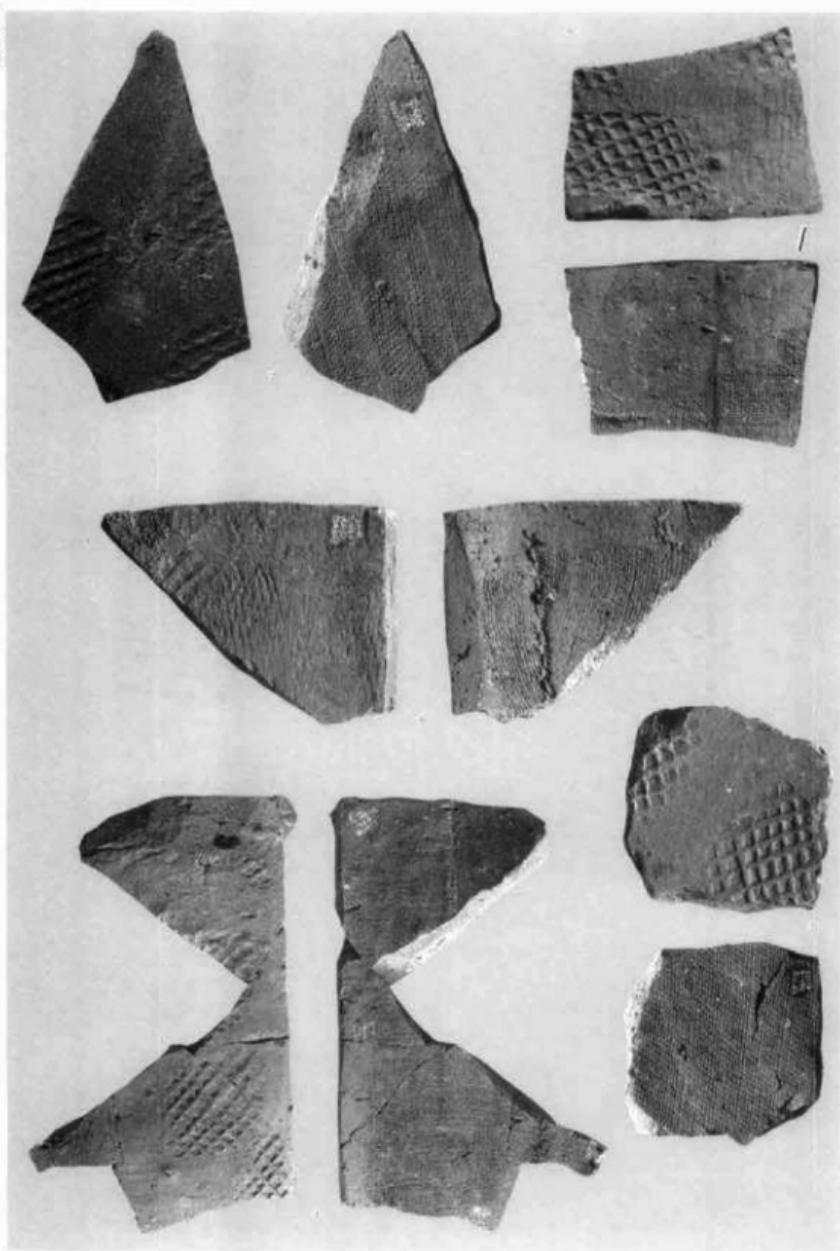
官地尾窑出土瓦当 S-7/10



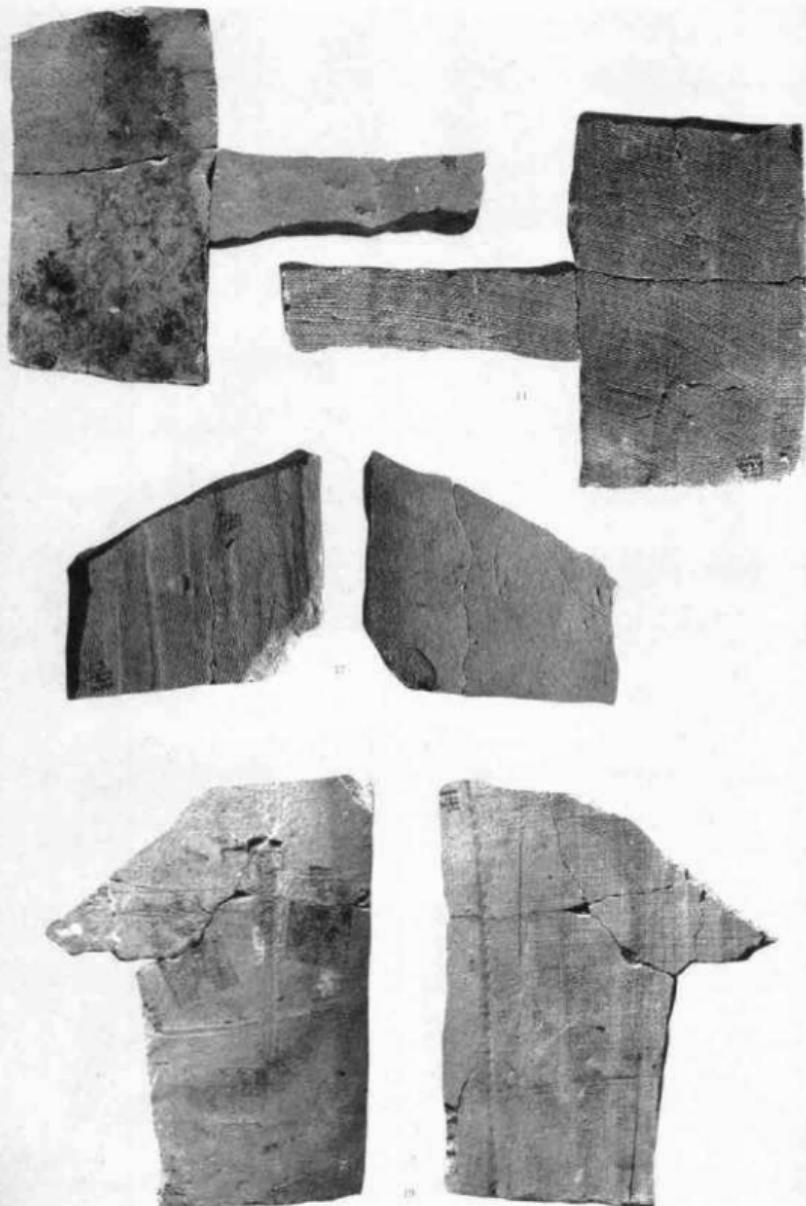
珠岸遺跡出土瓦(1) 軸瓦(S=7/10)



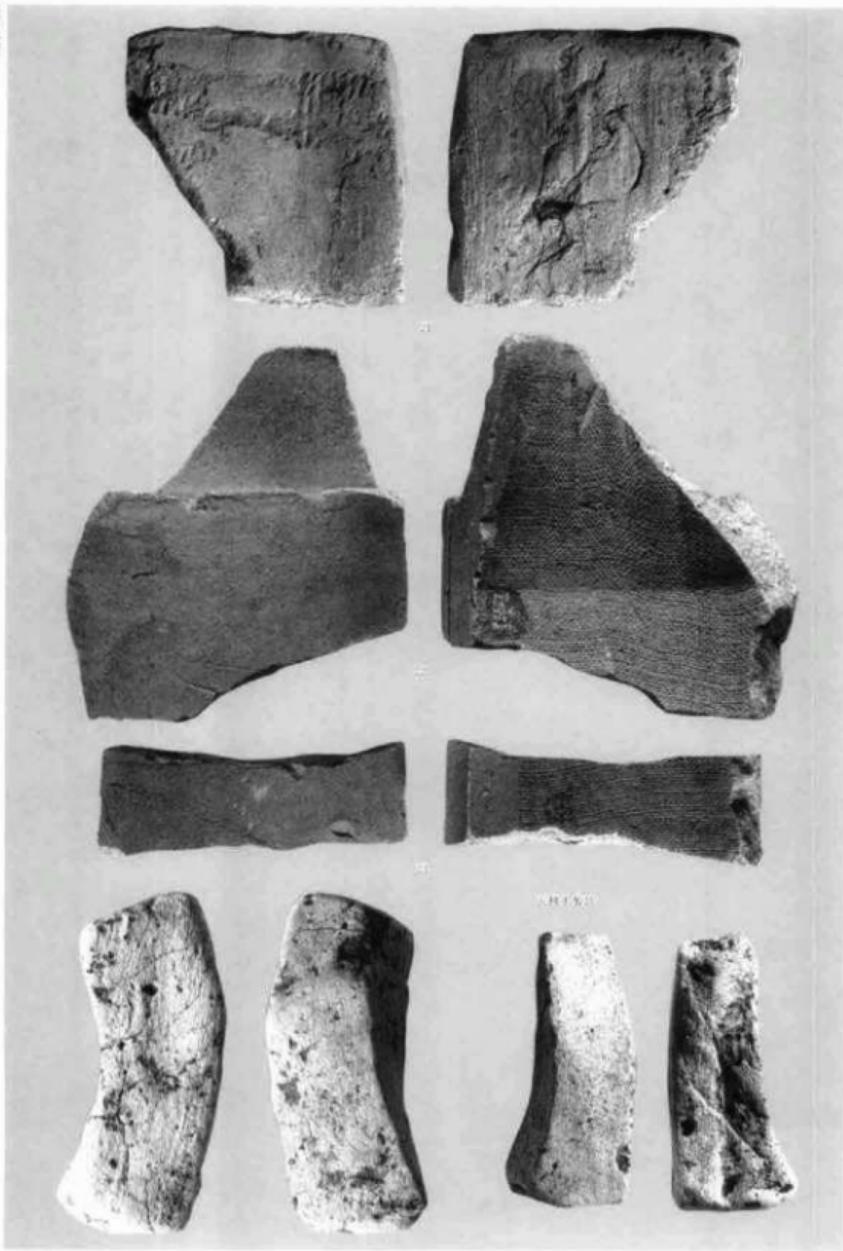
種原遺跡出土瓦(2) 粘土ひも巻上質の残る平瓦



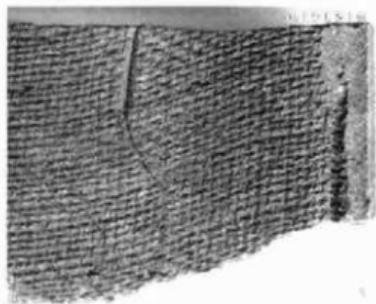
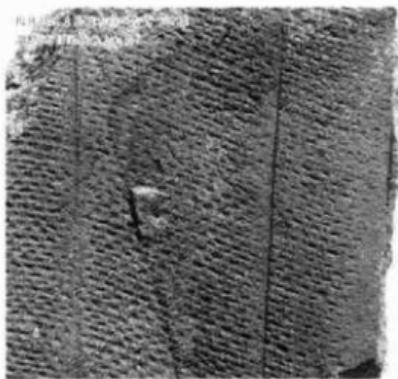
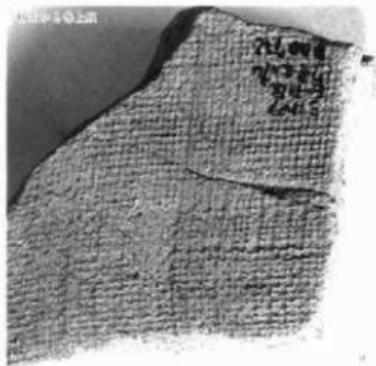
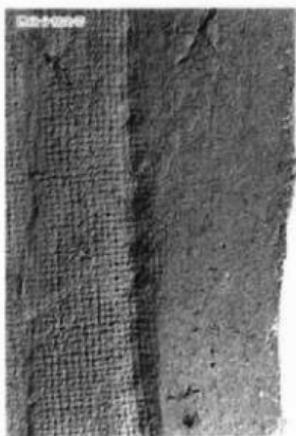
經6道輪出土瓦(3) 于五上拍



豫原直井出土玉(4) 平凡口物



淀原遺跡出土瓦(5) 平瓦類・丸瓦・瓦様土製品



採煤道跡出土品目一細部写真



## 篠原遺跡

昭和 62 年 3 月 20 日 印刷

昭和 62 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町 4 丁目 133番地  
〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印 刷 株式会社 橋本確文堂  
石川県金沢市大手町 2-35

©石川県立埋蔵文化財センター 1987